

明治三十二年十二月十五日發行

(非賣品)

加辰會雜誌

第貳拾五號

第四高等學校校友會

北辰會雜誌第二十五號目次

論 說

精神的養生法ニ就キ

三竹 欽五郎

戰爭論

扶 搖 生

老子管窺

月 聲 迂 人

史 傳

史海指鍼

浦 井 恒 堂

雜 錄

On University Rowing.

D. Haviland.

My Opinion.

Ishida.

外國語を見る上の心得、辭書を引く時の心得

た、り、

厭世雜觀

璞 哉

初歸省

鳩 比 園 人

袖のほころひ

文 苑

青 冥

山中小景

蜻 蛉 生

新體詩仙境

中 村 了

和 歌

紫 影 諸 同 人

俳 句

紫 影 諸 同 人

過俱利迦羅鑿記

村 上 函 峰

記 小 遊

竹 溪 孚

筆筒銘

石 田 墨 子 軒

漢 詩

諸 同 人

雜 報

告新入生諸君。入學式。卒業式。送舊教官迎新
教官。校友會規程。講話部第一例會。伊藤侯來
齋。演說會記事。擊劍紅白勝負。其他數件。

北辰會雜誌第二十五號

論 說

精神的養生法に就き

教授 三竹 欽五郎

人間の壽命に長短あり、又病氣災害等の實際に避くべからざるものあれども、多くは養生法に通
せざるが故に、自ら餘計の病災を招き、各自それ〱天賦の壽命を保つ能はざるなり、
人間は、肉体と精神とより成るもれなれば、其養生法に於けるも、亦此兩点を討究すべきは無
論とありとす、されど肉体に關しては、生理學者の定説に一任して、余は茲に唯精神のみに關
し、聊所感を述べべし、

人間たる何某と云ふ一物より、其何某の肉体と、其肉体に緣故ある一切の關係を排除して、其
上尙殘留せるものは何物ぞ、純正精神の成分是なり、此成分は、自他、親疎、別を絶したるもれにて、
切り殺す能はず、燒き亡す能はず、刃にも、火にも、懸ぐぬものなり、去りて、又空々虚無の
ものかと云ふに、決して然らず、喜怒哀樂愛惡慾七情を氣隨氣儘に發作して、傍若無人の振舞
を亦すもれあり、此物こそ、不老不朽にして生滅するとかく、無始の過去より無終の未來に存在
するものにして、是眞れ天壽なり、されど余は既に、肉精兩成分より成る人間其物を目的とし、
其養生法に付き話すなれば、此兩者の關係を、全然無視する能はず、知友之を察せよ、

そも、養生法の宿敵とも云ふべき大毒物は、不安心是なり、人若し大安心の極處に到達し、一翳の眼に遮るものなく、喜怒哀樂愛惡慾の七情を自由自在に發作して、しるも世道に適合するを得ば、是既に養生法の秘訣を心得たる英傑にして、聖哲とも稱すべきものあり、人の此世にある上は、絶えず順逆の兩境に出入するとは、到底免れず、さるに此兩境を併呑し、圓轉滑脱、洒々落落たる能はざるが故に、胸間毎に違順を生じて、自ら不安心を招き、生さながら地獄に墮落して、其墮落したるを覺知せざるあり、一層生來の曲れる者は、外見に平穩靜肅を裝へども、其内心の騷々しきと、恰も九國の合戦場に異ならず、其生死は日に幾度や、又或る者は、心氣逆上して厭世觀をなし、脚下の極樂本土たる覺らず、徒に死後の冥福を祈るなど、間違ひ切りたる始末あり、是皆養生法を解せざるが故に、自ら好んで天賦の壽命を短縮するものなり、

それ如此順逆の兩境に繫縛せられ、自ら不安心を招く、惡習は、遠く各自此世に出生する以前の古昔より、祖々繼承相傳したる痼癖あれば、之を打破矯正すると、固より容易なざれば、苟も進取の氣力に富み、憤起勵精して、安心の極處に到達し、養生の本懐を遂げんと欲せば、先づ大死一番して、絶後に蘇息せざるべからず、一たび大深淵に躍入して、大真珠を獲取せざるべからず、

宇宙一貫の眞理あり、日月星辰の運行、春夏秋冬の更代、人畜草木の生滅より、吾人の片言半行に至るまで、乾坤一切の事件、尽く束ねて此理に歸因せざるはあし、そも、此理とは如何なるものぞ、這般の消息は言句に絶す、若し片言雙句の唇齒に觸るゝあれば、忽ち天地霄壤の差を生ず、此眞理たる吾人の眼前に現在露出して、會て穩れず、會て去らず、明々白々なれども、吾人は既に眩惑するか故に、看了する能はざるなり、唯吾人大勇猛心を發起し、自己とは本來は何ものぞ、自己とは本來は何ものぞと、尋究し去り、尋究し來り、反覆止まず、百折撓まず、終に機運醱熟し來り、俄然乾坤を破碎し、生死を坐斷し、順逆を併呑し、三世を看破する等、未曾有の大歡喜を得んと疑ひあるべからず、茲に始めて、宇宙一貫の眞理を看了し、乾坤獨歩の自在を得べし、

されども單に眞理を看了し、乾坤に獨歩するを得とも、未だ養生の秘訣に通曉したりと稱すべからず、自己と眞理と全然契合し、自己即眞理、眞理即自己にして、一實二名なざるべからず、そも、吾人本具の天性たる、進んで止まず、萬世形を更へて圓滿を求むるもれあり、吾人己に眞理を看了すれば、勃如として一氣の胸間を衝きて來るものあり、美心是なり、此美心はあらゆる一切の智徳を完備せんと欲す、於是、吾人養生の眞修に入る、釋氏孔子耶蘇等諸聖も、亦是より出づ、眞修の士は、是亦一個の美術家なり、其目的は自己本具の明玉を琢磨するにあり、其満足は琢磨其ものにあり、何ぞ又外に求むるものあらんや、

或る人曰く、既に琢磨に求むる乃心あり、茲に不安心を招き却て養生法に背かずやと、是未だ眞理を看了せざるより生ずる所の疑問あり、元來美心の求むるや、眞理に戻らざるか故に求めて而して自ら求むるを知らざるあり、眞修して功を積まば、自己の養生と他人の養生と一致契合し、

自家の満足と他家の満足と、密接符合して一團とあり、千轉萬廻すれども其異同を見ず、古聖王の衆庶と其樂を同うしたる所以のもの、實あり、於是、幾んど養生の秘訣に達せりと謂ふべし、萬境に轉々して無事平懷なると、宛も三更月高く、萬象を遍く照らすが如し、何等の違順のあらん、己に違順なし、何等の風流か之に比せん、既に風流三昧あり、何等の養生の之に加へん、」以上の大体は、古來聖哲の既に稱道する所なり、悲い哉、余の下根ある、大勇猛心に乏しく、數年の刻苦は、漸くに此養生法の實効を確認したるに過ぎず、眞修の工夫に於て、時々刻々蹉跎するを、切に遺憾とす、幸に同窓れ中、余と感を同うするの士ありば、乞ふ驥尾に附し、益自ら鞭撻を加へて、天賦の壽命を全うせんとを、余は過度の神經質にて、且多病の身ありしか、四五年前相應の名醫より、肺病又ハ脊髓病など、世には最も嫌忌せらるゝ患者ありと診斷せられしとあり、又實兄は、脊髓病、實姉及姪二人は肺病にて斃れたり、さるに、下根れ余が、此稿を終了する時までは、慥に無病息災なるを見れば、各自纔に此養生法を信するのみにても、既に多少の所得あるとを證するに足るべし、そも、自己とは本來は何ものぞや、」

戰 争 論 (承前)

扶 搖 生

戦争と文學と。

(一) 戦争と時勢。

深淵のらざれば蛟龍潛まず、森大ならざれば豺狼住まず、大なる文學は大なる國民に依りて溶鑄

さるゝもの也、何ぞや、文學は國民性情の反映也、國民に代りて其理想を發表するもの也、此故に政治法律が如何ばかり齊整したりとて、帝王の威權が如何ばかり赫灼あればとて、又猛將勇士雲の如く出で、歴史の異彩を成したりとて、若し其國民にして氣魂小に、精力甚だ微、塵世の任務に困殺せらるゝを知るも、悠然として心を理想境に遊ぶの餘裕なく、若しくは外界の現象を窮屈なる主觀に萃むるを知りて、客觀美の何たると了得する能はざらんか、彼等は到底永遠の春光、無限の感想を文學の醇雅なるに托して後代の民衆に誇るの榮耀を有せざる也、文學は國民生活の餘裕を示すも也、激越奮揚せる武的精神は外に、一種甘美の情熱あることを顯はすもの也、雀は海に入りて蛤と成るも、鳥の子に鷺は生まず、埃及は露骨にして趣味なき金字塔と險怪不思議あるスフィンクスの外、何等美的産物を吾人に殘したる乎、支那人の効利的訓戒的なる、詩經の一部と、歷世の騷人が翻々たる短詩の外、幾何の貢獻を文學史に致したる乎、要之、文學の寵兒は、自由を喜ぶの國民あり、進歩を願ふの國民あり、好奇心に充たさるゝの國民あり、然れども、國家に隆替あり、時勢に盈滿なき能はず、文學獨り之に超然たるを得る乎、否々大に然らず、文學は一面國民性に依りて規定せらるゝと共に、一面に於ては顯しく時勢の消長に關聯す、恰も之れ二個マダグチットの装置が一個の鉄片に働くに異ならず、而して其如何なる場合に近き、如何ある場合に遠りる乎、之等特種の問題を一々羅列せんは極めて徒勞の業ある可き、予輩は此に一言して止まん、國民の黄金時代は即ち文學の黄金時代なり、而して國民の黄金時代は大戦勝に繼ぎて來る可きもの也と、蓋し國家の威風甚だ振はず、民心の意氣激昂せざるの時に當りては、文

學果た其弊を受けて、思想の獨創と稱すべきものなく、詩歌の三世不朽なるものなし、疊々布滿する天下の書籍、摸倣盜竊、鸚鵡の口真似に非ずんば、不健全にして厭味あるニキビの副産物に過ぎざらんのみ、是を以て、エスキルス、ソフオクレス、エウリピデスは、マケドニアの覇圖時代に出不ずして、ペリクリス時代に出で、ゾイルギリウス、ホラチウスは、デオクレシアン朝に出でずして、アウグスタス時代に出で、ユルネーユ、ラシーヌ、モリエールは、ルキ十五世の代に出でずして、ルキ十四世の時代に出でたり、而して、ペリクリス時代や、アウグスタス時代や、ルキ十四世時代や、皆之れ火鐵と鮮血とを以て買ひ得たるものとすれば、戦争の文學に於ける間接の關係も亦明かすや、讀者若し英國史を繙かば、更に剗切なる事例を得ん。

エリザベス朝に於ける文學の盛觀は今更なれば言はず、學者其因りて來りし所を推究みて、宗教改革の反動と、文藝復興の余波とに期を、然り、北歐の森林より捲き來りたる宗教改革の暴風は、エリザ朝文學も多少は影響する所ありしなむ、果た、伊太利の野に起れる文藝復興の叫は、一時銷沈したる英人の脉管に、アングロサクソンの天才の血液を鼓動せしめしなむ、新大陸の發見も、印刷術の發明も幾分うまた、文運開發の導火線たりしなるへ、然れども、誰か之を爲に當時の英國が戦勝の光榮に浴しつゝ、ありしことを忘るゝものぞ、見よ、蘇王メリーガ獄裡の大陰謀は、老手ワルジンハムの暴露する所とありて、滿天下再び帝坐を窺奪するもの無きに非ず耶、百二十の鉄艦は、アルマダの夕嵐に覆りて、フイリップが沖天の羽翼は早く碎かれたり、斯くて天佑と人運とは此處女王の一身に湊會して、金甌無缺の平和と、榮光は隣邦の羨望と曳きぬ、國

民の意氣の大に奮揚し、新しき希望、美しき理想は、彼等をして樂天的、現世的に傾かしめ、異懦は大膽と成り、溫柔は矯滿と變下、自由、放浪、好氣心、進歩の思想は到る處に滂濺しぬ、斯くて此處女朝の全盛を歌ふべく、千古の詩人沙翁は生れたり。

嗚呼、大なる文學は、大なる國民に依りて歌はる、其戰捷の時代に於て、其黃金時代に於て。

(二) 戦争文學

天地の英靈を發揮し、人情の麗美を詠トて、人類の生活に一味は情趣を與ふるものは、言ふまでも無く文學の本領あり、詩人は即ち此神聖なる天職を果さんが爲に生れたる者、或は天然を歌ひ、或は人生を語り、或は祖國或は忠孝、其選ぶ所の題目に至りては一ちかすと雖、究竟する所、何れもミユズは私語に非ざるべき、而して吾は惟らく、宗教と戀愛は文學の二大椅子ありと、今夫れ、仰ぎては天淵し、伏しては地大あり、星辰燦然として連り、艸花永へに笑ふ、世に神無き乎、日出で日没し、月虧け月滿つ、何ぞ夫れ整然たる、抑も夫れ世に神在る乎、白雲東に湧き西に消え嘗て定處あらず、嗚呼、吾之を天に問ふも天答へず、地に問ふも地語らず、寂々黙々、眞個に之れ千古の疑問、古來穎達の大入、幾たびか此大問題を解釋し、以て自己信仰の立脚地を確乎不動の地に立んと試みたり、試みんとして克ばず、彼等ハ煩悶せり、懊惱せり、斯くて宗教は起りぬ、斯くは如き宗教の幽玄にして眞率なるものあるは固より其所、今若し此幽玄にして眞率ある宗教思想を移して文學の園に養は、如何はあり意味深き果を結ばらん、去れば古來文學を以て宗教思想を諷詠するもれ多し、否、何れの邦國に在りても、其原的時代にありては、顯しく文學と

宗教の混淆を見る、人歩漸く其歩武を進め、知識は臆げながらも、萬物を説明し、哲學は宇宙問題に幾分か光明を與ひ得るに及びて、文學も宗教とは漸く獨立したりと雖も尙ほ不斷の交通を怠らず、パレストチナは抒情詩が如何に莫大の感化を西歐の民に及ぼしたるかは暫らく論せずとするも、ミルトン氏の傑作が幾萬の精靈に精神的パブリスマを與へざりしもの、パンヤン氏のビルダクムプログレッツスが、其平易なる文字を以て、各口に喧傳せられざりしか、之を要するに宗教文學は尤も沈痛なり、崇高なり、人を動かし易し、然れ共、宗教は固一端に非ず、一宗教あり、多し嚴然として藩書を堅くし、互に相融解けることを爲さず、宜し、其宗教的精神の熱烈なるに至りては同トと雖、主義信仰の立脚点は異に在るが故に、彼此感情の自ら調和せざるあり、道理の分明なざるあり、従て彼等が同一の宗教文學書を樂まんと欲するは極めて困難の事なるべし、失樂周の險晦なる文字と耶蘇信者に非ざれば其真趣を悟り難しと聽く、吾は是に於ての希臘の學者が文學は共通の性を有すといふ定義に依憑して宗教文學を拒まんと欲す、然るに戀愛文學は如何、戀愛は人生の尤も麗はしき粧飾あり、あらゆる趣味に噴湧する源泉あり、若し人は考ふるに理性を以てし、決するに意志を以てするといふのみにて、其間一點愛情の眞珠の輝くもの無くんば如何なる吾人は殺風景のものなりしか未だ知る可ざる也、戀愛は實に詩歌の寵兒あり、然れども寵兒は氣儘なり易し、戀愛は人間の美点あると共に又弱点なり、彼の熱烈にして誠あり、眞率にして純白なる戀は固より珍とすべく又以て詩囊のものれと爲すに足ると雖、世の年少婦女子動もす

れば、輕佻艶猥に馳せ、不義逸樂を貪り視然として戀愛の神聖をいふ、詩人即ち詳に之を點染摹寫す、作る處のもの爛熟腐潤、理想も無く、至誠も無し、嘗に寸毫の裨益を思想界に貢獻せざるのみならず、不健全なる思想を世に流して、年少弱志の輩を邪路に導くの罪決して少くもせざる也、夫れ宗教文學は深奥なりと雖、汎通の性質を缺きたり、戀愛文學の効果は緒々の喝仰を満足するにあれど、浮薄に流れ易さを如何にせん、今夫れ宗教的の偏狹あるを惡み、戀愛の輕佻あるを厭ひ、慨然として吾か思想を醫するに足るものなきを歎するものあらば、吾等を果た何等の手段を以て、此を救済す可きか、吾等は之に刺劇を談め、歴史小説を談め、愛國歌を詠ぜよと言はんぞ欲す、戦争文學は壯健なり、雄烈なり、壯烈あり、其上あるものは字々風霜を挾み、句々金鉄の響を爲し、能く鬼神を泣かしめ、海若を舞はしめん、若し夫れ其下あるものと雖、尙ほ陋巷の志氣を奮興し、心胸を爽快にするを怠らず、之を宗教文學が時に險怪の觀念を抱かしめ、戀愛文學が民心を消磨沈滞せしむるの憂あるに比すれば其効果も幾何ぞや、若し吾言を聽かば、或は文學を以て應世的たらしむるもの成さんも之れ誤れり、吾等は却て彼の文學獨立説を拒む者は笑ふもの也、然り而して、吾等が而かく口を極めて戦争文學を喋々する所以のもの豈他あらんや、宗教に無き、戀愛に無き一種の特長を有すれば也、「海行かば」の歌が如何に萬葉時代の勇しき心を奮ひ立たしめしや、一種の叙事詩ともいふ可き、源平平語が、鉄鞋六十州を踏み破りて堅膽を鍊り、月下秋水を拭うて詩を嘯く大和男兒に如何ばより愛談されしや、落日照大旗、馬鳴風蕭々悲歌せば、吾等は明月中天に懸りて夜寂々、號令明にして壯士驕るる霍燥將軍が

營幕を揚望せざれば非ず、右大將の歌も儒夫の昏迷を針砭し、山陽の兵兒語は怯夫として躍つて立たしむ、若し夫れ當年昇平校に在りて、日夜項羽傳を誦談したる無數の健兒は、即ち之れ彼來破天荒れ活劇を演じし、六十州の山河を根抵より震撼搖盪したる俳優たるを想は、戰爭文學の効蹟は歎美と驚愕とに余りあらん、然れども之れ戰爭文學の本領に非ず、只景物れみ、餘興のみ、純文學としての戰爭文學の價值は嚴然として存在し一毫を宗教、戰爭の夫れに讓るものに非ざる也、彼のホーメル氏の著書、沙翁の史劇、若しくはバイロン詩集、キョルチル、アルント諸氏れ作が、如何なる位置を文學史上に占め得るやを觀察するものは、吾言の誤ならざるを知む、吾は戰爭文學の題目の下に、尙ほ聊の論ずる所あふんとす。

老子管窺

美 島 月 聲 迂 人

略 叙

自太極權輿上元開闢、舉天維而懸日月、橫地角而載山河、一消一息之精靈、上生下生之氣候、固以則成庶類、亭毒群品、有人民焉、有君長焉、至若上皇邃古夏巢冬穴、靜神習智、鶉居鵝飲、大禮與天地同節、非折疑於俎豆、大樂與天地同和、豈考擊於鐘鼓、逮乎失道後德失德後仁、皇王有步驟之殊、民俗有淳醜之變、於是儒墨爭鶩、名法并馳、禮經三百、不能檢其情性、刑典三千、未足息其奸究、故知、潔其流者澄其源、直其末者正其本、源々本々、其惟大道乎(下略)、堯舜以前の事は、邈茫として今遽に信を措き難しと雖も、長河の滾々たるは、其源濫觴れ洄々

たるに發し、烈火の炎々たるは、其端燧木の熒々たるに起る、物必ず其本源あり、事必ず其端緒あり、按ずるに堯舜の義禮道德は、無意識的にして、殷周れ義禮道德は、意識的なり、われ思ふに夫の周末の病源は、此時代の意識的義禮道德に胚胎せるならん、周公逝きてより人心は周政に倦み、彝倫廢頽を極めて、王法又行はれず、侯伯野に跋扈し、俊豪英邁の士、四圍に讒起し、天子唯質を委ねて、威信を天下につなぐれみ、歲改月化、生靈また周れ君たるを知らず、王道滅裂、復た天下億兆を羈束するに足らず、各所信を唱導し、異説を馳せ、奇辨を闘はし、競争舐排、以て勝を百世に制せんことを務む、此れ時に當り、孔老の二家起れり、孔子は蕩廢せる周道を回復して、堯舜の治に接せんとし、老子は周道既に壞滅の端を含めりとして、直ちに堯舜の無爲の化に倣はんとせり、世或は老子獨己れを脩むるを知りて、人を治ることを知らずと誤解せるもの多し、然れども老子の本意は決して然らず、單に善惡の準繩を主觀ある本然の心に求むるのみあり、清の徐大椿老子經註を撰みて曰く、『老子之學、與六經旨趣各有不同、六經爲中古以後文物極盛之書、老子所以養生脩德、治國用兵之法、皆本上古聖人相傳之精意』と蓋し老子の説、六經の旨趣と不同は姑く之を置き、老子の養生脩德治國用兵之上古聖人相傳の精意に本くと爲どもは、紀籒の四庫全書總目に其務めて高論をなすを免かれずと譏れるも、是れ未だ遽に其の然るや否やを決すべからざる者にして、學者の宜しく深思講究を要すへき一問題かりと云はん、乞ふ老子れ人物に就て少しく云ふ所あらしめよ。

道德經の著者李伯陽の年代及び其生涯に關して、其傳記詳からず、爲に異説紛々其正邪を判るる

に困む、司馬遷二千載の昔、史記を著す、書中老子傳あり、みれ古來の學者多く典據する所あり、
『老子者、楚苦縣厲鄉曲仁里人也、姓李氏、名耳、字伯陽、諡曰聃、周守藏室之吏也、(中略)老
子脩道德、其學以自隱無名爲務、居周久之、見周之衰、迺遂去至關(下略)、
亦禮記會子問の條に曰く、「われ諸を老聃に聞く」と云ひ、また「弟子傳」に、

『孔子之所嚴事、於周則老子、於衛蘧伯玉、於齊晏平仲、於楚老萊子(下略)、』

より推測を下すも、また孔丘の老聃を訪問せし時の對話上より見るも、當時孔丘は、老聃の俊輩
たりしや、敢て疑を容れず、亦老子の降誕に付、劉向及び薛道衡は唱ふる所を見るに、(上略)老
君星に感し、藏誕して受氣の由を測ること莫し、樹を指して姓とあし、未だ吹律の本を詳にせず、
靈を含み、孕に在る七十余年、生れて白首にして面貌黃白色あり、額に參牛の遠理ありて、日月
の角懸長耳大目、鼻は純骨雙柱にして、耳に三漏門あり、美鬚廣額にして、齒疏に、口方に、足
に三五を踏み、手に十文を把れり、爰に伏羲より周氏に至りて、綿祀歷代、眞を見て名を變ず、
文王武王の時にありて、藏史柱史の職に居り、南朝屢易容貌改めず、宜尼一たび睹て、龍徳の知
り難きを嘆ず(下略)、又「捨遺記」に於て、王子季は書して曰く、「老君景室の山に居れり、迹をつ、
め、唯ぞ老叟五人、或は鳴鶴に乗り、或は羽衣を着し、夫れ天地の數を譯し、撰する所の經書、
十萬言に垂んとす、浮提國善書を献するもの有り、二人乍に老乍に少、形を隠すときは則影を出
し、聲を聞くときは則形を藏と、時金盃を出す、器中黒汁有り、狀も淳漆の若し、木石に洒き、
皆篆隸科の字を成し、造化人倫れ始を記す、老君れ撰する所の經、皆寫に玉牒を以し、級に金繩

を以し、貯るに玉函を以と、金盃の汁盡るに及んで、二人れ心を割き、血を瀝て以て墨に代へん
と欲す、これ乃ち洛州景山大室少室なり、説く所の九變長生等の經は百萬篇あり、多く名山の石
室に藏め、而して秘して行はず、今出る所の者は約めて六千卷(下略)、みれ經文の以其脩道而養
壽の語によりて、老聃の跡をして神秘的に附し去らんとするにあらざるなきや、

x

x

x

x

曠世の二聖、渾圓球上に邂逅して、其唱導する所を見ん、先づ孔子は、其理想とする所の社會
國家を實際に構成せんとするものにして、其蕩廢せる周道を昔に歸復し、唐虞三代の政治に接せ
んとせり、而して堯舜禹湯文武周等は、孔子れ崇拜せる人物あり、故に曰く、「君子三畏あり、天
命を畏れ、大人を畏れ、聖人を畏れ、聖人の言を畏る云々」、「述へて作らず、信して古を好む」と、
これ後世儒教が常に古を好み、進歩的のことを嫌ふは、この理想に遠因するにあらざるなきや、
故に支那人は社會の風潮の推進を共に、政教の變遷するを好まず、一意成憲に法りて其教義

を實行せんと擬す、是を以て上は廟堂の諸公より、下は一布衣の士に至るまで、其理想とする所
は、唐虞三代の國家及び個人あり、孔子「吾れ生を知らず、焉ぞ死を知らん」と云ひ、「不語怪力亂
神」と云ひは、現世主義の「モットー」として見るを得るなり、老子の學は、孔子の學に比し、多
少純理の哲學に關する思想を有し、又明晰なる世界觀を有し、「道德經」八十一章の主旨は、世に
處し、生を全ふするの道を講したるのみにして、周道既に腐敗の端を含めりとして、一躍堯舜無
爲の化に倣はんとせり、孔子は樂天的にして、老は少しく厭世的なり、これ地理的影響に據る

なふんの、試みに支那の揚子江によりて二分せんに、北方は寒冷にして礪礪あり、南方は豊沃にして温暖あり、これを以て南方は人民の生活安樂にして懦弱に流れ易く、輕躁にして快豁の想像に富むと雖ども、北方は土地礪礪加ふるに寒冷の氣候を以てするが爲め、人民概して着實勤勉あり、故に北方は儒教の如き、世間的實際的の教起り、南方は道教の如き、出世間的(?)の學説起れり、されは楚風と周風とも云ふへき二大特色の當時支那れ全般を彩れるは、疑ふへくざるに似たり、實に周風の秀靈は、集りて孔子孟子となり、楚風の精粹は凝りて老子莊子となれり、司馬誕曰く、

儒者博而寡勞、勞而少功、是以其事難盡從、然其序君臣父子之禮、列夫婦長幼之別、不可易也、道家使人精神專一、動合無形、膽足萬物、其爲術也、因陰陽之大順、采儒墨之善、攝名法之要、與時遷移、應物變化、立俗施事、無所不宜、指約而易操、事少而功多、儒者則不然、以爲人主天下之儀表也、主倡而臣和、主先而臣從、如此則主勞而臣逸、至於大道之要、去健羨、紬聰明、釋此而任術、夫神大用則竭、形大勞則敝、形神騷動、欲與天地長久、非所聞也、夫儒者以六藝爲法、六藝經傳、以千萬數、累世不能通其學、當年不能究其禮、故曰博而寡要、勞而少功、みれ當らずと雖ども、又遠うらざる評ならずや、仲尼曾て敬叔に謂て曰く、

吾れ聞く、老聃は古に博く而して今に達し、禮樂の原に通し、道德れ歸を明にす、則ち吾が師なり、敬叔魯の君に言て曰く、孔丘は聖人の後將に達せんとする者あり、先臣の命を受け臣に屬す、則ち必ず之を師とせよと、今孔子將に周に適て先王の遺制を觀、禮樂の極る所を考へんと

す、斯れ大業なり、君盍ぞ車乘を以て之に資はさる、臣請ふ與に往のん、魯君車一乘二馬二豎子を與ふ、敬叔俱に周に至て、禮を老聃に問ひ、樂を囊弘に訪ふ、郊社の所を歴、明堂の則を考へ、朝廷の度を察し、明堂四門れ墉を觀るに、堯舜桀紂の象あり、各善惡の狀、興廢の戒のあるなり、又周公成王を相し、之を抱て而して斧戣を負ひ、南面して以て諸侯を朝せしむるの圖あり、嘆して曰く、吾れ乃ち今周公の聖と、周の主たる所以とを知るあり、將に周を去ふんと、老子之を送て曰く、『富者は人を送るに財を以てす、仁者は人を送るに言を以てす、吾れ仁者の號を竊み、子を送るに言を以てせん。』『凡當世之士、聰明深察而近於死者、好議人之非者也、博辯閎大而危其身者、好發人之惡者也、爲人臣者、无以有己、爲人子者、无以有己。』孔子周より魯に歸りて道彌尊く、遠方弟子の進むもの蓋し三千なり、孔子嘆して曰く、

自南宮敬叔之乘吾車、吾道加行、不然吾道幾廢矣、

今「禮記」に引く所、『吾れ諸を老聃に聞けり』と、皆是れ孔子は老子に問て禮の要を得たるなり、

司馬遷曰く、孔子適周、將問禮於老子、老子曰、子所言者、其人與骨皆已朽矣、獨其言在耳、且君子得其時則駕、不得其時、則蓬累而行、吾聞之良賈深藏若虛、君子盛德容貌若愚、去子三驕氣與多欲、態色與淫心、是皆無益於子之身、吾所以告子、若是而已、孔子去、謂弟子曰、鳥吾知其能飛、魚知其能游、獸吾知其能走、走者可以爲罔、游者可以爲綸、飛者可以爲矰、至於龍、吾不能知其乘風雲而上天吾今日見老子其猶龍邪、

遷や天下の放失せる舊聞を網羅し、其成敗興壞の紀を稽へ、亦以て天人の際を究め、古今の變に

通じ、一家の言をちさんと欲すと云へるが如く、其力を史筆に用ゆるや、專且の深なり、後世宋の蘇轍稱して遷の文章疏蕩にして奇氣ありと云へるが如し、時に或は其筆力雄健馳聘、縦横自在あるが爲めに、往々學者は讀むに苦む所代ものなり、老子列傳の如きは、即ち其一あり、薛道衡及び司馬遷の文に依て、孔子老子二聖の交情如何を推度するに難からざるなり、(孔子對老子)

孔子の教は、年を歴、世を彌りて、愈彰はれ、正々堂々として乾坤と其大を争ひ、日月と其明を競ふ、巍乎たる岱山以て其高さを比するに足らず、沛乎たる河海以て其深さに喩ふるに足らず、赫々たる秦皇の威武も、之を滅する能はず、堂々たる漢高の雄略も亦之に加ふる能はざる所以のものは、曾參端木賜卜商等七十子の徒、各處に散在して諸侯に遊説し、あつ子思は中庸を述べ、孟軻の七篇を著はし、邪説を息め、淫辭を距くを以てにあらずや、之を以て遂に『自天子王侯、中國言六藝者、皆折中於夫子』と、遷をして賛せしむるに至れりと雖も、老子に至りては然らず、寂たり、寥たり、之れを釋するに迹なく、之を求むるに聲なく、年を逐ひ、世に隨ひて次第に衰頹し、湮晦して僅に怪誕無稽の仙教なるものに頼て其姓名を留むるまことを獲たり、莊子の學、其本源を老子に發し、列子の一派を併せて、奔流汪洋、一大水となる、老子固と鄒魯學術の實際的方面に反せる、一異色を帯びたる説を唱ふ、その論や頗る玄妙幽邃なり、然れども其言簡に失す、列子これをついで説を立つ、其文頗る暢達す、然れども其説や未だ淺薄たるを免れず、莊子出て、儒學を窺ひ、老子に本いて説を立つ、其言や奇矯に失するのきらいありと雖も、之を玩讀せ

は自ら趣味あり、實に莊子は支那當時の一大思想家と稱するを得へし、

莊子は嚴肅なる哲學者にあらざるあり、彼は聖賢を愚弄して自ら快どし、放言高論、一世を輕侮し、其時勢に憤慨するの極、遂に冷談なる傍觀者とありしなり、然れども尙ほ一種の天才と稱するを得べし、彼は單に文章の上より之れを觀るも髓に一の模範を後世に與へたりと云ふべきなり、安井息軒老聃を論して曰く、老聃非隱者也、細玩其書、皆憂世慨時之言、但其志時在言辭之表、若讀者不能迎之耳、(中略)而其以賢知自高者、噉々然唯理之求、不復問其事如何、於是莊周得其無聖之言、以成猖狂自恣之學、韓非得其核實之説、以成慘酷少恩之法、(孔丘の學其大にして而能く廣きや、後の學者孟子を得て以て其入る所を知るを得るの幸に接せり、老聃の傳よく其宗を得る者、千載の上萬古の下、夫れ幾何か蓋し之あらん、今年と追ひ世に隨ひ、衰頹湮晦、原遠くして而して未益分離す、獨り莊周の書稱して稍其宗を得たりとあすと雖も、毫も救済に益なし、これ『吾豈辨を好まんや、止むを得ざるなり、能く言ふて楊墨を距くものは聖人の徒なり、』と云ひ、『天もし天下を平治せんと欲せば、今の世に當て我を舍きて誰ぞや』と喝破し、戰國の世、生靈塗炭の困苦を救はんとし、孔丘の教漸く衰ひ、楊墨等の説盛なるに於て、之を異端邪説として極力之れが排撃につとめたる孟軻は、孔子教に對しては大忠あるも、支那學術の爲め鼓旗堂々、其罪を問はずんばあらず、(老子對莊子)

一、老子の政治論。

平王東遷せしより、周室愈衰微して振はず、十余世を経て威烈王に至る、其間諸侯跋扈し、周室

之を制すること能はず、王の肩を射るものあり、鼎は輕重を問ふものあり、臣を以て君を弑するもれあり、王威萎靡諸侯復た之を宗とせず、天子の主權分れて列國に移り、政府の威力天下を制馭すること能はざるに及びて、諸侯放恣、陪臣國命を執るの極、上下懸隔、虛文縟禮、稅歛重厚、徒に下を虐げ、紛紜亂雜、倫常地に墮ち綱紀振はず、人心日に澆淳に赴き、社會年に腐敗、上代先王の遺道光を失ふや久し、未學の徒詭辨を揮ひ、小巧を弄して一時を欺くのみ、忠良は害せられ、仁義は破られ、曲巧小慧の徒、獨跋扈を極むるのみ、周公の才の美や、以て經天緯地黼黻文章の盛も、拘者之を忤すに及ては則ち守株局促、時宜の變に通ざるを知らざれば、其弊亦是の如きの甚きに至れるなり、韓非子之を論して曰く、禮爲情貌者也、文爲質飾者也、夫君子取情而去貌、好質而惡飾、夫特貌而論情者、其情惡也、須飾而論質者其質衰也、何以論之、和氏之璧、不飾以五采、隨侯之珠、不飾以銀黃、其質至美、物不足以飾之、夫物之待飾而後行者、其質不美也、是以父子之間、其禮而不明、凡物不並盛、陰陽是也、理相奪予、威德是也、實厚者貌薄、父子之禮是也、由是觀之、禮繁者、實心衰也、然則爲禮者事通人之樸心者也、衆人之爲禮也、人應則輕歡、不應則責怨、今爲禮者事通人之樸心、而資之以相責之分、能毋爭乎、有爭則亂、これ真に遠からざる言ならずや、此時に當り英才卓識の士、進んで世を救はんや、將た退いて身を全うせんや、積極的に之を救はんや、消極的に之を救はんかの二途あるのみ、而して此の時に當り二個の巨傑これを憂ひ、翻りて先王盛王の泰平を夢想し、之を理想に國家とあり、之が救済の途を講し、兩極を代表せしは實に奇ならずや、これを誰とかす孔老の二聖これなり、孔子は帝力何ぞ

我れにあらんやと謳へる、堯舜の社會を思慕し、世道の頹廢を慨き、名教の萎靡を嘆し、憤然起ちて天下に周遊し、到る處先王の遺言を祖述し、民をして其歸向する所を知らしめんと務めたり、老子は先王の民の善きは、真心より善きなり、后世の民は乃ち真心先づ腐敗して、表面僅に善を装ふが故に惡益惡なり、世の忠と云ひ、孝と云ふものは之れを行ふ人の心根によりて、善惡何れともなるべし、忠孝仁義あるものは、必竟常不動の價值を有し、即ち孔子は相對的假設的理想を追ひ、老子は絶對の大理想を追へり、孔子は寧ろ現實の方面より觀察し、老子は好みて理想の方面より觀察す、一は差別の面より見、他は平等の面より見る、蘇子由曰く、『蓋し孔子の人の爲めにするや周、故に人に示すに器を以てす、而して其道を晦くして達者をして見るあらしめ、未だ達者をして眩せさらしむるあり、老子の自ら爲にするや深、故に人に示すに道を以てす、而して其器をば略して達者をして入り易のらしめ、其未だ達せざるを恤まざるなり云々』これ實に至當れ言ならずや、老子は政治論に於て無爲主義を主張せり、無爲主義とは自然の大道に隨ひて、人爲を加ふるべきの謂なり、夫の大道は爲すなきが爲めに全く、虛無あるが爲めに久し、天下の泰平を致さんと欲せは、治者須らく無爲虛無からざるべからず、繁文縟禮は亂れ階にして、峻刑極罰は亡の兆なり、故に聖人は無爲にして爲さざる所なり、無言にして言はざる所あり、道常無名撲雖小天下不敢臣侯王若能守萬物將自賓天地相合以降甘露人莫之令而自均始制有名名亦既有夫亦將知止知止所以不殆譬道之在天下由川谷之於江海也

樸は性にして道は常に名なきを以て即ち性亦名く可からざるあり、故に其物たる之を符て在らざ

る所なく、之を斂めて毫も末に盈たず、これ小ふりと雖も臣たる可のらざる所以あり、故に匹夫の賤きも之を守れ、則ち塵垢粃糠、以て堯舜を陶鑄するに足れり、又侯王の尊きも守る能はずんば、則ち萬物賓服せざるなり、とれ王侯の守るべき所を教へたるにあらずや、(政治論未完)

史傳

史海指鍼 (續)

浦井恒堂

以上列記せる數書は中世時代に關する所謂時代を同くせる史料(コムテムボライイ、ソース)に屬する者なるを以て次には一部に纏まりたる中世史を擧ぐべし然るに中世史は古代史の主として希臘羅馬を論ずるに異なりて論ずべき國の數も歴史的事實も頗る多く之を記せる歴史も頗る豊富ければ其内より最も適當なる參考書を探み出すこと甚だ困難なる業といはざるべうらず試にバーン氏の萬國史教科書を翻きて中世史の參考書目として擧げたるを見るに擧げたりとも擧げたり五十部乃至六十部の書目を列記せり是れ抑も何れ意ぞバーンは歴史は尋常中學程度用の書あるに該程度の參考として五六十部の書を列記して其目的を達し得べしと思へるにやしうも其引用せる書籍の良否に付ては一言をも附記せざるに於てをや徒に體裁を裝飾するに過ぎざるてふ非難を免るべからず余輩は之に鑑み單に大勢に通曉し得るに足るを主として二三の書を擧げて満足せむとす最近史學研究の盛あるに訪ひ中世史に關する著述多く出たるか十中の八九はある特殊の時代又は特殊の事件に關する者にして一般中世史に關する者極めて尠く余輩の目的に適合する者かきは遺憾といふべしされば今余輩の擧げむとする數種の書は之を最近の研究の結果の眼より見れば稍や陳腐の感あるのみならず決して現時の史學界の定論を代表する者といふべからずして頗る多くは訂正増補を要するは勿論のことかれどさりとして未だ全く是等の書を排斥して之に代はるべき新著述の無きを如何にせむ況んや今余輩の擧げむとするは皆史學の大家にして此輩の著作は一は歴史文學として不朽に傳ふべく讀者の腦裡に深き印象を刻すべき特性を具ふる者なるに於てをや近世の著作は如何にも最近の研究には相違なれども多くは乾燥無味深く讀者を感動せしむる能はず専門歴史家の參考用としてはもとより文章趣味などを論ずべきにあらず製本の赤革を用ふるゴコロ一ス製なるを顧るべきにあらずと雖も余輩は専門的事實的參考用書を述ぶるにあらず一部生たるに二部三部生たるとを問はず一般歴史的智慧を得むと欲する人々のため教科書以上の參考書を擧げむとする者あれば第一に必要あるは讀んで興味多き者ならざるべからず故に余輩は多少陳腐の非難あるを辭せずして余輩の目して不朽に傳ふべき文學と信する者を擧げむとす

余輩の見る所を以てすれば前世紀以來の出版にして此資格に該當すべき者四種ありギゾー文明史ハラム中世史ミシュレー佛國史及ヒミルマン耶蘇教史とす而してハラムは七十年前の著述にかゝりギゾーは六十五年前ミシュレーは五十年前最も新しきミルマンと雖も四十年前の出版なれば單に著述の年代よりいはば陳腐に屬し又實際近來の研究によりて多少の誤謬の發見せられたるは勿論なれども最近の著述にして此等と比肩すべき者なき以上は之を紹介するの適當なるを信するも

のなり

François Guizot は近代に於ける佛國著名の政治家及び歴史家にして一七八七年佛國ニーム市に生まる父母共に新教徒なりしが氏の父は氏の十二歳の時殉教者となりて死に處せられたるば氏の母は二人の遺兒を携へてゼネバ府に遁れ氏は此所に於て普通教育を受けたり一八〇五年に至り巴理に赴き専ら法律を學び傍ら文學を講究し同じき十二年ソルボン(巴理大學神學部を云)の助教となりて文學を講じ後新設せられたる近世史の講座を受持つものとされり氏が最初此著述は一八一六年公にせる代議政治を論じて佛國民權の實際の事情に及ぶと題せる論文にして其後引續きて數種此著述を公にせしが氏の政論は終に政府の忌憚に觸れて職を辭せざるを得ざるに至れり氏は辭職の後専ら心を歴史研究に委ね代議政体論佛國史論集英國革命史料等の書を著し名聲大に揚りマルチンヤック内閣の時復た出で、ソルボンに於て教鞭を執れり一八三〇年國會議員となり七月革命の後内閣に列して内務の局に當たり續て文部外務に轉任せし最も力を教育の普及に尽し一八四〇年東方問題破裂するに及びシユールト内閣のために大使として倫敦に赴き同じき四十七年シユールトの罷むるや氏は代りて新内閣の總理となりルイ、フヒリツプを補佐せしが翌年二月革命起り王教轉覆するや氏は出奔して倫敦に赴きて優遇せられ後返國して一八四八年の議會に撰出されむらとを望みしかとも氏が在閣中の施政方針は甚しく人民の感情を害ひしかば終に當撰せられざりし因て氏は巴理に於て「アッセムブレネ、ナシヨナル」新聞の記者となり熱心に王黨のために盡ししが一八五一年ナポレオン三世のクー、デターのために再び英國に奔れり是を以て氏の政

法的生活の終を告げ一八七四年を以て死せり氏が佛國の文學學術に與へたる功績頗る多く特に著しきは氏の主唱によりて組織せられたる史學會(コミテ、ヒストリク)にして盛に有益なる史料の蒐集出版に従事し大に佛國民の歴史の嗜好心を喚起せること、す氏は嘗て合衆國政府の依頼に應じワシントン傳二卷を著し其紀念として氏の肖像は今日に至るも米國代議院議場の壁上に掲げられありといふ氏の政治的及歴史的著作甚だ多けれど今余輩の擧げむとするは一般歐洲文明史(Histoire Générale de la Civilization en Europe)にして此書は氏の他の傑作佛國文明史の序論として見るべきもれなり

此書は既に數十年前の著述に係るを以て封建制度の起原を始め種々の點に於て多少の誤謬を免れざれども猶今日史學社會の有する最も貴重なる文明史にして缺點は缺點としてかく封建制及加特利教會の起原變遷を歴史的に研究論述したる嚆矢たるの名譽を失はず蓋しマコーレイも其歴史と題せる論文に於てリムたる如く歴史家にとりて最も大切なる資格の一は能く政務に通曉することにして直接に政治の局面に立たざる迄も常に政治家と交はり政論を傾聴し以て完全なる政治的思想を有すること必要ありこれ實にスキヂデス、クセノフオン、ポリビュス、シーザア、リビュス、タシッス等の最も得意なる點にしてギボン、ヒュームは如きも亦た其一例とすべしされば前述の如き經歷を有するギゾーは史論り普通の歴史家に比して大に觀るべき者あるは異ひに足らず近來獨逸に於て専ら考證的研究盛とありよりギゾーの所説は確乎たる事實に基かずして先天的獨斷の弊あるを攻撃する者多しと雖も單に古文書の調査のみに汲々たるは決して好歴史家といふべ

ならず余輩はギゾーの精銳ある史眼に感服するものあり

Henry Hallam氏の中世史 (View of the State of Europe during the Middle Ages) は一八一八年を以て初巻現はれ其後十年前述のギゾーの文明史出で以て當時の史學界に於て一新時期を作るに至れり氏は初版以來引續きて其著の訂正に従事したるにより今日の體裁を具ふるに至りたるは一八四八年以後の事なりとす此書が如何に世人の歡迎を受たるかは既に第十一版に及べるを以て知るに足れり氏は一七七七年ウインソルに生まれ九十九年オックスフォード大學を卒業し法律を業とせしり一八一二年父没して充分の遺産を相續せるを以て辯護士の業を廢し専ら歴史の研究に従事するに至れり氏は早くよりエヂンボロー、レビユの投書家として名聲膾々たりしを續て奴隸廢止論者として又大英國學術獎勵會發起者として名あり氏の著作は此中世史の他ヘンソレイ七世よりジョージ二世に至る英國憲法史二卷及び十五世紀より十七世紀に至る歐州文學史四卷あり皆良著を以て名あり晩年に至り學士會員に列せらる

此書も亦たギゾーの文明史と同じく輓近史學の發達に訪ひ余輩の得たる新智識を以て見れば陳腐の嫌なきにあらずと雖も氏の著の如くに全中世時代を概括し全歐州を以て其舞臺とせる如き結構雄大なる近世の著作なきにより此書を以て中世史の白眉とあさざるべからず此書の最も價值あるは初の四章佛蘭西西班牙以太利を論する邊と結論れ中世狀態一般を寫すの章にして日耳曼に關する記事は主として日耳曼人種と羅馬帝國との關係を論ぜるブライス氏は著神聖羅馬帝國に及はず又耶蘇教の發達を論ずるは章は大に次に擧ぐるミルマン氏の著述に劣り英國憲法發達に關しては

到底スタップス氏の英國憲法史に比とべくもあらずされども此等れ點は以て此書の價值を左右するに足らざるものとす蓋し現時の如く史學進歩の時當り未だ最近の研究の結果に基き科學的概括的に中世時代を論せし好著れ出でざるは遺憾といふべしハラムの著種々の出版あれど多くは一冊ものこ三冊物あり前者は舊版の翻刻なるを以て三冊ものを以て良しとす

Julius Michelet氏は佛國屈指れ歴史家にして一七九八年巴理に生まる氏の父は印刷業を營みしかば氏は幼より父の助手として植字の業を執りしが性來好學なりしをば知人の古本商より書籍を借受け勉學せり古本商は氏の篤學あるに感ず資を給してコレツジ、シヤールマンニユに入學せしめ一八二一年業を卒り同年より二十六年までローレン大學教授として哲學歴史及古典を講ぜり氏の最初の著述は近世史年表(一八二五年)にして同下き二十七年近世史要を出してより名聲大に揚がり直に二十余版を重ねるに至れり一八三〇年革命の後政府文書局監督に擧げられ巴理大學に於てギゾーの助手となり皇女クレマンチンの侍講を兼ねたり一八四七年佛國大革命史の初巻出で五十三年結尾の第六巻出で名聲一時に喧傳するに至れり一八四八年の政變に際し氏は勉めて政論を避け専心著作に耽りしりども路易奈翁に對し精忠の宣誓を爲すを怠たりしにより職を罷められき氏の傑作は佛國史にして一八三三年初巻出で六〇年に至り完結す凡二十七巻より成り其英譯は第六巻までより無しと雖も此邊までを以て全著の内最も光燦あるものとあすを以て完璧にあらざるの憾を償ふべし英譯は路易十一世時代に至り合せて二冊とす氏の自づいふ所によれば氏はギゾーを崇拜しギゾーの門弟を以て自ら任ずとされど氏はギゾーに比して遙かに想像力に富み其叙事文章は

妙はギゾーの及ぶざる遠しとす要するに氏の佛國史は連續したる歴史といはむよりも寧ろ種々た音聞逸事を集めたるものにて之を記するに最も艷麗の筆を以てしたれば中世史のリビュスといふを以て最も適評とすされば氏の競争者にして氏とは全然反對の編纂法を用ゐたるハラム氏の如きも口を極めて氏を賞賛せざるを得ざりき佛國は風土を叙するの邊查理曼大帝路易王フヒリツプフアトガスタス、セントルイ、及びムフヒリツプ、セ、フエア等に關する話十字軍アルピゲンセスの亂の記事又はゴシック建築百年戰爭特にジャンダークを寫せる篇の如きと近世文學中に於て多く其比を見ず蓋しミシュレー氏は既にタシツスは眼光とリビュスの筆力を兼ねたる者にして氏を現出するものといふべし不幸にして余輩は今日に嚴格なる意味の歴史家を以て氏に許すを得ず詩人説教者道德者といふを適當とす此等の缺點(加之此書は後に至るに隨ひ漸次始の筆力を失へり)あるにも關せず氏の寫し出せる中世時代に於ける佛蘭西の繪畫的映象は讀書社會にとりて無朽の寶といふべきなり

Henry Milmanは英國の詩人にして著名なる宗教史家あり一七九一年倫敦に生れ一八二一年オックスフォードに於て詩學を講し一八四〇年其詩集を公にし同年The History of Christianity from the Birth of Christ to the Abolition of Paganism in the Roman Empire 3 Vols を著し之を序論として一八五四年に至り氏の傑作たる History of Latin Christianity 18 Vols を公せり

此書も既に四十餘年前の著述なるを以て單に時日の點のみより見れば陳腐取るに足らざる如きも其實ギボンの羅馬衰亡史の必要欠くべからざる伴侶として無朽に傳はるべきものとす此書は明にギボンの辨駁者競争者又ある意味に於ては解毒劑として現はれたるものにして頗る其目的を達したる者といはざるべからず此書れ論ずる所はギボンと殆んど同時代にして其事實も其人物を同一なれどギボンは全く別の方面より觀察し全く異りたる尺度に依りて處斷せり故に其材料は二者殆んど同きにも拘らず其製作物に至りては全く反對の傾向を呈しギボンは羅馬帝國の分解を論じミルマンは加特利教會の發生組織を叙せり此書の最も價值あるは觀察の公平なることにて特に法王グレゴリオと皇帝との衝突を記するの邊に於て現はる此書合卷六冊にして通讀に多くの時日を費せしめられ單に必讀すべき部分のみを擧ぐべし即ち首卷なる序論及卷尾の結論を始とし多くの著名なる法皇の傳例せば第二卷あるレオ、セ、グレイト、第三卷のグレゴリオ、セ、グレイト第七卷ヒルデブランド第九卷インノーセント三世第十一卷ボニファース八世其他セオドリツク王查理曼オットー諸帝十字軍セント、ベルナード、セントルイ、の章次に高僧アムブロス、セローム、アウガスチン、グレゴリオ等傳及びベネデチン、フランシスカン等の僧侶組合野蠻人改宗十五世紀に於ける宗教改革說宗教大會議等の章これなり之を要するに余輩の爲めに最も幸福なることは自然の結果としてギボンの歴史の最弱點は即ち此書の最も長所とする所あるを以て兩者を並べ見れば最も妙ありとす

雜 錄

ON UNIVERSITY ROWING

De Havilland.

Picture to yourself a shell-like boat 60 feet in length with a free board of about five inches, and you will then have some conception of what Cambridge racing boat is like. To complete the picture you must imagine a long sinuous river, not unlike that at Kanawha, with a tow-path on either bank, The seats, instead of being fixed, are made movable and slide up and down at the pleasure of the rower. The advantage of using sliding seats is considerable since the rowers are thus able to obtain a greater 'reach' and a longer stroke.

In comparing the two styles of sea rowing and river-rowing we notice they are entirely different. In the former, as a general rule, the work is done with the arms, while in the latter everything depends upon the legs. Those who aspire to the honour of rowing in their college Eights will find they have very much to unlearn in the way of jerking with the water above the blade, washing out, and neglecting to use their legs. During the first few weeks of practice, the coach will inevitably become an object of the most hearty detestation, until the first rudiments of the art begin to dawn upon the tyro, and he no longer hears the oft-repeated adjurations and maxims wherewith he has been up to this point dosed ad nauseam.

A propos of coaches, it is gratifying to have to observe that the majority of them possess a good vocabulary and know how to use it: exceptions, there are, of course, but persuasive eloquence is rather out of place on the tow-path or in the stern of a pair. After this preliminary tubbing, the first step forward is rowing in a four, which goes on for some little time until the Four-oared races. The first trip in an Eight is usually a remarkable sight; each man pulls his own time, evincing a sublime disregard for stroke and all the men in front of him; soon, however, the crew begin to settle down a bit and row fairly well together. When the crew has been finally selected, the serious business of training begins, and lasts for three or four weeks, until the actual racing begins. This period is a time during which reading men find themselves unable to get in much work. The ordinary routine is more or less as follows: the day is begun by a sharp walk before breakfast, which necessitates getting up at 6.30 a. m. in order to get other duties finished. Breakfast is considered, in some respects, the principal meal of the day. These training breakfasts are given to the crew by the other members of the college, and are by no means inexpensive, as the amount required for some ten or eleven voracious appetites is not small. The staple diet is beefsteak chops, eggs, with toast or stale bread, washed down with a small allowance of weak tea or cocoa. Lunch is a very light affair, depending entirely on each man's taste.

Rowing begins about half past two, and between that time and five the member of eights upon the river and coaches up on the bank is very considerable. The chief work done is paddling from lock to

look varied with journeys in a "pair" and with occasional bursts of rowing. The amount of work increases daily until within a few days of the races. Perhaps the most trying part of the whole training is the rowing over the course (1½ miles) at racing speed, especially if there is a head wind blowing, as the coaches are not satisfied until each course is done in shorter time than the one before. Dinner is at seven, and varies little from breakfast. The amount of liquid to be consumed daily is very limited. At 10.30 p. m. all lights have to be out in the rooms of members of the crew, and the captain usually comes round to see that there are no defaulters. Such briefly, is in the main the system of training in vogue at our English and Universities. It varies, of course, at different colleges. 'Quot homines, tot sententiæ'. The racing at Cambridge is continued for four afternoons consecutively, while at Oxford no less than six are devoted to this exciting form of amusement.

MY OPINION

Ishida.

People say, "Ah, in the north-east country of Japan, there is no famous man"; it may be so, or it not may be so. Look back three hundred years ago, and then you will find Date Masamune, one of the greatest men that ever lived. In those days, the country was in a state of anarchy, and

chiefs, with strongholds in several provinces, contended for dominion; the stronger destroyed the weaker and the greater overcame the smaller. Many heroes now rose, now fell, and war never ceased for a day. On finding that he was unable to meet the times, he tried to stretch much further his authority abroad. Unless he is a hero, no one else is. There is also Hashikura Tsunenaga, one of his loyal retainers. He possessed marvellous boldness and profound erudition. He once went to Rome by order of Masamune, and at once he was introduced to the Governor in the land; he moreover attained to nobility a little later. The glory of our National influences, therefore, shines over all others. What an extraordinary man was he!

In recent years, there was a famous character named Rinshirai. He had deep penetration among his characteristics as while yet a few stars remained in the heavens and dark clouds covered many millions of his brethren, only he, with deep fore-knowledge, knew that the times were in a pressing condition. But it was truly lamentable, wide as was the world, that the world did not receive him who should have been of service to the world, and let him go to an empty grave without honour. However he also should be considered an extraordinary man in the north-east country. Besides these, there are Hirata, one of the learned men in Japanese languages, and Takano, one of our public-spirited men. The above mentioned persons all were distinguished men such as scarcely can be seen in the present times.

Who can say that south-east countrymen have no capacity? The country in former times, has indeed produced such men of ability. How is the state of the present times? If I go on to reflect on the past, the study saddens me extremely. I know it is many years since Masamune and Tsunenaga have gone, and Hayashi set out for the region of the dead, also Hirata and Takano are not in the world.

Where are they living now? Though we now desire to call them to act in concert owing to the decaying of the country, the distance from here to there is so far that we are unable to reach the object of our desires. Is it not truly sorrowful? I am a little nervous, and very sorry indeed to find that there is no able person in the wide land since these person went. However, prosperity and adversity are ruled by chances. Though the decay of north-east country is no fixed time which may bring forth again great and famous men in future? And it is well-known to all that Japanese now putting forth many young shoots of great men. So, I have reason to believe that, standing against every current of worldly affairs, there will be some who will devote all their energies to the country, and sacrifice themselves for its sake, and who, recovering the reputation of our north-east country, will remove many a disgrace which we are under since the time of Boshin.

Therefore we young north-east countrymen must rouse ourselves and make extraordinary efforts and must employ such means that cannot be contended against by any physical force.

外國語を見る上の心得、辭書を引く時の注意

輓近我國にて文字改良の論、盛に唱へらるゝ如く、外國例へは英獨の諸國にて綴字の改良論唱へらるゝこと、頗る盛なりといふ、而も此論の容易に成立せざる所以は、我國における文字改良論ほど甚しき必要を認めざるにもよるへけれど、一つは其綴字に歴史的關係の一朝一夕に破ると能はざるものあればあり、又予輩の聞く處によれば、英米の小學校の初級にありて初めて英語を教ふるとき、初にアルファベット次に正き綴りの音とを教へ、次て、之にて文章を書かしめ、次に、うくのこことくにして書かれたる文、例へば、*I No. Dat. Ze* を *I Know that the...* に置き換へしむと云ふ、此 *No.* の代りに *Know* を用ひねはなからぬことは、即文字の綴りに歴史的意味あるか故あり、言語と云ふものは、人々自由に語りたるもれにして之を文字と云へる若干の形式を作りて、其内に收め容れんとするなり、而して各國の言語は、よく悉く此文字の内に正しく收り居るや否やは、猶、人の思想は、言語を以て悉く、表はし得るや否や定かならざるか如き道理あるべし

故に我々日本人のみならず、一般に、人々遙に異りたる他の國語を學ぶときは、其國語を其國文に表はされたるものにつきて之を學ぶあり、英語を學ぶといふよりも、英語と英字にて書きたるものにつきて學ぶあり、耳にて學ぶよりも、目にて學ぶなり、先づ目熟して、然る後耳、手、口、働くに到るなり、これ實に免るべからざる事にして、如何に此順序を止めて、先づ耳より熟せしめんとすればとて、多數のものには能はざる事なり、要する處は、先づ目と共に、耳も手も口も

巧に働く様にある事能はず、せめて、目熟して後、耳も口も熟する様になれかしと願ふ外に
 かかるべきなり、而して余は今、英語を學ぶ人々、即英字を見る事に勞し居る人々が心得ざるべ
 かる事の一として、讀者にエテイモロジの研究を忘れ賜ふか、エテイモロジは文字を目
 にて見る働きの最重なるものなりと云はんと欲するあり、

エテイモロジとは文字の歴史を知るとあり、「知る」といふ英語は No. Know. 何れにても、良き
 あり、然れども之を文字にては No. と書くべからずして Know. と書くべきを知るとなり、手近き
 二三の例を擧ぐれば、今「茶」と云ふ字は「茶」ありと漫然記憶するよりモ、之れは茶といふ支那語
 の音を英字にて寫したるなりと知りたらば如何、又例へば Civil. Police. と云へる字はそれ／＼ギ
 リシヤ語の Polis (City) ラチン語の Civis (Citizen) より來りしにて、其儘我國のみやびたる（ひ
 なびたるに對して）又は都雅を云へるに正しく相應たるを知りて、直に文明史の一部を想像
 すると得れば如何、Cantipale は單に「むかひ」なりと漫然記憶に訴へ置くよりも Centi (H) pede
 (和)あるを知りて其儘文字を見て、百足の意義あるを知る事を得ば如何、倉庫の事を何故に Go-
 down. と云ふやと不審に思ふ人は、是は印度語の音を寫したるものなりと聞けば如何、如何ある
 文字にも皆りゝる歴史的意義あり、此智識を其エテイモロジの智識といふあり、

エテイモロジを知るは決して難きことにあらず、希臘の古語の智識もあり、近世の語にも通
 たるを要せず、猶英文法を知るに言語學に通し比較文法に精しきを必しも要せざるか如し、斯くあ
 れば、更に良しといふ迄あり、エテイモロジを知るには、たゞ辭書を引く時、少しく注意すれ

ばそれにて事足るなり、我等は辭書を引く時、漸くにして其文字の解釋を知りたると同時に、氣
 魂盡きて之を思ひ切りてハタと閉づるを常とす、此際今暫く辛抱して、序に其文字のエテイモ
 ジをも見るとを心懸くへし、單に知らざる字を引くとき傍之を見るのみからで、良く知れる字
 をも時々、引きて其エテイモロジを見る事を心懸くへし、ゆく次第にエテイモロジの智識、
 文字を目にて見るとの一種技術は得らるべし。現今英語の生れたるアウソリティーは、Prof. Street
 著の Principles of English Etymology 二冊(十圓程)あり、又此人に Dictio-
 nary of the English Language, List of English Words 等は辭書類あり、又簡便なるものにては A
 Concise Etymological Dictionary of the English Language (二圓程)ありて、多くの外國教師か必ず
 一本を携へて甚、重寶がれるを見る、ウエブスターはエテイモロジの誤れる處を訂正したる處
 ありと云へり、而れども、吾人の渴望を愈すべき程のエテイモロジはナツタルにもウエブスタ
 ーの小にも皆あるあり。

今讀者は長き經驗の後、多くの字につき、其エテイモロジを知るとを得次第に其字を見て、直
 に其字の組立、構造より其意義を推知することを得るに到らば、……之より音普的の文字と象形文
 字との區別あれど、「笑」といふ字の直に讀者の前に笑ひ、「喜」といふ字其自身か喜ひ居るか如く見
 ゆる程適切に讀者の心眼に映ずる迄には行かずとも……文字は從來見しとは更に、別趣味を呈し、
 一新色を呈して讀者を送迎すべきなり。

厭世雜觀

璞

哉

三界無安。猶如火宅。衆苦充滿。甚可怖畏。常有生老。病死憂患。如是等火。熾然不息。如來已離。三界火宅。寂然閑居。安處林野。…… (法華經)

舊葉微風につれて、人世の冥暗を辿り、一夜端なく老僧の一喝に驚けば、夢は白露よりも淡く、月は垂天の暗雲に吞まれつ、悲喜哀感の走馬燈を演ず。

噫、白馬銀鞍に跨り、落花狼紛の雲に迷ひ。十萬億土の秋をよそある貴公子も、月漏る苦に、一沫の辛き烟に咽べる形骸に、悲痛の恨を叩く老漢も、胡蝶の夢魂一度び飛び去て、三途の水長へに盡きず、長夜幻迷如何に長くとも、明旦を待たずして悲痛交々至るべし。實に願れば浮世滔々皆衆苦充滿す。暫くも自恣すべからず。遂に事と心と齟齬し、圓滿なる満足は得るに由なし。不平、悲痛、失望、一に之れ満足を得る能はざる聲にあらざるはかく、滿天下不平、悲痛、の呻きは、野田の泥蛙、秋虫れ集けるにも似たふんに、失望、怨念、の焔火に、火宅の鬼が、効名の薪炭空しく消失せたる殘灰に、猶ほ執念淺のらぬも、抑も何物も満足境地の靈泉に渴望して、掬するの勇なき、あはれ果敢かの世相に非ざるや。

願れば滔々たる宇宙、遂に満足ある物を見出す事能はざる。錦繡に座し入珍に飽く貴公子は、戀に、名に、あらゆる欲望を満足し得るとするも、浸々として、造次れ間、頓沛の仮にも、切迫し來る白駒の足をば止むる能はず。遂に死れ問題に向ては、又誰人も如何ともする事能はざるべし。榮耀の夢に眠り、桃源の風に沐する士は、却て此の死者の猛牙を免れて、長へに邯鄲の夢に

酔ばんどすなるべし。而も老少不定、朝の紅顔も、夕には空しく水鏡底裏白雪の重きに驚く。嗚呼、世は遂に満足ある物を見出す事能はず。基督の罪惡、佛の所謂無明、希人は之を運明と觀たりしも理わりにして、人は到底、完全の域に達する事能はざる動物に終はらん乎。實に浮世は面白るゝらぬ者あり。益天れ明月空しく缺け去て、不如歸に泣き落され、滿地の紅花、徒らに一陣の風吹き來て朝の霜に土壤と委す。希臘の哲人、嘗て流水に片脚を投て、喟嘆して曰く、噫、我今踏み破りたる水は已に逝けり、と、人生古來五十に過ぎず、蜉蝣の身を以て、望の飽く時なく、悲の盡くる期なき浮世に處す、將に老松の巨軒に、囂々たる空蟬の、鳴聲憐れあるど何の撰ぶ處あるべき。莊子曰、吾生也有涯而知也無涯以有涯隨無涯殆已而爲知者殆已矣。之れ養生主劈頭の好句、吾人寧ろ慾望の斯の如きを思はずんばあらざるなり。實に戀に泣く音を弱しと聞かぬれ。名に叫ぶれ徒を憐むべしと云ふ勿れ。此の嗟嘆たる浮世に處す、却て泣のざるは情に悖れり。噫、西行は死の問題に對して覺らんとしぬ。文覺は戀の瀬川に卒然兩刀を投げ出しぬ。長明は名望の空しきを見るや、翻然として大原山に退隱しぬ。彼等は必竟幾多の閱歷に由て、等しく人世を悲觀したる者にして、一種の燃犀たる眼光を以て、此の浮世の裏面に於ける暗黒界を洞察するを得たりしに由て、厭世家たりしを得たりしなり。要するに厭世の起るや、唯不滿の二字に歸着せん而已。然り然らば此世は果して吾人の慾望を満足せしむる事能はざる處あるが。實に慾望は必ず快樂を求むるを以て目的とするが故に、苟も苦痛の感情の伴ふあらん即ち吾人は遂に満足を得る事能はざるあり。實に吾人は是非とも、意志の完全なる活働を果たさざるべからず。

然るに世は雜然として、各人相割據するの有様にして、此の吞嚙搏奪の裏に處り、社會の一員たらんこせば、豈に奚ぞ我意をのみ之れ遂ぐるを得んや。加之、人類は世運の發達と共に、愈々其の慾望を増進す、唯に現在に止まらず、未來に於ける慾望となり、果亦た至高ある精神的慾望である。太古れ人民にありては、一碗の食以て彼等の慾望を充たすに足りしも、龍を得て蜀を望むは人の常なり、愈出で、益多々、遂に之を満足せしめんとする苦痛に堪えざるべし。嗚呼吾人は如何にして此の苦痛を醫すべきや、所謂之を満足すと稱する者は、皆之れ物質的慾望に過ぎず、苟も遠大なる見識を以て、哲理の馨に酔ひ、三世れ諸法を悟りて、飄然死の問題に想到せば、常に啞然として、誰の自駒の足を止むる者ぞと絶叫す、豈獨り不死靈藥を覓むる者彼れ始皇のみにして止まらんや。此の故に、佛者は世を迷妄かりとて、萬物皆無常なるを論じ、不死不滅の境を説て、世を悲哀の巷と觀じたりしも宜にして、吾人は少なくとも、「シヨッペンハウエル」が、苦は樂よりも其の分量大ありと、言ひしは實に至當の言なりと云はざるを得ず。彼の「ハルトマン」が所謂、社會の改良に由て人類の快樂を大に増進し得べしとの改良説は、其の所謂無上の社會が、現實せらるべき日に於てのみ稱すべき者にして、今日の社會に對しては、却て其の慾望の達し得られざるを明にせるに非ずや。顧れば實に此世は一点の満足を得る能はざる處あるや、果た亦嬉々として終生春光に酔ひ、一世の歡樂に豪奢を競ふべき處なるや、抑も如何、吾人は果して「シヨッペンハウエル」の世界皆惡説を信ずべきもの、果た亦「ライブニッツ」の現世無上を歌はかんやを知らざるなり。

顧れば、世は漸秋なるとして、何處も同ト夕暮は獨り鳴立澤の者にあらず。秋風起て白雲飛ぶ、一夜暗雲孤月に泣きつる詩人あり。亦一畑の黃黍に、希望と光明とを叫べる詩人あり。等しく之れ秋なり。秋奚ぞ絶對的悲哀の者からんや。而して或は喜觀し、或は悲觀を、抑も何等の故ぞ。唯々意志が觀察の對象に對する見地の如何にあるのみ。蟋蟀の一吟するや、西歐詩人は曰く、之れ收穫の歌に百姓が希望を勵ますなりと、東洋的詩人は曰く、之れ霜に枯れ行く果敢かき世相を啣つかりと、實に彼等は幾多れ境遇に由て、各自の感情上に影響し、靡然として神機一轉、思想の變換を生じ、或は悲觀とあり、或は喜觀とある。「ヒッベル」が、美は戀する人の眼に存じて、乙女れ頬にあらずと、云ひけん如く、厭世と云ひ、樂天と云ふ、決して絶對的に外物に現はれたる性質の謂に非ずして、唯之に對する各自れ意志に存ず。雖然秋風落日の夕、世の臨終と意味する如き笠大の赤陽は、一刻亦一刻、見るが中に其倒影を没し去り、秘密の暗黒は今や世界を覆はんとし、半輪の月影霜に落ちて寒塘の老爺孤墳に獻敬す。宛然たる浮世の模形乎。誰う猶ほ樂天と言はん、亦喜觀と叫ばんや。

何。ど。なく。も。の。ず。か。か。し。さ。が。原。や。ふ。み。の。里。の。あ。き。の。夕。ぐ。れ。

何とかく寥寂の感に打たれて、恍惚淋淒の氣に酔ふ。何とかくの一句ありてこそ、何とかく悲哀の感胸底より湧き来るなれ。實に人は必しも確實なる動機ありて、初めて是に對する悲哀の生じ來る者にあらず。彼の孤兒が未だ搖籃を見捨てざるに、先づ颯々として泣く事を忘れざるを見て、亦悲と言ふ事は、人世の特權なりと言へりし「ハマートン」が言の眞なるを思はずんばあらざるか

り。然り、實に悲は人世の特權なりとせば、苟も生と人界に受くるもの、委く此の厭世の觀に打たれざるべからざる。決して然らず、是れ悲痛に對する幾多の動機の存するありて、其れ悲を以て愈々大あらしむると、否亦こに由るものにして、例バ一点の悲は一個の幼芽の如し。原と各人が意志氣質の傾向に由て、同一の悲痛も、之を感じる度の種々あるは、尙ほ幼芽れ種殼に厚薄種々ありて、以て外界の影響に應ずるが如く然り。而して芽や、外には光、温、等を得て、内には幾多の營養を得、益々成長し、遂に亭々たる大樹に至るが如く、一点の悲や亦之を成長せしむる幾多の動機ありて、遂に成長して愈々とあるや、驟然厭世の渦中に巻き込まれずんばあざるあり。即ち彼等厭世家が、秋風に泣き、孤猿の三叫に六魂を驚かす、世事益非にして失意の事のみ多く、萬事の依頼するに足らざるを見るや、忽焉自己に閱歷に由て、世を擧て悲觀し去らんことす。或は亦、必しも己が閱歷に由らずして、外物も同情を表し、亦は鋭利なる思想を運びて直ちに死の問題を思ふ時に於ても、亦厭世の觀に打たるゝことなりとせず。古は近松の心中物と讀て心中せし者ありけん如く、絶壁嗟嗚たる水涯に、白衣入水の女詩人が、悠に「吾は神化せり手を觸れず」と、最後の神韻には、苟も血ある者、誰う同情の念に驅られ、世故の冷酷に泣く者あらんや。或は亦、嘗て巴里人が云ひけん、英人と徒然を消さんが爲めに自殺する者なり、との如く、所謂是れ、歡樂極分哀情多少壯幾時分奈老何と、一夜月影霜白に泣き、積盡したる戀、名奢、の上に、今や此の望なく、悠然として未來の問題を思ひ、遂に厭世の福音に巻き込まるゝ者亦少あしとせず。本朝藤原專横時代に於ける厭世家、大概然らざるあく、多田滿仲の徒能く剃髮せしを思へば、

厭世教の福音が、如何に勢力ありけむを見るに同時に、亦思ひ半ばに過ぐる者あるべし。古來彼の英雄豪傑が、効成り名遂げ、退て身を閑散に處せんとするは、抑も此の觀に打たれし者多きに居る。

要するに「ライブニッツ」が現上無上の三段論は、己に其根本的に久しく疑はれたる處なり。神も佛も亦き世あるりとて、吾が戯曲に於ける套語に非ずや。於是、彼等一輩の厭世家や、世には捨てられ、世と捨てつ、轉頭煩悶を。即ち太古に返れとは、天外一点の星光に泣く者の言に非ずや。彼の希臘人民が、秀麗なる山野に「パン」神の笛吹く聲を聞き、鳥鳴ては春に驚き、花散ては時の換はるを知りにし時にありては、一点未來と言ふ念想もなうるべく、厭世が夢にも聞く能はざりしなるべし。我國に於けるにも然り。天岩戸の前は、八百萬神が胸乳現はして、舞蹈し給へりし時に當りては、抑も何等の美、何等の快り、是に加へんや。然るに社會は文明の潮流に従ひ、騷々として進歩するに及び、世は益々複雑となり、人間は思想に紛亂を來たし、而も人類は、苟も指定せられたる運命を脱すること能はず、遂に社會想と個人想との衝突を生じ、現實と理想との争闘場裏の激浪に堪えず、人事の果敢なきを思て、現世を厭脱せんことゝ至る。見よ彼の印度思潮に於けるも、信度河上の自由民族が、一度吠陀讚誦時代を去るや、即ち優婆尼沙土の哲學となり、婆羅門教とあり、遂に梵を点出して、人世の厭脱すべきを目的となすに至れり。嗚呼觀ト來れば、亦何物の主觀的果た客觀的に、吾人をして悲觀せしむる種ならざる者やある。即ち徒らに天涯の星光を覓めて泣く者は、太古に返れと絶叫するも、其聲は遂に天上に達する期かし。

「エデン」の搖籃は朽ちて跡なく、善、真、美、愛、は已に大地の者にあらざるとは眞なりや。願れば淨世暗懨として、蠢々裏亦何等の希望やあらん。莊子曰與汝皆夢也予謂汝夢亦夢也と、夢とは何ぞ、「ゾグテテス」曰く、夢なき眼の如くは死は生よりも樂しき、莊蝶が夢果して樂しき者ありや。如何、吾人は果して夢にして覺むる期のある者ならば、一日千秋の思を以て其破れん事を望むや切なり。何となれば、破れたる夢は如何に樂しからざるにもせよ、此の破れざる夢中の世相に比して、猶も悲しき者は世にありとも覺之ねべかり。噫、破れたる夢とは即ち死に非ずや。實に厭世家の切なき聲の漏れし程、あはれある聲はあきなり。

此れ時に當り、強て笑はんとする者は、敢て情なき徒なりと云ふ事勿れ。唯笑はんとする者は、苦しきが故に、強て笑はんとするのみ。暗懨たる黒雲裏、一点の星光を得んとする者にあらざるや。於是觀之、抑も浮世酒々乎として、笑ふ物と、悲む物と、の其何處に相違あるかと知らざるなり。試に死に至る迄茶毘の烟に人を弄殺し、世を嘲罵せし、十九が膝栗毛を見よ。人は是を讀で、抱腹絶倒し、頤のはづれる程笑ひこけるに非らずや。而も其材料たるや。多くは悲むべく、憫むべき失意の事のみ、唯其の人物の酒々磊落にして、意に介せざるが故に、果た其度の余りに高からざるが故に、敢て滑稽劇の料となり、人をして抱腹絶倒せしむと雖ども、觀じ來れば一として悲觀ぢざるはなし。果亦、或種に於ける喜戯曲の如き、情人の艶文が、誤て他人の手に落つるや、人は之をも喜劇とするも、願て其人の心狀を酌まんか、何等の悲痛り是に加へんや。實に吾人は悲喜の相違を見る事能はざるなり。而して厭世家は、敢て之の兩者を擧て悲觀し去らんとす。

亦半面の理なしとせず。「ヘルプス」が曰く、厭世は其の愛すべき同胞を愛せざるに因す。余は寧ろ、厭世は余りに多くの同情を拂ふに起因する者あらざるやを、疑ふに躊躇せざるなり。彼の庸俗輩や、彼等が所謂喜觀ある者は、已に其半面は、確に悲哀的分子にあらざるはあきま、而も之の半面を透視せるの見識なきの、果た亦た是もあるも、徒に同情の念に乏しくして、遂に此の暗黒界の爲めに、一滴の涙をも流すに吝あるか、幸にして厭世に陥らざる、一介の僥倖兒に過ぎざるあり。老子曰天下皆知美之爲美斯惡而已皆知善之爲善斯不善而已と、善美は人心の向ふ所にして、人の喜ぶ所なり、惡、不善は、人れ退くる所にして、人の悲む所なり。嗚呼悲、喜、の間、抑も幾何の差ある者ぞ。嘗て聞き得たる事あり。此れ世に悲と言ふ事を、作り給へる神は惡き神なり。尙此れ世に喜と云ふ事を作り給へる神は、最も惡しき神あり。人の永く悲に馴れて、悲をも悲とせざるを恐れて、時に喜と言ふ者を與へて、一層悲の日に悲を深からしめんとすと。世は抑も孰れに歸する者ぞ。鼎軒翁其樂天錄に序して曰く、人生失意の事多し、之を慰むるは樂天に如かず。故に予失意れ人を慰むる意を存すと、實に厭世は主にして樂天は賓なるや。住みはてぬ世に、みにくき姿を持ちえて何のせん、命長ければ耻多しとは、兼好も申し、に、嗚呼厭世の福音は遂に永く宇宙の勢力を占めざるべからざるや、滔々たる宇宙、心なき身に猶ほあはれは知るゝあり、況んや情あり、血あり、涙ある一介の男子、豈に永く此の蠢々裏亦永住の境を求むべけんや。宇宙は迷妄あり、火宅あり、飄逸して世の俗群を抜き、獨り高蹈する可あらん乎、果た閑々として禪堂一宵の夢に丸腸と寸斷する可なる乎、所詮吾人は如何にして此の世の苦痛を

脱すべき乎、之れ宇宙は最大問題にして、印度「アリヤン」人種が、彼の靈魂不滅説を経とし、輪迴説を緯とし、以て翻然厭世の觀に打たれて、茲に人世を解脱せんことを。實に頓悟徹底は鉄槌は、常に吾人の腦裏を撃ちて、千年は一夜の夢にして、後世は唯近づけりと、絶叫しつゝあるあり、即ち超然として此は浮世を蟬脱して、以て悲凄の事を免れんとするは、先づ厭世家が最初の思想なり次に少しく厭世家が思想の變遷を述べん。」

(未完)

初 歸 省

鳩 の 園 人

樂しみに樂しみし暑中休暇は來りぬ、何とやらん云ふ苦しき關所も、今は早、昨日の夢と過ぎ去りて、今朝起き出づれば、びしんと縛られたる柳行李のたのが起きいつることの遅きをば啣ち貌なるモ亦をのしきや。

腕車を驅りてステーションに至り、切符を求め、荷物を預けて、富山より來れる流車に飛び乗りつ、サテやれ〜と思へば、今更に、一歳ぶりの歸心、矢の如く、一瞬千里との形容する流車の進行も、遅々たる牛歩の如き心地するふそわりかけれ。

此日と畏日煌々として流汗衣襟を濕ほし些の風さへあらねば吾は扇を弄して切り涼味を貪りしが餘りのもどろしさに、獨り車窓より郊外を眺めやりぬ、此時、流車は煙を吐きて、美川のあたりをば眞一文字に進み行きぬ、追想す、杜鵑血に叫べる頃、我北辰半千の健兒が意氣昂然として此あたりに陣營を布き、校旗風に翻へり、喇叭天に鳴り響けば硝煙みる〜雲を起し、砲聲さな

から迅雷の如く、日頃、脾肉の嘆に堪へざりし貔貅が猛然として此白砂青松の間に雨となり風となり、或は龍とあり虎となりて、奮闘激戦し、白刃閃々、彈丸飛注する處凄まじき呐喊の聲と共に鬱勃たる英氣を迸發せしめける名残の蹟を忍びつゝ、小松、大聖寺なども過ぎて福井の城趾を望む頃より我はとろ〜と居睡りを初めぬ、されど流車は絶えず進行をつづけて、それが面白き夢を乗せけるが誰が呼び覺ましけん、目醒むれば車はいつしの敦賀灣頭をたどりぬ、よれあたりの眺をかしき景色は事新たらしく言はずとも知る人ぞ知るならんが今わが面白しと思ひたるふじのみを叙し去りなんの、

流笛一聲、車は煙を後に殘して轟々たる響と共に眞ッ黒かる隧道に走り入りしが、忽又馳り出でて崖下を瞥見するときは磯うつ浪に洗はれたる白砂一帯、蘚苔の如く見ゆる青松の椽と圍みて、日本海の蒼浪に對し遠く望めば沖合を駛する白帆はそもいづち行くらん睡るが如く波の上を滑り行くに我乗れる流車亦トンチルの内に滑り入りて闇々裏の内、轟々たる響と喧囂たる人聲とを耳にするのみ。流車は再隧道を離れぬ、此時空は斷雲浮々として、モノトニーなる海面も漸く趣を添へ、大うねり小うねりをなして寄せては返へし、返しては復も寄せくる大浪小浪忽巖角に碎けて、花と散り、雪となりて壯觀殆身は車中にあるを忘れしが流笛の響き渡るや身は忽焉として隧道の内にあり、四顧すればあやめもさうぬ暗黒界、生きながる夜見の國をたどりて、地獄の底に陥りたるが如く、譯もなき妄想を、めぐるせば、可笑しやな、面のあたり、百鬼跳梁して、善良なる人々を苦しめ、阿修羅王荒れまはりて、阿鼻叫喚の聲耳を掠むるに、我は憤然、阿修羅

大王の生首、引きちぎり此の百鬼を夷げて、彌陀の光明を放たんと思ひたりし一刹那、瀛車は又トントルを立出でしに、そこらあたりを見まはせば衣服の内部の醜を蔽飾して人らしく装ひすませる人々の面貌を見るもをかしたや。遮莫、天然の美神は我を抱擁して我はこの時最も愉快あるランドスケープに接しぬ、願望すれば何とやらん云ふ岬は海中に斗出し之に對する磯山はうれ三保の松原にて漁父の爲に羽衣を奪はれたる天女の如く、松の緑を髪となして半身を海中より現はし手を以て近傍の諸山と招くが如し此磯山と此岬とにて擁せられたる曲浦は即敦賀灣にして波碧く幽のに聞ゆる鞞鞞たる水聲は聒やくが如く、松籟また優しき調を奏して互に相和し吾をして床しくも淺からぬ思ひをなさしむもの哉、あゝ美なる哉此景、見るものは凡てこれ一幅の彩色畫、然れども此愛すべき浩蕩たる海面と、優しき磯山の姿とは又もや隧道に隔てられしうら、われは心中竊のに此次は如何に晴れ々しき景色の我を迎ふるならんかと楽しくトントルより出づることをは待ちたりしが晦暝次第に明うるなり行きて全く夜の明けたらんが如く、瀛車隧道の外にはしり出しかば、首を長ふして車窓より凝視するに、哀れや、目前の山巒に塞げられて、掌中の珠を失ひたるが如く、うたゝ索莫の感なき能はず、是より吾は感々として楽しみなきに苦しみたりしが、殊に柳ヶ瀬の隧道にさしうゝりし時の如き、殆吾を忘れて其長きを啣ちたりけり、

瀛車は坦々たる近江路を駛りぬ長濱よりは例の琵琶湖の景色もありて稍面白きものから、心も亦之に慰められぬ、彦根あたりにやありけん、夕立雲の驟りに比叡山岫の一角より躍り出で、釣人騒ぐよと見る間に、白雨一過、暗澹たる湖面を叩いて欸乃幽のに、大津行の瀛船は驟雨れ來襲にしきりに瀛笛をなふせり。

瀛車京都に近づくに従ひ吾は車に倦み疲れて目を閉ぢ口を噤みて人の話し聲さへ、うるさきやうよ耳に響きぬ、然れども車内愈雜沓し語るもの笑ふもの言ふもの叫ぶもの、さても様々なる人れ心の中よと徒らに考へしが瀛車は此有様にて京都につきぬ、乗るもの下るもの例の如く押し合ひ揉み合ひしが、此の處にて吾は奈良線に乗り換へつ、宇治驛まで至れば突然一歳合はざりし朋友の、我が従弟等を連れて満面笑を湛へつ我を迎へしに、吾も嬉しさの餘り、千呼萬喚初て口より迸ばしり、心中無限の情を語り終くして、不知不識の間に楽しく故郷に入りたりや、

常には眼に馴れたる故郷の山水も初ての歸省には何とあう懐あしく、富雄川の水、信貴山は暮靄、それにも増して最も床のしぐりしものは、雲表に聳ゆる彼の七堂伽藍の五重の塔り、夕陽赤く、薨の上にさらめき渡りて、紫雲そのうみに靉靄せる處、今も尙昔しながられ面影を止めぬ、吾は友や従弟等に圍れて徑をたぐる途すがら、歛を肩に牛を逐ふて静かに家路に向へる村童野翁の諠を聞きつ、やがて我が家にかへりつきぬ、笑まじげなる顔、喜ばしき詞、温めき情、慈ある賜は、凡て我が身邊に集りぬ、あゝ昨日までは流汗淋漓、机に嚙り着きて苦みたりしが今宵は夕顔棚に下庭に打寛ろぎて、恣に涼を入るゝ樂しきよ。

袖のほころひ

青

冥

つれ打纏ふ貧書生、見苦しども何をか憂へん、六日の旅寢に、草の枕は結ばねど着更ふる

きぬ更にかければ、垢付き綻ぶるもまた理ぞのし、今此編のちぎれくゝなるも亦ひとしければ、
うくは名づけつ、

萬能の人はいざ知らず、人は己の好む處、長ざる處によりて身を立つべき事なり、一苟も細事にう
づかひ、世の潮流に浮沈して、事に従ふは大なる誤ならん、唯遠大の志を立つるを望まほし
けれ、

我れ稚くして父に後れぬれば、よろづ心に任せぬふのみあり、今年の初め、「家事」患ありて、
如何にして唯一人の母上唯一人の姉上の心を安め參らせん、行く年月は流るゝ水の如く、學の海
はなほくゞ遙けし、さらば我は身を陸軍に投下て早く一身を立てんと、伯父君の許へ申遣し、
に、さもこそとてうけがへ玉へり、さるを母上はとにのくに喜び玉はで、汝の心知り難しとて、
我事におろそかなるを責め玉ふ故に、我も亦かく心を惱め、親の意に背くは、おかりゝ不孝なら
んと、遂に企てし志望も斷ちて、文科に入らんと思へば、金澤へ行き度さ旨申遣すに、母上は唯
一人の子ければ、いゝにもして我子善き者にせばやと、思召す心根のいと深きゆゑに、直にゆる
し玉へり、こ度伯父君の意に背きたるにつけては、御怒もやと御心を痛め玉ひ、度々よき様に
御文遣されぬ、あゝうく物思ひわつらひ玉ふらん、我罪深きも今更いうゝせん、思へば昔より
親煩惱と申すに、我母上ばかり有難き人はあらど、さるにても拙き我身を、杖柱とも頼み玉ふら
ん、あはれ、
内に貯へあるにあらぬに、か程の金いかにして調へ玉ひしぞ、文にこ度は學ぶべき道も愈難くら

んには、奥歯かみしめて進めよ、若し又遠き彼地に行かば、身を大事になど、流石は母御れ優し
き仰せ、厚き情にこそ、御文の奥に、

行く旅は陸も船路もこゝろせよ

立つ白波もあらんこおもへば、

途中を氣遣ひ給ひしにや、女の身にもうく力を添へ玉ふ學の道、あり難しとも有難く、一度は泣
き一度は喜びぬ、神よ佛よ、拙き我身を捨て玉ひそ、我には一人の母あれば、助け玉へ、と只
管に祈りぬ、されど我は母上には似氣もなくて、行末も覺束なく、廣き學の海に漂ひて、いつまで母
上に心を痛め奉るべきにやと、五月雨の窓打つ夕、ひとり涙にかき暮れしはそも幾度ぞ、されど
此儘にてやはか措くべき、力のあらん限りは勉めなんと、愈心を決して、六月の末つかた旅路に
上りぬ、我故郷ならんには、名残を惜み、別れの涙わざとにても絞る人あらん、旅より旅の事
あれば、門出の折に見送る人一人だにやし、我は六月廿七日の夜といふに、傘肩にし柳行李小脇
にのい抱きて、池田の停車場に急ぎぬ、物の本に昔俊基卿の東に下らせける時、池田てふ驛にて
よまれしなごいふ悲しき歌など、驛の名につけて思出されぬ、今は便よき瀛車のあれば、昔の
あはれも苦しみも知るよしあり、

時に四五日前より降りにふりし五月雨は、今日は晨より霽れて、空のけはひも清かりしに、夕暮
の頃よりやうく雨雲おほひて、温さむさくるしく、出發の仕度とて書籍衣類取つくらふ頃は、
空いよいよ墨を流したらん如くなりぬ、我は翌廿八日に立たんと思ひし折、近きわたりの中某、

今宵上京するよし聞けり、そはよき同行りなど直に其人の許に向ふ、此時雨は俄にふり出で、その事も辨へ難し、中君と己とは池田に向ふに、君が宿の主人娘などの人々も、降りしきる雨を厭ひもせて見送られけり、我も六年前故郷へ旅立ちし折に、母上姉上れ我を送りて白浪打よするみきはまで、褰りひ上げてさらばよつこめてまめに勉學せよと、後は早や沈み聲にて打せもり玉へりし事共、思出さるゝうらに、我を送り來し人あふねと、何とぞ嬉しき心地しつ、瀛車に乗りし後も、窓より首さし伸へて、辭儀に及ひぬ、夜の十一時七分に、門司迄とて切符を買へり、瀛車の中より見れば、最早や驛夫は相圖の鐘打ふり、續きて瀛笛一聲響くまゝに、見送りし人々は、後の方へうろくど引退さぬるは、既に車の進みけるなり、次第くゝに車の足は早まりぬ、我は頭を垂れてあゝゆたかなる此熊本よ、住みなれし熊本よ、我は暫らく汝と遠かるあり、おはゆたかなれ、幸あれと、心に叫びぬ、首を上れば、打しきる本妙寺の大鼓の音は遠くなりぬ、朝に仰きし阿蘇の高嶺の煙は、また見るを得ざるか、夕にのみみし、白河の流れの音は、また聞くを得ざるう、さては日頃親みし友とも、語らふ事能はざるの、見返れば煙は車後を埋めて、驛舎の燈火のすのかり、

朝な夕を眺めもありぬ景色さへ

名残にさゆるくまもこの里、

煙と名残の後にこゝまれど、乗る車のいそがしくて、山は走り水は退き、立ち列ぶ電柱は夢の如く馳せて、早や植木くくと、角燈もてる人は叫びぬ、植木は世にしるき丁丑れ古戦場あり、吹く

風腥さにあらねど、我亡せ玉ひし父上の、御魂さへいつくに居玉ふならんと、思はれて悲しく

武士のたふれしあどは夏の夜の

つゆふく風も物うりけり、

恨みても甲斐なきものと幾度り

おもひ出らるゝ亡き人の上、

また進みて驛夫の叫ぶを聞けば、高瀬なりけり、集りては散る雨雲のまにまに、月の顔を瀛車の窓より伺ふも面白く、又昨日今日村の少女若者等か歌諸共に植えけん稻田の、水湛ふるに、月や雲の見ゆつ隠れつゝる様は、是々田毎の月ありける、歌いひ出でたき程なれど、優しき言葉も浮ばざりき、幾多れ村落幾多の山、幾多の川は濛ろげの中に迎へ送りき、晝ならば青山白水のはねあらんに、唯木は黒く立ち、水は恐ろしく流るゝを見るのみ、大牟田をすくる頃は夜半ありけり、瀛車の動くを甚しく、列車のつぎ目軌り合ふ音は、旅客の眠りをさまゝ、窓にかゝる月の影は、時に澄み時に濁り、之も亦眠むたき様なりけり、今は中君も頭を垂れ、語らぬ人なく、獨目を光らして車の内外をにらみぬ、夜の二時に久留米に着きぬ、北端は名に負ふ筑後川にして、鐵橋を架す、かたへの紳士吸かけの煙草の火を、予う手に落して疎忽の罪詫ぶるも可笑し、予は手前惡ろかりければ、こは筑紫次郎とて、菊池氏が討死したりける所なるよし、などいふ暇に鳥栖といふ所につきぬ、又程もなく、車の音急しく進行くに、葡萄酒煙草の廣告看板も形走りて、瀛車は烈しく、櫛の森杉の林も左右に認めつゝ、田の面には鳴き交はず蛙の聲がらくくと、いつとも變

かず、田代といふ驛には、車止めもせですぎぬ、我はつれづれあるまゝに、謠曲の二節三節、小聲に唄ひぬ、六七間隔たりて、若き男女れの、いり合るも、時にとりては嬉しくも、又面白し、三角削形にゴートド、ホークと記るす、煙草の廣告立てられざる隈なく、一軒屋の楹の木に、風雨に露され乍ら立ちたる面白し、車にも乗らで旅する人、日毎に鍛起ふる農夫あとの、暑よけに此蔭に息ふあつん、思ふも淺間し、山を削り谷を埋めたる軌道の、千變萬化の景を齎すも、大がた壯大なるものかし、とある茅屋の小さ丘れ下に木隠れて見ゆるは、大和繪にある趣いで予の心にそみぬ、

世の塵をはなれ果たる月にこそ

心をむべき光をも見れ、

幾多の停車場は東のまにすぎぬ、恰も赤間といふにて夜は明け離れ、車こゝに停まれり、なほ進む程に、朝風そよ／＼と吹き、袖のあたりいと涼しく、東の丘西の森は、青々として麓に朝霧立ち籠むるさま、筆も及ばず、我は歌よみ出でんとも叶はず、ゑにも得うつさゝりき、杉山のいげみ、熊笹の露飛ぶ邊りを過ぎる、げに心地をや、左の竹の林より、眞竹かい竹かどの打なびさて、巢はれる蜘蛛は影も止めず、唯露の玉白くかゝれる果敢なき様も面白し、

さゝかにの糸につらぬく白玉は

朝日に堪へぬつゆにざりけり、

進むまゝに右を見れば、古屋の軒もや、傾けるに、庭のあぢさゐの花、咲きほこりたるも、花を

き折には美しくも見ゆ、又左には小やゐなる茅屋の門に柳の糸いと長く打靡き、露ふり拂ふ景色いと面白し、車は北に／＼と進む程に、我はいつゝの眠りにつきぬ、目さむれば恰も午前六時にて小倉に着きたり、小倉の西は名に負ふ玄海灘にて、眺むれば水や雲ともいふべく、限りなき様あり、

寇波のよせー昔も知られけり

はてなくうすむ大和田の原、

今は砥の如き海の面を、眞机打渡したる船の、東西に行くを、小松の枝にかけ見るかど、こよあく面白し、

打なびくあさ霧四方にむら消はて

眞帆に夜あけぬ海人のつり舟、

なぞ口すさむ、

停車場の前を通る小倉小學の女生徒と見えて、大きなは十二、次には八ッ九ッ、其次は六ッ計りなるが、紫水色さはり其他色々の袴つけたる、いごふざはしくて美しく、女生徒に袴つけしむべき議、一時盛ありに、此地に来て初てそを見受けたるは、我喜ぶ所なり、八時過ぐる頃ほひ門同驛にはつきぬ、門司は本土九州の接する所、本邦の西關ともいふべき地なれば、船舶の出入絶えず、又汽車にのりて本土九州を過さん人は、必ずこゝに下る、我は徳山に向はんとす、此時日は照りにてりて、是迄打續きし濕も、さき消えん計あり、暫くして我等か乗る船は動き出て、檣

林の如く立つ中をりけて、もはや九州の地を離れければ、所謂速や瀬戸にて、潮は矢を射る如く、舷に碎くる波凄まじ、見卸せば海は青くして千尋もあふん、鬼鮫や躍るらん、仰き見れば門司馬關の兩山相對して、天然の關門を形造る、或人の句に、長閑けさや馬關の紙鳶の門司の空と、されどのは近からず、船の甲板に出つれば、炮台の散見せらるゝや、實に我國の要地と知る、船は北をさして走り、午后三時といふに、漸く徳山の港につく、瀛車山陽の平地を走せて、柳井津をすぐる頃は暗くなりけり、大本營として、曾て賑しかりし廣島も、今は淋しくかりたる事、乗合の人の話にて聞きぬ、それより尾道岡山の停車場をすき有年といふ所につく、俊基卿が章の思出されたれど、今は夜の田鶴も鳴りず次に那波驛ななばに來る、赤穂四十七士の墓、南四十餘町と記さる、程し近くは行きて吊るはんものをと、我旅俗の急しき旅を嘆つ、さうく思ふ内に、やがて姫路につく、姫路の城は壘高く聳えて、中國の平野を壓するさま、朦ろにも見えぬ、餘りのつれづれに、

名にし負ふ姫路の城のすがたをば

こよいの空にちふとみかつき、

なぞ戯れぬ、又明石舞子など、古今に聞ふる名所を過くれど、車を下らされば、其景色れ程も知るよしなく、恰もよし三十一日の夜、明かりけり、ほのぼのと明石の浦の朝霧にてふ古歌の、目の前に在るも、島のくれ行く船を見ぬは、口惜しかり、舞子の停車場の邊り、渚清らにして、松樹生ひあびさ、茶屋の軒に灯燈の幾つとなく、朝風にもふき合ふ様、いと涼し、急かぬ旅なら

ば、暫く此處に止まりて、明石の明月、舞子の濱風に放浪はむれをと、憾み乍ら、松葉うつ散る音艶なるをさしてすぐ、兵庫に至れば、眉墨の匂ゆかしき敦盛の墓あるよし、今は青葉に閉されもやせむ、標木は墨文字よみも終らで行く、路のほどりは、毛色違ふ人の家建て列へられて、みやびかなる景色も、次第に衰へたふんやうあり、思へば昔の名勝佳景も、皆雜關の地とはかりぬめり、一瞬の間に神戸へ着き、大坂京都の停車場のり越す、

ゆくりなき旅に―われ百敷の

都のさまは知るよしもなし、

と云ひつゝ、是より野路山路をすぐ、このあたりも農夫の田草とるありて、粒々辛苦の程も思はれぬ、眉目さうつしくしき女の子が、形計りの衣きたる十許にて、弟の左の手を引き、小き妹を背負ひつゝ、畦路傳ひにゆくに、弟は右の手に食ひかけの握飯もち乍ら、此方見上るさまのいよいよ、實にうつくし、我十とせ前、田植頃にしなれば、友とち打連れて、鱧蟹を捕へんとて、稻田踏荒らしゝとなき、念頭に浮ひ來るまゝ、幾度も見返りつゝ行く、其夜米原に宿し、翌七月一日未明に瀛車に搭し敦賀福井もかけぬく、中國より金澤につく迄は、専ら我用事の心にくれば、筆とる業も出來ず、此日の午前九時に、いよいよ金澤驛に到る、勇みに勇み傘振りさけて市に入れば、流石は北陸一れ都にありける、先知人の許に行き、居を定めて荷を卸せば、旅路三百里の疲れには、一睡千金の思ひあり、翌二日の夜同郷の人々數多訪ひきつれば、有繋は同郷の好みうれしく、夜半過ぐる頃迄のたるふ、試験は四日に始まり十日に終れり、成績の如何に、

獨心をいらつとも、今は甲斐なし、若し叶はずば母上伯父君に何の言ひ譯あるべきと、此頃は夜も眠少で明しき、たま／＼辻占を買ひて吉凶を卜するなど、女々しくもまた淺間／＼かりき、かくて十五日には、良否は程分りて、友人是夜ぬしも我も共に良かりき、是にて我志す所も、緒につくと思へば、今日まで打塞がり胸の曇りも、唯一時に長閑になりぬ、此上は母上にも、伯父君にも、申遣すべしと、あはて文したゝむるを、餘所より見ば、いと可笑しなりけん、

海山三百里は旅路、其間佳觀絶景頗る多し、されど車は足早く、このつは風雅の嗜少き我れ、筆を染むる既にあやまれり、されど唯見るまゝ思ふまゝを、一枝の筆にはせんとなてたりしは、そも借越にや、見る人こそろしてよ、今や秋風吹きさしきり、蟲の音鳴くなべに、たのづうら、我ふるさとも惚るゝに、況ひてともし火ほの暗き窓の下に坐しては、云ふべからざる感懷あり、唯眠られぬまゝに、燈火のき立て、筆をむれば、廻らぬ水莖の痕耻かし、



文 苑

山中小景

蜻 蛉 生

昨夏、我獨り節を曳きて山中に入りぬ。

鉋を振ふて岩石を試んごにも非ず。草花を折り昆虫を殺して標本を作らんとにも非ず。唯只、没趣味なる社會を去り、平板なるライフを脱して、最も自然なる、平和なる寔區に入らんため。仙を尋ね、藥を求めんごにも非ず。詩を仰り歌をうめかんとにも非ず。唯只、崇高森嚴なる天然と交はり、清白純潔なる天然と語り、以て新なる生命と、新なる勇氣を得んが爲に。

四圍を繞くる自然の牆壁は、都塵をして大氣を汚さしめず、瀛車は煤煙亦遠く至らず、天は蒼々として高く懸り、地は黙々として清く横る。澄然として練るが如き穹窿と、流泉の響、松籟の颯々を含み、幽禽飛び白雲迷ふ自然の畫壁とは、この寔區をして、宛も、神秘の斧を以て打建てられたる一大殿堂の觀あらしむ。

乞ふ。先つ穹窿を語らん。も、夫れ、晴るらん、山巔より山巔に至る迄、深潭の如く底深く澄み、高大にして太静なり。鳥遠く舞ふて晝の月を掠むるやといとあり。亂松の間にほのめく夕月。檜木原に落つる曉の月。星の夜は静あり。榻を葡萄棚の下にうつして、流星を指して隣翁と語る亦あり。業に倦みて、天を仰きて語るを聞けば、雨多しと、一はいふ風來らんとすと、

他はいふ今日も暑しと。借問せ。昨、西嶺の頂のほそまひ雲を見し。夕、野末に立ちて、南より来る日光を帯ひて金色なせる雲の間より、薄黒き雨線垂下して、尾花の末に連続せしを見し。はた日没して月未だ昇らず、蒼茫たる天は一角にたゞよひし死雲の距離を見しか。我は思ふ。天を仰ぎて永遠を見、静肅を見、崇高を見、伏して希望の狭小を悲しみ、心胸の燥狂を顧み、品性の野卑を省る能はず、天の晴れたるを見ても猶つゞやくもれば、彼等の頭上天を戴のさるものなりと。我う國民は由來天を畏れ天に親しみたり。降て天象をいふもの甚だ多からず。横に空間に亘るの外、縦に高大を見ず、いかで偉大なる國民の抱負と、落々たる氣概を爲くるを得んや。謂ふ勿れ。島國的と。仰げと瀨氣清みて天高く、一步舟を浮へて出づれば一碧萬頃、宏大なる舞臺は前に開けて、國民の活動を待つ。高大なる思想を鼓吹して、凛々たる活氣をふりおこさんは今日の急務ならずや。

時ありて悠々岫を出て、浮遊する微雲、亦天の高と静さを加ふ。朝、山嶺の紫の雲、夕、西山は端の赤き雲、墨よりも黒きたるる雲、ましてセルレーが

White fleety clouds,

Were wandering in thick flocks along the mountains,

Shepherded by the slow, unwillingly wind.

と歌ひけん白雲、籬邊を綴り、塔頭にたゞよひ、松林に搖曳するをぞ、ふうふうに閑あり。巔に攀ぢて逶迤たる連山を脚下に瞰、岩陰より湧く黒雲、倏急にして天に蔓り群山を壓する時、下界

の雨を想ふ亦壯なり。晴雨計となる西山の雲、野末匂ふ雲、いろく名付けられたる雲を挙げなば雲の如く尽せざるべし。

更らに眼を轉せば、東に起りて南に走る高嶺と、北の方より遙に西に至る山脈と相對して、戈れ如く、槍れ如く、轟々として天空を畫す。雪を戴く東方の高岑は、年老いたる巨人を望むが如く、思はずも帽を脱せずんばあらず。白雲腰を擁する千丈の崖、炊烟幽に颯りて豆よりも小なる谿間の村落、うしこの斷崖、この巨巖、晝猶くらき太古の森、森かげに咲ける百合の花、小丘は波打ちて高嶺に朝し、丘と丘との間には野馬走り牧童歌ひ、丘上には疎林の間より隱見せる白雲塗の村塾ありて、この寰區の最高れ智識を集め、東北の岡の上には古寺亂松の間に立ち、其の曉の鐘、夕の鐘は、全村に勞働と休息とを命し、活動と平和の號令を發す。この間に在りて、人は山嶽の偉大なる威嚴に畏れて、これを崇め、融々たる温藉に親しみて、日々斧を携へて太古の森に入り、薪を折り、牛を放ち、日一日高く歌ふ。

以爲らく、巍然として大空を凌ぎ、蜿蜒として平原を畫し、偉容堂々たる高岑巨嶺、はた林間には小鳥歌ひ、野は豁けて牧場となり、小兒の臥したらんう如き逶迤たる小丘は、人類に何をう鼓吹する、動かざること山の如しと旗幟に記る鶴翼魚鱗何するものぞ、屹然として敵を壓せしは誰ぞ。然り、不動山の如しと。ラスキンは曰けり、余には山は全ては天然の景色の最始にして最終なりと。然り、平板を破りて自然に高調を與ふるは是なり。南歐に降るの途次、千古の白雪銀の如く山嶺に冠せ青天に屹立せるを見ておほえす帽を脱して敬禮せしは誰ぞ。然り、其の

威儀凛として犯す可らざるなり。いかも眉すみあせる紫の山、自ら心暢然として平和を感せずんば非ず。あゝ萃乎たる威容、堂々たる山姿、又其の温藉春の如き、死の如き沈黙は、吾人をして崇高恐怖の念と共に、又幾多の慰藉と無言の教訓を覺えしめずんばあらざるなり。

偉人とは何ぞ。セントヘレナの孤島、波濤岸を噛みて音雷の如き處、空しく腕を撫して渺々たる大洋天と接する處を見、又頭を俛れて侍臣に向つて曰けらく、余は人生に就きて稍、會得する所あるを覺ゆ。余も亦『人』なり。しのも基督の如くいよ、『人』として圓滿するに及ばざるや大あり。アレキサンダーもシーザーもシャーレマンも大帝國を建てにき、我も亦然り。然れども彼は『愛』を以て帝國を建てたり。而して今日猶幾百萬の人は彼の爲に生命をもの、屑ともせずと、傲岸奈翁の如き猶劍を投して自然に飯りし時、愁雲胸中を掩ふて、『人らしき人』とは何ぞやとの問題は、彼れ釋然たる能はざる所なりし。機運に乗して翼を傳つて翱翔する狡兒と、噪狂ある武夫とは、未だ以て摸範とすべき性格にあらざるあり。人類の進路の永遠に向つて達觀し、山の如き儼乎と、海の如き宏大とを以て、身心を貢獻するに至りて人の偉大を稱するを得んか。今や社會は單調となり人物は平凡とあり、品性はいよゝ墮落し、摸範とすべき性格は在らざるの時、身を高頂に側て、巖角に依り、悲風脚底に翻るれ處、天を仰きて長嘯し、又は岸頭に立ちて萬里吹き來る海風に胸襟を曝らして遙に水平線のかたを睥睨し、自然を讀み自然と同化するに非ずんばいふで品性の高と大とを得べけんや

The righteousness is like the great mountains,

The judgements are a great deep.

と、然り。姦雄迭に起蹕して、一時人目を塗るも、輿論は正義の士に毒を呑まむるも、衆口は金を鑠すも、仰きて蒼々たる山色を仰げば萬古拭ふか如く天に聳ゆるに非ずや。

『靜』の如き活動、『平和』の如き喧噪は是れ山間の晝なり。森の斧れ音、歌の聲遠く聞あは、小川に浴ふて水車の音、牛の聲緩やかに響き、日あたりよき南園の小柴垣のあたり舐出てゝ走る。この間に我は城墟を問ふて嶺々たる松嶺にありし昔を追想し、あるは荆棘を分けて斷碑を尋ね暮蟬靜かなる處苔と掃つて讀む。あの岡の上の龍は躍るが如き老松はこれ昔、將軍駒を繫きし處、かの古き社は松の車に朽ち、風に刻まれて茲に數百年、朱の玉垣は色あせて僅に當年の名残をとめ、社頭は松のこぼれ葉に埋まれて人の訪ふかく振鐸徒に啄木鳥の來りて弄するあるのみ。山中の怪窟はこれ山賊の住みし處、鳶のづら纏へる岩間より清泉迸る處はこれ砂金を得し處と、或は泉に、或は古墳に、或は深潭に、幾多の興味ある傳説を聞き、岡より岡へ野をたどり獨木橋を渡りて日一日逍遙す。もし夫れ、月は亂松の間にほれめきて四邊蒼茫、夜色野を捲きて來る時、向の岡は墨く横はり、東方の丘亦眠るが如く一抹淡靄夢の如く山腰を繞り、あふ白れ音は遠く響きて、我を靜寂に誘ひ、松風の音いよゝ清くそみ夜もふけ行くまにゝ萬籟闐として墜露の音もいとかすゝなり。輿に乗して獨木橋の上に立ちて天を仰ぎて星斗を見、伏して流水を見れば月と水と争ふて流れ去る。もし試に石を深潭に投ずれば月影碎け、澄然として石水底に落つるれ音を聞くに至りては靜寂の景終に人間のものにあらざるあり。思ふ、今や最終の列車、金城に着

きぬら。友は今余獨り山中の橋上に佇みて石深潭に落つるの音に耳を澄すと知るや否や。

余は穹窿を叙し、畫壁を開展し、山中の畫、山中の夜と語れり。今は山中の民に就きて謂はざる可らざるなり。傳に聞く米國の小説の一節に曰へく、ヴァーモント州の農夫が、山中より出で、ニューヨーク市に赴かんとするや、ニューヨーク市にて人に欺かれざらんが爲に、發せるに臨みて神に禱ると。朴訥なる山中の民豈權謀術數を知らんや。晝は斧を振ふて木を伐らんのみ、鋤を採つて山畑を耕せんのみ。夜は爐邊に坐して一壺の村醪に隱然として眠るれみ。過去も未來も眼中のものに非ず。富もなく名譽もなく、隨て後悔は在らず妄想はあらず、結果に付きて些の心を勞する處なく只全力を擧げて木を伐り土を堀るのみ。うくて日一日力の限を努め、夜は夜すがら死せるが如く眠に入る。我が邦に歌人は詠ざらく、明日ありと思ふ心れ、あだ櫻、夜半に嵐れ、ふるぬものうはと、獨逸の詩人は曰けらく、明日あり明日あり今日のみならずと。過去につき未來につき想を立する多々ありと雖、我は寧、明日は明日の事を憂慮せよ、一日の苦勞は一日にて足れりといふの一層適切にして明透あるを覺ゆ。謂ふ勿れ。是れ卑近なる現實主義と。全力を擧げて業を力め、夜靜ある時一日の行爲を顧みて日誌に記るし心に病しき處を、安んぶに眠るを得ば是れ實に善かざるや。米國に大統領の誰なりしが、我は數十年來安眠を得ざりしを記憶せずと眞箇に是れ誇る可きの榮譽に非らずや。過去といひ、未來といひも、其起点は現實に在り。理を追ふと愈々深くして愈々理に迷ひ、現實を忘れて愈々高遠に失し漂々として根底ある意義を有せざるに比して勝ること萬々なりと信ず。吾人所謂現實は、理想を離れざる現實、現實に

遠さからざる理想と意味す。高尚なる現實主義は、大理想に向つて確實整然たる歩調を以て精進するの謂也。史に徴して亘細に討究せよ。興國に要素は是にありて彼に在らざるにわらざるや。

山中の景何んぞ如上に止まらんや。物質的潮流は滔々世に漲り、自我と金とはあつゆる方面に於て唯一の標準とあり人生は愈々乾燥に、忙劇は趣味を奮ふて社會はいよいよ無味砂を嚙むが如き時、時に眼を轉じて、自然と語り、自然と交はり、我々の前に展へられたる自然のブックより、更らに偉大と崇高と清新とを、讀むの要實に少々にわらざるあり。

The world is too much with us: late and soon,

Getting and spending we lay waste our power;

Little we see in Nature that is ours;

We've given our hearts away, a sordid boon! (Wordsworth)

我謂はんと欲する所は只是而已。

山中を去りて、今や交黃塵の中に迷兒とある。只時に山中を默想して松風の音、流泉の響を聞き、夢魂いくと度り飛んで彼の橋上を逍遙するのみ。』



新體詩

仙境 中村 了

(ダイカー、オフ、ウエーキフィールド

中の一節)

『やよ山人よ物申す、

火影はれめく彼の里は、

いづこあるらん知らねども、

あはれ彼處に導けよ。

淋しき増さるこの夕、

歩みつゝのれて今はしも、

踏み迷ひけむ荒野原、

行けどもく果なき。』

みを聞居たる山人は、

徐ろに口を開きけり、

此野は魔神のさまよへば、

汝を死地に導かむ。

やみ路に迷ふ人々を、

救はんための我家なり、

忍べ若人詫びしども

與ふこゝろはまこゝろぞ。

來れこよひは我家に、

與ふるものを享けようし、

蒲の寢床と藜の羹、

我が祝福と安けき眠。

谷間さまよふ禽獸を、

いのでら屠り殺すべき、

我を惠める神のごと、

我も彼等と憐まむ。

我は神より恵まれし、

艸生の草を摘み來り、

泉の水を汲み來つゝ、

野菜れみなる馳走せむ。

いざ旅人よ汝が持てる、

憂世のうさを棄てようし、

人は此世に事欠じ、

欠くとも永く續のねば。

いと優さしき言の葉は、

暫く茲に途絶ける、

小腰かゝめつ若人は、

伴はれつゝつゝいきゆく。

名もなき荒野の艸興く、

いぶせき小屋を横はる、

賤り伏屋が避難所り、

旅人救ふ仮りの家か。

僅の擔石の野藏物は、

こゝろ置くこと更らにあし、

柴の折戸を推し啓き、

罪なき二人は入りてゆく。

日は早やくれて山樵も、

おれが家おといそぐ時、

主は櫛をたきそへて、

こゝろの限りいたはりぬ。

野菜の食をとり設け、

すゝめ乍々に笑ひつゝ、

過ぎし昔を物語り、

長さ夜をばまぎらしぬ。

その心をや推しけむ、

小猫は戯れ蟋蟀は、

竈にすづく聲高く、

もゆる櫛火もたと烈しし

左れども何の詮やある、

思ひに沈むこゝろには、

憂の雲の鎖りけむ、

涙は雨こそゝぐさなり。

いや増す憂のその本を、

知れどあるじは知らず顔、

『いさゝか持てる悲は、

いづこよりこそ來りしり。
玉のたりごの逃れ出で、

心ならずもさまよふが、

つれなき友と恨みてか、

將た又戀れのありみり。

金より成れるよろみびは、

只一睡の夢ぞうし、

賤しき金をたゝふるは、

それにも増してかほいやし。

友のかさけは只名のみ、

小兒をすかき子守歌が、

左かくバ富と譽とに、

従ふ影に外なはず。

世の戀愛は總てみか、

小女の戯言に過ぎざらむ、

此世に眞正の戀愛は、

鳩の巢中に存るのみ。

あゝ若人よ汝か持てる、

その悲とすてよかし、

いかにやしけん若人の、

顔は次第に赤らみぬ。

驚き見ればいつしのに、

顔には艶のいやまゝて、

見るもまばゆき朝日影、

輝くいろのうつくさ。

羞らふ態は漸くに、

高女に息に知られけり、

つゝみ兼ねたる乙女子は、

遂に素性をあらしけり。

乙女はいひぬ『やまや君、

神と君との住居家に、

汚がれし足を踏み入れ、

妾が罪をゆるせし。

あゝる野みちにさまよふも、

元を正せば戀と愛、

うき身棄てんとおもへども、

棄つべき處もあらなくに。

妾の父は多因河の、

岸に名高き富豪なり、

左れども後を嗣ぐべきは、

妾の外にあらぬなり。

雲霞の如き戀人は、

妾を得んとよりつこひ、

妙ある姿とほめそやし、

忘れぬ戀と誓ひてま。

また利に迷ふ人々は、

あらゆる珍品を送り來ぬ、

中にも獨り「エドウィン」は、

左ること絶えておありけり、

襦袢に身をバ纏へども、

富てふものは持たねども、

心さかしく徳高く、

慕はぬ人こそあうりけれ。

谷の木蔭により居つゝ、

歌を唱へばれのづから、

香さき風さへ香に匂ひ、

聲さき森も歌ふあり。

朝日に匂ふ春の花、

玉を磨のける秋の露、

彼か心に比べなば、

己がいろをば耻ぢやせむ。

花と咲けどもやゝて散り、

露は結べどもやがて消ゆ、

彼が心はいつまでせ、

變らぬいろの花と露。

あはれ妾は花の散り、

露の消ゆるにさとはれて、

あゝるつくしの情をば、

仇に過せしこともあり、
『やよ「エルセル」我ころは、
汝の慕へ』「エドウイン」

去にし昔を忘れずば、

いので我をば愛せざる。

淋しき土地を探し得て、
そこに予彼は失せよける。

あちゆる憂をうち棄て、

かへる悲惨あはれのこせしも、

あくて予あちんいつまでも、

妾かなせし罪なれば、

この世のあらん限りには、

失せにし彼の跡を追ひ、

分れなみせそ我妻よ。

死なんところをはたもふかれ。

否分るまじいつ迄も、

彼かうせにしその土地に、

若しも無情の風ふかば、

ゆきて予やがてうせ果てむ、

いざや散りかゝん諸共に。』

妾のために彼うせぬ、

（終）

『否とよ暫し』と山人は、

やらすとて女を抱きけり、

まはそまいかまこよく見れば、

「エドウイン」にて予ありたりし。



和歌

題しらす

紫

影

なくもかむと昔の人のいひにけむ其菊の名のこちたくもあるうな
風清く空澄みぬべき小春日を雨ふりつゝ越の醜國
千萬の書つみかさね城つきて中にはらばび讀ましもの
描きいでし空中樓閣かきけちていねんとすればいよとさめゆく

那谷寺

石山の巖うがちて佛ずるたはわさみせるをこれ僧達

秋興

中村了

露しるし虫のね高し風清しあかかきしるの秋の月夜や
秋夜舟遊して

舟人よこゝろして漕け秋の夜は水の底たも月はやとれり

女郎花

木

嬰

をみなへしたる爲にかは結ぶらむよそほひたてる花の下紐
ものいはことゝはまゝの女郎花あたにも見ゆる露の手枕

虫

のうれすむ心もしらす月ふけてとひこぬ人をまつ虫のさく

文苑

紅葉

慶

七十一

郎

小倉山たるねの霧の色つきぬ木々の梢や紅葉うつらむ

紅葉雜詠二首

定

郎

武士の墓とおほへる葛紅葉わけて一入色深く見ゆ

高尾山みねの紅葉のうつろいて谷の清水は色つきにけり

題吟七首

平岡

顯吉

夕立雪　あきくく夕立雲を日枝に見て釣人騒ぐ琵琶のみづうみ

月下葛　厂がねの啼き行くあとを風ふきて三日月凄し眞葛葉の原

山下鹿　さびしさをひこりをりぬて山蔭に妻とふ鹿の鳴く聲あはれ

暮秋嵐　暮れてゆく秋の嵐をまねけばや尾花が袖に露ぞ散りける

庭初霜　さべの木葉誰拂ひけんと思ひしは庭の面白くむすぶ初霜

川落葉　三日月の光流るゝ谷川に木の葉隈なき夕あらしのかせ

野殘菊　秋の色うつらふ野邊をきて見れば置くつゆ霜をしら菊の花

俳句

雜詠

栗ひるひ思はぬ谷に紅葉をか　果遊

蓮の實の二つ續ひて飛ひにけり　こち

朝寒や下駄新ふき田圃徑

池水や薄れ下月のかけ

時雨るゝや犬の兒吠ゆる床の下

秋比句

愛花

稚の實の片手に餘りこぼれけり

半追ひの背中に秋の入りるな

小女のの 綱洗ふや秋の水

菊把の投げこんであるや瀧不動

袖小屋はあばらにかりて紅葉哉

柏手は 篋に響く紅葉かあ

朱剝くる金剛閣や秋のあめ

景物に飯櫃を得つ秋暮るゝ

秋季雜詠

豆くうて明月見ずにしまひけり

紫影

もず鳴くや物かき畑のはねつるべ

世の中は何れ糸瓜の赤がみじか

文苑

長靴に鼠巢をくふ。夜長。うさ
 亡友の遺稿を編みて秋暮る、
 木犀の湯殿に近き句哉
 朝顔の露吸ふて居るよ小さい子
 守の殿を落し参らん薄哉
 落鮎の水清くして哀れあり
 移り住んで秋の雨さく夕哉
 無哉
 購鳴くや簾に雀のさぐめこと
 曳船れ網をひきづる穂蓼哉
 東山西山は遠し星月夜
 九龍
 聲あけて筏下る小霧深し
 北林
 葉穂拾ふ婆がうしろや鴉れ聲
 松實
 白芙蓉曉方れ星落つる
 柳露
 栗焼きて夜長を乳母と二人哉
 光夢
 鹿聞きて戻る夜明や鹿に遇ふ
 南殿や菊に灯を呼び給ふ

帚木の風が鶏頭れ雨となる
 月虧けて鮎落つる夜の水の音

漢文

過俱利伽羅壑記

村上函峰

戊戌之秋。余在金澤。養痾於深谷温泉。會河原格堂。來自西京。來訪曰。頃先生志氣萎甯。久不見雄文。距此東北四里許。有源平古戰場。曰栗殼壑。蓋一游以鼓舞其文思乎。余曰。諾。七日早發。與格堂俱。自村中左折。村徑逶迤至今町。從茲爲縣道。抵津幡。右轉過杉瀨。地勢漸高。脚尖自仰。屈竹橋。一茶而去。驛端分爲岐。右古道。左新道。乃就古道。草棘蒙道。曲折而登。盤陀稍隆。峰廻巒繞。如列屏障。田圃高低。參錯其下。過山森村。路左有二小邱。曰龍峰。爲古城址。亭午達栗殼村。傭人爲導。入展手向神社。東行稍進。則加越分界。又行數十步。爲猿馬場。左右臨谷。若馬脊然。其南有山。曰源氏峯。可知爲形勝。東下歷長坂石坂。路左見矢立礪波諸山。至埴生村。謁八幡祠。廟祝延余觀源義仲禱捷文。推究字體。決非贗物。既而復來路。僮僕而步。汗滴鼻尖。頗覺疲憊。薄暮還栗殼村。投社祠家。飯畢劇燈談。古夜半就寢。八日昧爽隨導者。復至猿馬場。當壽永之際。平維盛大舉北下。與源義仲戰敗于此。史曰。義仲進陣黑坂。維盛陣猿馬場。所謂黑坂。嚮所過長坂也。又曰乘夜來襲。敵軍擾亂。爭赴南壑死者。一萬八千餘。導者曰。往日之戰。平軍據

公所謂源氏峯。為源軍之所陷。所謂南壑。即其西南壑也。今呼為地獄谷。天陰則往々鬼哭。余為之悵然。既謂維盛恃險。唯備東面。徼倖一戰。義仲自東麓進。分諸將出敵之腹脊。掩襲慶戰。而獲馬場。地形狹隘。不容大軍。果如導者言。不然滄桑之變。山壑有所異於古。亦未可知。惜夫國史粗脫。無所取徵。余顧格堂曰。子來時。不過近江乎。義仲乘勝。以捲席之勢入京師。恃功狼戾。粟津一敗。終取誅夷。藝天威者。莫不皆然。乃復路而還。白村中右折。山谷崎嶇。登降數百步。至九折。是為北麓。此間鐵路。頃方竣功。過觀隧道。長凡四百間餘。開鑿勞可知矣。顧栗殼古為北陸第一險。冒險阻險。遂關勝敗。今則瀛軍晨發金澤。食頃達富山。時勢之變亦甚矣。既取路新道。里餘抵竹橋。倩車而馳。哺時遺深谷。一浴醫疲。格堂曰。此游雖有懷古之感。所過山壑。規模褊小。未以足鼓舞先生之文思。余笑曰。為忘病在體。不以可無記也。八月某日。屬稿于深谷浴樓。

記小遊

竹溪孚

予有山水之癖。有暇則探名勝舊跡以為樂。今夏與舍弟。詣男山。四更發家。天暗星稀。過平城宮址。怪禽鳴斷。更覺寂寞。經歌姬谷。過初瀨。旭日僅昇。木津河滾々流煙靄模糊裡。暫從堤而往。過田邊。路傍有鋒立松。蓋征韓凱旋之遺跡云。行數町到酬恩菴。地極幽邃。有別乾坤之趣。蓋一休和尚老後閑居之地也。當南松樹鬱鬱環竹柵者為和尚之墓。本堂祭自作像。障壁則探幽齋之所描。庭園則石丈山之所造。堂前茶室。古雅可愛。足以知和尚之為人也。步野徑數十町。再傍堤而往。

一望青々。梨園點綴稻田之間。眺望頗佳。漸達男山。老樹夾路。森々晝暗。溪流嚙石。溪々環谷而流。石磴百折千曲。進于山巔。神廟壯偉燿燿。屹然衝天。彫刻之上。赭堊之色。無遺巧焉。拜畢憩茶亭。時已正午矣。華表左側。從坂路而西。路頗峻。疊以石階。樹間往々聞流鶯。高吟賴氏詩。而向山崎。山崎則在木津南流之西岸。僦舟而渡。風順帆張。舟截浪而奔。風吹袂以颺。倏忘炎熱。下舟則一路通山崎。旅客四集。貨物輻湊。為一小市。市之中央有路而西。左右皆松竹。風鳴而颺々。為叱咤千軍之聲。此古戰場也。

古墟夏半樹交陰。追憶當年腥血淋。義士傳功松嶺大。姦雄遺恨竹叢深。
山門鳥去聲鐘響。野徑人稀風竹吟。滿目凄々回首處。杜鵑叫破斷腸音。

豈堪懷古之淚乎哉。乃共汗拭而躋。山腹有寺。廢門僅覆仁王像。東堂祭觀音。西堂則納聖武帝所賜之寶(即打出之小槌也)故名寶寺云。東隅有塔。極曠觀。東望則遠山回環若拜。近岳羅列似揖。而男山一峰最近。巖然聳于雲表。翠黛可掬。環其麓而南流。萬頃一白。風帆出沒。漁笛轟然。吐煙掠浪而奔者。木津川流也。北望而南顧。則愛宕支派。峙立如怒。川流急奔似北。履屨之下。曲路一線。連雲鱗次。則山崎市也。雜僧懸示寺寶。乃問路。向天王山巔。峻坂崎嶇。尖岩嚙足。攀躋甚難。有飛瀑。泝巖角。貫石罅。濺々然與溪聲相和。合奏琴筑。漸躋則炎熱如燒。無樹蔭可寄身。熱砂火礫中。有旗立松舊跡之碑。則豐公遺跡。正西十數町。松下有碑。是殉國十七烈士割腹之地也。悵然久之。

層々危墮聳天穹。滿目茫茫望不窮。一代英雄靈氣滅。千秋功業霸圖空。

蟬鳴夏木遺墟在。燕語薰風曲徑通。數片苔碑無客吊。墳前松樹鬱葱々。
 從前路而下。渡川直向宇治。道遠暑酷。少憩樹陰。問行人以里程。僅二里。蹶起躍步數十町。又
 問則告曰三里。二人相視杳然。漸進有木標。記曰四里。於此氣惱脚疲。或休或步。日暮到平等院。
 蓋治歷三年。關白藤賴通構山莊於此。以攝朝政。其後用院號云。門前有碑。剔辭讀之則曰。
 花佐起天。美止奈留奈良波。後乃世爾。毛乃々不乃名毛。伊加天乃古良無。
 相傳此三位源公自盡之地。追慕其英風。不能去。

老樹森々淡夕曛。山門訪去思紛紛。亂蟬聲裡多碑石。淚落英雄自盡墳。
 進到院內。則蓮花繽紛。鳳凰堂巍然聳于晚空。青梁丹楹。歷々可辨。鼓閣息聲。鐘樓既默。共歸
 一寂。南方有源公遺跡之碑。苔蝕加以日落。殆巨讀。俯仰懷古。涕淚不能禁。嗚呼宇治之水。洋
 々流而不止焉。朝日之山。昭々輝而不滅焉。蓋公之英風與此相若。而腐儒或以成敗論公。豈堪嘆
 哉。請觀其遺物。曰軍旗。曰薙刀。都府樓之瓦片與絲節竹。則古樸而可愛。辭而投瀛車。一聲轟
 然截晚風而走。燒蟲篝火。點々映車窓。亦一奇觀。歸家則過二更。

筆筒銘

先生余幼時之師也能解風流。其文具盡雅。而筆筒為最。鑿銘於余詞曰。

木耶非木。筠耶非筠。厥理奇云。厥紋清新。毛穎所宅。泓氏卜隣。
 塵外之物。几上之珍。

石田黑子軒

漢詩

琶湖秋月

水碧如磨鏡。湛湛淡海州。琶湖明月白。笙嶼一天秋。

木嬰迂人

秋日書感二首

月色風聲也耐悲。今年況我失歸期。關山萬里他鄉夢。都付掌中酒一卮。
 年光將老幾蹉跎。落木蕭蕭奈我何。半夜風窓鄉夢破。月描庭竹影娑婆。

書感 錄二

悲歌擊筑不勝情。豎子登場漫博名。韓子元由說難敗。昌黎善作不平鳴。
 人生畢竟有憂慮。世事由來多變更。何似團圓天上月。千秋不失舊時明。

秋江泊月

昨從吟友酌高樓。載酒今年古渡頭。雁影翩翻詩興動。蟲音啾唧客愁稠。
 橫江白露秋三里。湧海金波月一舟。莫道人生窮又達。通宵濯足托長流。

笠置山懷古 錄二

看花看月幾星霜。多少行人吊戰場。日暮林深聞鬼哭。四山漠々白雲長。
 緬想當年事。興衰誰與論。空山閑白晝。古寺易黃昏。忠士功無沒。逆臣裔尚存。居民知大義。
 今日不通婚。

清水桃園

吊橋本景岳之墓

石田黑子軒

來吊越前志士靈。苔碑讀去日將傾。傷時夙結排奸黨。憂國曾爲攘虜盟。
慘澹牢中愁百種。呻吟聲裡淚千行。秋風似訴當年恨。瑟瑟墓邊樹上鳴。

菅公

識兼文武被恩榮。誰料左遷出帝城。姦士由來工誹謗。忠臣畢竟盡丹誠。
西漢明月光殊冷。北闕陰雲氣未晴。唯有梅花留正氣。千秋史上合名清。

吊古戰場

曠野茫茫萬里天。悄然吊古想當年。荒丘路絕翻黃葉。廢寺庭頽響暗泉。
扶杖僧歸疎雨外。結陣鴉亂夕陽邊。一堆枯骨無人吊。落木悲風冷墓煙。

田道間守

捧橋陵前血淚零。忠臣心事不堪聽。莫言相隔幽冥奠。難慰九泉先帝靈。

謁談山藤公廟

去攝入和山更奇。談山一角倚嵒巖。水魚親偶擎靴就。周孔學初尋道知。
深運忠謀除亂本。能教遜悌建治基。藤廟美似楠廟美。來見熒煌金碧祠。

謁藤島神社

奮然拔劍海中投。擊破幾千睡毗儻。大節當年名蓋世。精忠今日跡猶留。
英雄逝去魂無返。孤客吊來淚自流。無限悲風吹颯々。啼鴉落木舊祠秋。

秋湖月泛

梅 鳩 逸 人

日落風收桂櫓柔。隔湖煙樹數燈幽。魚龍出聽絃絃曲。鴻雁高鳴明月秋。
銀漢微明涵澹灩。間鷗浩蕩與優游。江天一色無雲翳。自訝斯身在玉樓。

越前途上

看山何厭路難行。得意襟鞭入棘荆。蛇逕僅通人數止。危崑欲墮馬還驚。
亂峰萬重眼難及。奇骨秋癯如劍立。山裂霜楓灑血紅。俯臨絕澗染潭碧。
回首西日林梢斜。行程杏々無際涯。徑將買取軟脚酒。奈此卅里無人家。

錦城樓清集

登堂盡異鄉。青眼對壺觴。排闥低山嶺。高欄俯竹篁。老松抽黛色。
寒月澹清粧。論文一樽酒。痛飲客愁忘。

秋 郊

落葉埋樵徑。疎林望不遮。秋光追瘦蝶。野趣採幽花。江山霜鐘遠。
村前酒旆斜。忽看鴻雁度。游子在天涯。



雜報

告新入生諸君

赤帝既に去りて金風浙瀝乾坤清肅紅葉峰を埋めて錦を綺り白蘋流を覆て布を裁す所謂遠水天と淨く近山霧に隠れて深し此の時に當り吾曹新に東西一百の俊髦健兒と提携するを得たり蓋吾曹の喜何者の此にしかん落葉他郷れ樹寒燈獨夜れ人と戀々古郷の天を眺めて袖を沾すを止めよ金城公園は錦を裁して諸士を迎へ犀川は流を清めて諸士を待つ吾曹は則ち襟を披きて談せん男子爲すあくんば則ち己む荷圖南の鵬翼を萬里に振ひ駿逸の驥足を千里に展べんと欲せば請ふ諸士來て吾北辰宏堂壇上に立ち口角沫を飛ばして雄辨を振ひ蘇張をして地下瞠若たふしめよ無聲堂に入ては則ち勇壯活潑所謂龍騰虎踔の技を演し

て孟育をして九泉に呆然たふしめよ孤燈明滅の下筆を執ては雄麗宕逸光焰萬丈の論を發し眉山の三蘇をして卷舌寒膽たらしめよ海は濶くして魚の躍るに従ひ天は高くして鳥の飛ぶに任せ辰章校規夫れ猶ほ此れ如し何の掣肘縛束のこれ有らん諸士奮て學術を練磨し元氣を修養せよ白山は巍峨として高く雲に聳ゆ則ち高嘯活歩いて浩然の氣を養ふに足る蓮湖は淼渺として遠く天に接と端艇を浮べて軀幹の健全を計るに足る健全ある身軀には健全ある精神宿すと彼の顔面青々として菜色を呈し徒々に書齋の囚人將又圖書の蠹蝨たるが如きは吾曹斷じて諸士の爲に取らざる所なり

入學式

芝田 徹心 今井 貞臣

工科三年

田中 義一

理科三年

鈴木 庸生

三部三年

中村 讓

法科二年

玉木 薰藏

二部二年

渡部 福太郎

三部二年

藤田 敏彦 舟木 重次郎

送舊教官迎新教官

金天白露を滴れて虫聲籬根に咽ひ、雁陣斜に飛んで霸客の腸を愁殺す、大島教授を始めとし、矢板、金井、内田、れ舊教官は、曩きに我校の

霖一句に涉りて洪溢大に來襲す、渺たる北海怒濤起り、尾山城頭秋氣頻に迫る時、余輩の新學年は微笑して來りぬ、

而して入學式は正に是れ九月十一日を以て靜勝館に舉行せられたり、當日は例によりて新學生と舊學生とは全く相分離せられ、等しく北面して館内左方に列し、職員は二分して、右方南面して着席せらるや、北條校長正面に進みて、靜に入學式の辭を述べられ、續きて莊重なる語氣をもて、學生心得を朗讀せらる、次に今回教鞭を本校に執られんとする新任教官の披露あり、更に中野教授より、本學年特待生の芳名を報せられ、之を以て本日の式を終へたり

特待生の姓名

法科三年

二上 兵治 田中 秀知

文科三年

教職に莅み、孳々たる薫陶を垂れ給ひしこと、既に年あり、然りとていへども、一朝秋風樹葉を搖落して、今や袖を東西に分ちて、己に我校を去らるゝの悲運に際せり、行路朝に越賓を迎へ夕に吳客を送るのも、猶一夜の縁は、以て惜別の袖を惹かむ、況んや師弟の縁あるものに於てをや、焉ぞ冷然死灰の如くあるに忍びんや、嗚呼離合聚散は天地の數、人力の以て左右すべきに非らず、されば、生等は今別るゝに臨んで、徒らに婦女子的惜別の涙を流すものに非らずといへども、諸師の薫陶を懐ひ、吾人の成効を願れば、轉た感謝と、懺悔との念は、勃然として胸中に磅礴し、暗涙潸然として滂沱するを禁ざる能はず、只願ふ、諸師攝養怠らず自重自愛せられんことを、

之に反して、中目、茨木、西田、戸田、及田邊の諸先生は、既に送れる諸師の後を襲ふて、新らに榎楚を我校に執らるゝに至れり、生等 歡喜諸師を迎へ、熱誠諸師に望む所多し、諸先生幸ひに教誨の化を垂れ、吾人を誘掖指導せよ、生等誓て其徳に酬ひんことを期すべし、終りに新任教官の略歴を掲ぐ事如次、

教授戸田海市 先生は明治廿五年六月専修學校を卒業し、法科大學政治科を選修し、同卅年其業を終へられたり、

教授中目覺 先生は身を第二高等學校に起し、進て文科大學に入り、歳ごとに特待生の桂冠を戴き、明治卅二年優等を以て獨逸科を卒業せられたり、

講師茨木清次郎 先生身を第四高等學校に起し、進て文科大學に入り、歳毎に特待生の桂冠を戴き明治卅二年優等を以て英文學科を卒業せられたり、

講師田邊隆次 先生は嘗て富山縣尋常中學校を

卒業し、東京早稻田専門學校文學部に入り、三年其業を終へ、更らに文科大學英文學科を選修し、明治卅二年七月其學を卒えられたり、

教授西田幾太郎 先生身を第四高等中學校に起し、明治廿七年文科大學哲學撰科を卒業し、同廿八年石川縣尋常中學校教諭となり、同廿九年三月我校の講師に莅まれ、同卅年更らに山口高等學校に移り、同卅二年七月再び我校に來りて教鞭を執らるゝに至れり、

卒業證書授與式

本校大學豫科第五回卒業證書授與式は、去る七月十日を以て神正ある倫理講堂に於て施行せられたり、當日午后一時、第一振の號鐘につれて職員生徒各其席に列し、威儀を正うして眞影を敬拜せり、第二振鐘により、第九師團長を初めとして、文武の諸官並びに當地名望の來賓諸氏は、堂々儀場に來臨せられたり、衆客席定

り座靜るや、北條校長進て、秩次順序に従ひ卒業證書を授與し、之を終りて、告辭を朗讀せられたり、次ぎに、卒業生總代西野忠次郎君答辭を陳べ、踵いで中野教務主幹は、前學年に關する報告を爲し、全く式を終れり、

校長の告辭

卒業生諸子、本日本校は諸子の爲めに此式典を擧げ、貴賓の來臨を請ひ、以て諸子に正に本校所定の課程を修め卒はり、我卒業生に要する所の品格を具備することを證明す、實に榮譽を謂ふ可し、此榮譽を附與する日は、一の責任を確定して之を諸子に負はしむるの時あることを記憶せざるべからず、今や國家泰運に方り、上下相共に務めて社會百般の機關を完備せんことを經營し、誠實有爲の人物の供給を待つこと頗る切なり、諸子今より進て帝國大學に入らば、能く本日附與せられたる資格を愛重し、常に深

く國家恩養の篤きに思ひを致し、刻苦碎勵し、夙夜匪懈、智徳を磨勵し其責任を全ふし、各々専門學科研修の目的を達し、以て國家の望 閣下の訓戒に差はざらんことを期す、聊か蕪詞みに副はんことを期せよ、即ち是れ諸子本日のを陳し以て答ふ、

第四高等學校大學豫科

第五回卒業生總代

西田忠次郎

榮譽を全うし、其責任を盡くす所以なり、而して教育の聖旨に奉對する所以の道も、亦此に外ならず、諸子旃を勉めよ、

當日卒業諸氏左の如し

卒業生總代の答辭

第一部 法科志望者(卅二人)

本日本校 生等の爲めに卒業證書授與の盛典を舉行せられ、朝野紳士の臨場を辱うす、生等の光榮何を以ての之に加へん、回顧すれば、生等本校に入學し各自其業と修むる茲に三年、今や其課程を修了し、今日の榮を得たるは洵に本校教養の深厚あるに賴る、生等深く感謝の至に堪へず、然れども、前途尙ほ遼遠なり、譬へば馬を峻坂に馳する中間足を駐むるの地なきが如し、豈思はざるべけんや、今又校長閣下の懇篤なる訓戒を蒙る、生等永く心肝に銘して、後來の指針と爲	鷹取 鶴次郎	漢學 鈴木 寛
戸川 文次郎	政治 吉田 伊三郎	法律 栗田 貞二
佐伯 敬一郎	同 長野 幹	政治 大藤 良太
倉茂 範行	同 小川 藏次郎	法律 鳥賀陽然良
福田 醇	同 佐々木 惣一	同 杉浦 茂
同 三好 程次郎	同 岡 八	同 高岡 敏郎
同 宮村 隆治	同 江尻 廉三	同 刑部 齊
同 阿部 善次	同 江尻 廉三	政治 秋澤 貞猪
同 阿部 善次	政治 下里 毅	政治 上田 範治

第二部 工科志望者(廿八人)

今西 良雄	法律 鷹取 鶴次郎	漢學 鈴木 寛
加藤 英重	政治 戸川 文次郎	機械 久保田 圭右
同 佐藤 左吉	政治 佐伯 敬一郎	造船 淺川 彰三
同 池田 繁	法律 倉茂 範行	土木 西田 辰三郎
野口 三四郎	法律 福田 醇	機械 小林 正旭
同 中西 喜久男	同 中山 佐之助	電氣 深尾 陸郎
同 梅野 盛之助	同 橋詰 益彌	機械 横濱 俊
同 渡部 忠壽	同 橋詰 益彌	土木 藤田 省五
同 文科志望者(十七人)	獨逸 宇佐美 全賢	機械 徳岡 精彦
古川 義天	獨逸 宇佐美 全賢	同 篠島 愛之助
史學 滋 賀 貞	史學 小川 簾三郎	電氣 高橋 亨二
同 阿部 莊二	哲學 植木 隆太郎	造船 高島 正人
同 藤井 義秀	國文 岩城 準太郎	船用 増田 知藏
史學 宮崎 小太郎	獨逸 草野 正義	土木 二宮 英雄
國文 松下 雅雄	國文 清水 貞治	同 荒木 三郎
哲學 永矢 太郎	史學 富田 他一	機械 西岡 忠夫
獨逸 佐々木 菊若	哲學 佐々木 嘉哉	造船 三島 爲雄
		造船 松原 武

同 佐々木 嘉哉	同 理科志望者(三人)
----------	-------------

測量 本莊 光敬 動植 今村 惠梁
同 白石 久夫

第三部 醫科志望者(十五人)

西野 忠次郎	石川日出鶴丸
岡本 重保	本莊 謙三郎
澤崎 寛制	荒木 榮三郎
杉本 元亞	松井 甚四郎
鈴木 清藏	安倍 仲雄
秦 又四郎	大里 政吉
深津 博	志賀 新
菊池 林作	
以上	

卒業生を送る

颯爽たる嵐氣遠林を籠め、崑嶠たる青巒群峰に
秀で、蒼翠滴たふんとする時、幾年の學業將
に成りて俊髦の衆才更に進で蘊奥を大學に窮め
んどす、寔に是れ驥駿足を千里に伸ばし、大鵬

翼を九霄に張らんとするもの、予輩后進の深く
敬慕して措く能はざるものなり、
回顧すれば辰章校旗炫耀たる處、卿等精勵嚴肅
よく、予輩を啓導し校風發揚是れ力め、實に后
進者をして深く鑑る處あふしむ、而して今や其
根底の漸く鞏固あらむとして卿等の影は長く金
城に消えにたり、
予輩蓮湖の邊、老榎の蔭、鼓柝の反響、熱球の
劈風は、再び軒々翹々たる卿等に瞰ふことを得
されども、幸に安せよ、蠢爾たる吾曹、非才蕙
愚と雖、亦聊か以て卿等う意に背かざらんこと
を是れ竭力するあふんとす、
行け卿等よ其道に、膨脹的邦家は偉人を渴望し
て止まず、希望ある、光明ある、來世紀の大舞
臺は桂冠を捧けて、實に卿等が大々的演舞を翹
望しつゝあるあり、夫れ歌々の生氣、永く辰章
の光明を傳へしむるあらば、實に余輩の感謝に

堪へざる處、
健在かれや、我先進諸卿！

校友會各部委員總會記事

秋高くして馬肥へたり、當に偉大の抱負を持し
て昏天れ雲を闊くべし、昨冬以來各級委員の慘
憺たる經營既に熟し、北辰星下の一大團結は校
友會として現はれたり、其の活動の第一着手と
して各部委員總會は實に去る十月二日月曜日
午後三時より無聲堂に於て開かれたり、數十名
の群賢俊秀還座蕭然、席定まりて北條會長起ち
て大略左の意味の演説ありたり、

本日各部委員の總會を開會するに當り、先づ
本會發達の概要を述べん、昨年末の頃より本
校内諸會を統一して一大家族的團體を組織
し、學藝体育を融和し、兼ねて校風を發揚す
るを目的とし、各級より委員を選出して其合
議の結果として本會を創始せり、其會則は既

に本學年の始めに當りて一般に配付せし處な
り、是によりて設備せられたる各部の事業を
進行せしめんが爲に本日を期し各部委員總會
を開會せざるに至れり、

諸氏に於ては團體的事業を進行せしめんが爲
に可成的各自意見の衝突を避け、一致和合以
て其進歩を圖られん事を希望す、
本會會計豫算は評議會の議決を経れば決定
せざれども、歳入一ヶ年大凡一千餘圓あるを
以て、以前北辰會の頃に比して多少膨脹せる
が如しと雖も、同時に其内容も亦複雑多端と
あり、運動會の費用の如きもの内より支出
せざるべからざるを以て、各部に於ては可及
的冗費を節し歳入の範圍内に於て事業の進行
を圖られたし、
來る十一月三日に施行すべき陸上運動會の準
備は一ヶ月以前より着手すべき筈なれども、

目下本會創業の際にて雜務多端あるを以て暫時是れが着手を延期すべし、各部委員諸氏に於ては、唯今より其該當部内の事務設備等の打合せあらん事を望む、右終りて各部委員は各々教場に、無聲堂に、思ひ思ひに陣を布きて協議夕刻に及びたり、是れ實に校友會の破蕾たり、先驅たり、努力せよ諸氏、無限の望みは諸氏の周圍に集まれり、惟ふに雨後續々新事業に勃興する期して而して待つべきのみ、

第四高等學校校友會規則

第一條 本會ノ目的ハ第四高等學校職員生徒一致融和シテ家族的團體ト爲リ徳性ヲ涵養シ學藝ヲ講究シ身體ヲ練磨シ以テ本校ノ校風ヲ發揚シ教育ノ資助ト爲スニアリ

第二條 本會ハ第四高等學校校友會ト稱ス

第三條 本會會員ハ左ノ二種ヨリ成ル

特別會員 通常會員
特別會員ハ本校職員ヨリ通常會員ハ本校生徒ヨリ成ル

但本校ノ卒業生其他本校ニ縁故アル者ハ贊助會員ト爲ルコトヲ得名譽會員ハ本會特ニ推戴スルコトアルヘシ

第四條 本會ヲ分チテ左ノ二大部トス

學藝部 運動部

第五條 學藝部ヲ分チテ十全會及北辰會ノ二會トシ十全會ハ醫學部ニ關係アル會員之ニ屬シ

北辰會ハ大學豫科ニ關係アル會員之ニ屬シ

十全會ハ之ヲ左ノ二小部ニ分ツ

講話部 雜誌部

北辰會ハ左ノ四小部ニ分ツ

講話部 演說討論部 語學部 雜誌部

第六條 十全會雜誌部北辰會雜誌部ニ於テ各雜誌ヲ發刊シ之ヲ十全會誌北辰會雜誌ト名ケ各

所屬會員ニ類ツ

第七條 運動部ヲ分チテ左ノ八小部トス

弓術部 劍術部 柔道部 ベトスボール部

部 ロンテニス部 フートボール部

遠足部 漕艇部

本部ニ於テハ右ノ外別ニ定ムル規約ニ依リ春秋二季ニ於テ大運動會ヲ開ク

第八條 本會ニハ左ノ役員ヲ置ク

會長一名 副會長一名 理事一名

代議員若干名 書記若干名

第九條 各小部ニ左ノ役員ヲ置ク

委員長一名 委員若干名

右ノ外必要ニ應シ適當ノ役員ヲ置クコトアル

第十條 役員ノ職掌左ノ如シ

會長ハ本會ヲ總理ス

副會長ハ會長ヲ輔佐シ會長事故アルトキハ之ヲ定ム

三代

理事ハ會長或ハ副會長ノ命ヲ受ケ會務ヲ整理

書記ハ理事ノ命ヲ受ケ庶務會計ニ從事ス

代議員ハ其組ヲ代表シ評議會ニ列ス

各小部ノ委員長ハ其部ヲ整理ス

委員ハ委員長ヲ助ケ其部ノ事務ニ從事ス

委員長ハ委員ノ中ニ就キ報告委員若干名ヲ定メ其部ニ於ケル主要ナル事項ヲ雜誌部ニ報告

セシム

第十一條 會長ニハ本校長ヲ副會長ニハ醫學部

主事ヲ推戴ス

第十二條 理事委員長及書記ハ特別會員中ニ就

キ委員報告委員及其他ノ役員ハ特別會員及通

常會員中ニ就キ會長之ヲ委囑ス

代議員ハ各組ヨリ二名宛其組ノ互選ニ依リ之

ヲ定ム

第十三條 役員ハ一ケ年ヲ以テ任期トシ更任期

ハ特別會員ヨリ成リタル役員及代議員ハ毎年

九月其他ノ役員ハ毎年四月トス

第十四條 本會重大ノ事件ヲ協議スル爲メ評議

會ヲ設ク

ヲ三期ニ分チ每一期金五拾錢宛各學期ノ授業
料ト同時ニ納附スヘキモノトス
但數期分ヲ前納スルモ妨ケナシ
贊助會員ニシテ雜誌ノ配布ヲ望ム者ハ其費用
ヲ前納スヘシ

第十五條 評議會ハ理事委員長及委員五分ノ一

并ニ代議員ヨリ成ル

第二十條 領收シタル會費ハ如何ナル事故アル
モ返附セス
第二十一條 本會會計年度ハ毎年九月ニ始リ翌
年八月ニ終ル

但會長ハ必要ニ應シ他ノ役員ヲ出席セシム

ルモノトス

第二十二條 本會經費豫算ノ編成ハ每會計年度
ノ初ニ於テ評議會ヲ開キ協議ヲ遂ケ會長ノ認
可ヲ經テ決定スルモノトス

第十六條 評議會ハ必要ニ應シ會長之ヲ招集ス

第十七條 評議會ノ議決ハ會長ノ認可ヲ經テ施

行スヘキモノトス

第二十三條 毎年度ノ收支決算ハ次年度ノ初ニ
於テ雜誌ヲ以テ報告ス

第十八條 本會一切ノ經費ハ特別會員及通常會

員ニ於テ負擔スルモノトス

第二十四條 本會現金ノ保管ハ會長ニ一任ス

第十九條 特別會員ハ相當ノ金額ヲ寄附スヘキ

モノトス

第二十五條 本會規則ハ評議會ノ協議ヲ遂ケ會
長ノ認可ヲ經ルニアラサレハ變更スルコトヲ

通常會員ノ會費ハ一ケ年金壹圓五拾錢トシ之

得ス

北辰會講話部委員

第二十六條 各小部細則ノ變更ハ其部ニ於テ規

定シ會長ノ認可ヲ經ヘシ

中野嘉作 野田貞
河合義文 茨木清次郎

第四高等學校校友會役員

明治三十二年十月

北辰會演說討論部委員

會長 北條 時敬 副會長 山崎 幹 長

理事 今井 省三

入江良之 戸田海市
北辰會語學部委員

書記 森川 正名 吉村 政行 長

永山 一昌 藤井 鏡

中俣 匡 村上 珍休
藤井 乙男 長屋 順耳

森 俊 山瀬 時吉

中目 覺 田部 隆次
村田 金太郎

十全會講話部委員

長 佐々木 達 下平 用彩

北辰會雜誌部委員

金子 治郎 村上 庄太 長

浦井 鐔一郎 宮川 熊三郎

高山 基重 末近 義介

堀 維孝 武笠 三

十全會雜誌部委員

長 小川 勝陳 編輯 加藤 慶三 長

弓術部委員

主計 松田 菊治 主任 加藤 慶三 長

櫻井 小平太 宮川 爲三

宮地 彦八郎

雜報

劔術部委員

長 秦 秀穂

福見 常太郎

柔道部委員

長 佐藤 法賢

日下 庄太郎

ベースボール部委員

長 中目 覺

ローンテニス部委員

長 市村 塘

フットボール部委員

長 杉森 此馬

遠足部委員

長 磯田 正謙

漕艇部委員

長 谷井 鋼三郎

同 田中 鉄吉

代議員

中西 政太郎

土田 久三郎

鈴木 仙太郎

森部 孝郎

鈴木 庸生

秋田 彌之助

長谷川 良三郎

下田 幸郎

安達 欽靖

入江 繁太郎

稻垣 米門

西山 實淳

米澤 啓

松田 研吉

二上 兵治

田中 義一

植村 卯三郎

駒田 定郎

渡部 福太郎

手塚 雄

高井 竹二郎

岡村 金藏

解良 幸吉

十全會講話部委員

中島 擴三

片岡 正

鈴木 仙太郎

山崎 芳太郎

松田 研吉

十全會雜誌部委員

醫 河野 勇

全 鳥飼 尹重

全 丸山 六郎

藝 駒屋 禮二

北辰會講話部委員

法 德田 虎稚

五 廣部 德三郎

全 舟木 重次郎

北辰會演說討論部委員

三 清水 賢一郎

法 秋田 彌之助

北辰會語學部委員

法 二上 兵治

文 松村 猪久次

二 掛飛 作太郎

文 吉田 堅吉

三 南 大曹

文 金澤 智融

北辰會雜誌部委員

法 石田 福松

理 鈴木 庸生

文 渡邊 良法

弓術部委員

醫 兒島 亮吉

理 石田 收藏

劔術部委員

醫 關口 通太郎

法 押原 三吉

法 林 慶太郎

柔道部委員

醫 湯本四郎右衛門

法 佐々木 久二

二 植村 富五郎

三 藤田 敏彦

文 垣内 松造

文 龍山 嚴雄

文 森 卷吉

全 早瀬 三求

醫 松村 魁

五 田中 鷹太郎

醫 土田 久三郎

法 伊佐 壽

ベニスボール部委員

二 井上 隼雄

秋 月 致

二 森谷 精一

致

ロンテニス部委員

清水 監藏

二 清水 秀夫

文三

三 柏原 省私

清水 監藏

フーボール部委員

揭載することせり

二 辻村 耕夫

金山 季逸

遠足部委員

多きは考

代議員全体ヲ以テ之ニ充ツ

て、哲學思想なるものは吾人の實行上に何等の

漕艇部委員

影響をも與へざるものありと、是れ甚だ誤れり、

四 村 田 讓

山崎 彦太郎

三 田中 秀知

東郷 吉

三 竹村 榮太

統一を要す、而して物理學は物質界於ける智識の

講話部第一例會

本會は、十月十六日物理教室に於て開かれたり、午下第二振終るや、中野部長開會の辭及將

の範圍内に於ける智識を統一するのみなるも、

哲學に至りては大に此と趣きを異にし、豫め其の範圍を設けるとかく、出來得る限り總ての智識を統一せんと求むるなり、是を以て物理學に於ては物質が實在するや否やは之を問はず、先づ實在を有すと假定せる上に於て、其の物質に關する智識を統一するを要す、其他諸學孰れも一定の假定を置くと雖も、哲學に至りては毫も之を許さず、其の研究の範圍を限らず、萬事萬象に於て嚴に之を討究して、以て其の眞理を知らんと欲するなり、而して其の討究の結果遂に討究し能ざる處に達すれば、是れ即ち哲學の終局あり、然のみならず宇宙の眞想は、到底人力を以て解すべからざるものなりとするが如き、是れ又哲學的智識統一の一種にして、即ち「スケプチック」と稱する學派あり、

哲學等總て之等を哲學と稱すと雖も、今余は此等々に於て云ふにわらず、所謂純正哲學に關して述ぶる所あらんとす、純正哲學にありては、先づ吾人の生息せる此の世界は如何なるものありや、天に星辰あり、地に山川あり、此等は果して如何なる原則によりて支配さるゝものなりや、自己と宇宙の關係は如何、自己が宇宙れ一部ありや、宇宙が自己の一部なりや、又宇宙及吾人を離れて、別に總てを統監するものありや否や等を研究するものあり、而して此等此事たる、世人の多くは曖昧不明の中に放抛し居る所れものあり、然るに今晰然として此等に關する一定の見解を保ち、確立不拔の信仰を有するに至らんか、必ずや其の信仰は實行に現はれ、大に日常生活に影響するや明かり、佛教に立つる佛陀耶蘇教の奉ずる神の如き、一の理想の本体を認識し、之を信仰して安心を得たるは時、又或る

哲學は以上述べたる如き者とせば、其研究する問題は如何なる者あるか、世人往々心理理論倫

識し、之を信仰して安心を得たるは時、又或る

一の「フキロンフキカル、ドクトリン」を信じ之に従ひて行動せんとするの時、豈日常生活に影響を及ぼさずとせんや、世人或は曰く、信仰と實行とは自ら別物なり、或る理想を信ずるも必然的に實行するを要せずと、此大に誤れり、余の所見を以てするに、信仰は必ず實行を伴はざるべからず、若し一の理想を信ずると稱する人にして、若し其の理想に従ひて行動せざるものなれば、尙ほ未だ之を深く信ぜざるものにして、幾千のの疑念あるを表示せるものあり、勿論物理學等に於ては、或る一の理論が、必ずしも直ちに應用し得らるゝものにあらず、理論と實際とは相分るゝも妨げありと雖も、哲學に至りては、其の攻究の對象之と異り、宇宙の根本萬事萬物の原則を發見するを目的とするもれば、決して之れ普通學問の解剖的方法のみを以て覺り得るものにあらず、之と直覺するの止むを得ざるものあるあり、斯く直覺によりて感下決して謬ならずと信じたる理想は、必ず之を實行に現さるべからず、又當然現れざるを得ざるあり、余以下少しく直覺の必用に付て述べんとす、元來哲學は、物理化學等と異り、一の現象を研究するにも、之を總ての方面よりして觀察し、其の統一を求むるものにして、例へば秋期草木の紅葉するの理を研究せんとするに、之を理化學的に解釋せば、凡そ植物が冬期休眠せんとする前に當りては、糖分著しく葉に生ずるが爲めに、紅葉を來すものにして、又日光によりて「クロフィル」の分解するとも、亦其の一原因なりと説明するを以て足れりとなすと雖も、哲學にありては、尙之に加ふるに、美の「エレメント」を加へ、此の美術上の觀察と、彼の理化學の精細なる觀察との間、果して關係を有する所ありや否やを研究すると、又必用あるにして、此の点

に至りては必ずしも解剖的方法のみを以て能く之を討究し得るものにあらず、「ゲーテ」、嘗て或人れ美術論を評して曰く、彼の論は恰も蝶の美形を論ずるに、之と解剖して研究するが如し、焉ぞ其の美の在る所を知るを得んや、只果なき個々分離せる骨肉皮膚を見るのみと、今吾人が此の時々刻々活動して息まざる宇宙の眞想を知らんとするに當りても、亦此と一般にして、決して解剖的方法によりて能く、之を討究し尽すを得べきものにあらず、只宇宙が常に活動しつゝある其の儘に於て、其れ眞想を直覺するの外途なきあり、佛教の嚴華にありては、宇宙は圓融無礙なりと、又天台にありては、一塵の中宇宙無礙の法を具せりと論ずるが如き、實に精密なる觀察にして、古代支那人の頭腦が、能く斯ある研究をなせしを驚かざるを得ざるなり、然りと雖も、果して其の眞に然りと感ずるに至りては、即ち又直覺に訴ふるの外能はざるなり、次に余は此の直覺によりて確信したる理想が、其の實行上に果して如何の影響を及ぼすやを論じ、哲學を以て單に精神病者の空論に過ぎざとあすが如き謬説を破せんとす、論より證據、古來今往、一世を煽動せる大哲にして單に理論のみによりて立てる人之れ存るあり、必ずや之と事實に現し、一に自己の理想に従ひて行動し、自己自身は即ち其の生きたる理想あるが如く、其の理想と其の實行とは又分つべうらざる密接の關係を保ちしなり、「スピノツァー」曰く、人間は運命によりて支配されるものなりと、又「カント」は「リーゼン」の法は絶對的命合方法ありとの説を立てたり、而して彼等は各々其の説の「パソニフキケーション」とも稱すべき生涯を終へたるなり、抑も人間生活の目的は如何、衣食住なるを、將た名譽あるか、否余は決して之を

以て肯ずると得ざるあり、平素は此等れ俗慾に驅られ、本來固有の心奥に存する眞性を忘却せる人と雖も、深夜獨り天穹を仰ぎて、星辰の燦然たるを觀察するの時、大洋の茫漠たるを望むの時、山嶽の高さに登る時、則ち心神自ら靜定に歸し、宇宙の何たるを知らんと求むるは傾向を生ずると、蓋し疑を容れず、況んや一朝逆境に陥り、不幸に困むの時、嗚呼此れ如何なるとぞ、如何なる原因によりて然るか、天道果して是なるかとの哲學的疑問は、必ず其の心底より湧き出づるや言を俟たざるなり、即ち哲學なるものにあらず、此の各人固有の哲學的觀念が、其境遇によりて必然發揮せしむれに外ならず、「ソクラテス」の起らしは、「ソフィスト」學派行はれ世潮の混亂せるを救はんとの動機によりてなり、釋伽の起らし、乃至耶穌の如き、皆此の

本來固有の哲學思想を發揚して、宇宙を達觀し精神的生命の人類に必用なるを悟り、之を以て弘く世人に安心を與へんこの目的を以て行動せしものと云ふべきなり、余は以上の如くにして、哲學の必然的に起りしものにして、又必用あるとを述べると雖も、決して之を以て哲學者たれと勸むるものにあらざ、元來哲學者たるものは其の理想を必ず實行に期せざるべからず、而して是れ大家傑にあらざんば能はざるとなるを以て、妄りに世人が哲學者たふんと企つるが如きは、却て一考を要すべきと信するなり、然りと雖も夫の各人固有の哲學思想を修養し、常に之を忘却せざるとは、大に人物を高尙するの益あるは、是れ争ふべからざるのとなり、或は説を爲す者あり、曰く「フキロソフキカル、ソート」無くとも、普通の「モーラリチー」を有すれば足れりと、是れ一

應道理あるが如くと雖も、凡そ其れ「モーラリチー」とは如何なることを云ふや、是れ恐らくは古來の習慣によりて定まれるものにして、之を守るにも、能く「モーラリチー」は何たるを知りて、「モーラリチー」の爲めに「モーラリチー」を守るにあらずして、一種の僞善と變ト、名譽心等の私利的分子を合むの傾きを免れざらんとす、是れ「モーラリチー」の眞意義を知らずして、漠然と之を守らんとするより起る弊害あり、況んや學術的智識を發達せる今日に於ては、從來慣習的に「モーラリチー」と認めたる忠孝仁義等を學術的に研究し、何が故に子は父に孝を尽すべきか、臣は君に忠を勤めざるべからざるを論ぜんとするに當り、之等を以て人類固有の本性の發現ありと直覺するを知らざる青年者流にありては、往々之等を解釋するに、物質的智識を應用し、其の極、遂に一大誤謬を來すとあ

るは實に憂懼すべきの現象あり、又彼の習慣によりて認むる「モーラリチー」は是れ單に感情によりて立てるものあれば、一旦其の感情が打陥たるの時、即ち善を行ふて善果を得ず、或は不逞の徒が終身幸福を以て卒ふるを見るや、忽にして一大打撃を蒙り、心神必平ならず、或は險惡なる想像を惹起せざるを保し難し、然るに若し其の人にして哲學的理想を有したらんには、或は之を以て宇宙の止むを得ざる理によりて然るありと自ら慰め、直ちに心は安寧を得べきあり、換言すれば單に「フキロソフキカル」によりて「モーラリチー」を認め、之を行はんとするは平素は不都合なきが如くなるも、一朝其の「フキロソフキカル」が害せらるるとあらんには、實に危険ある結果を生ずると往々にして之れあり、之を以て豫め先づ「リーゾニング」に訴へて、其の「モーラリチー」の眞義を覺し之を確信し置き、事

變に逢ふも決して心神の動搖を來さざらしむる
と必用ありと信ず、世人或は「モラリチー」を
「リーゾニング」に訴ふるとを以て、却て「モ
ラリチー」の神誓を瀆がすが如く論ずるものありと雖も、是れ尙ほ水に觸るゝを恐れて水練
を習はざる者にして、一朝洪水に遇ふとき實に
恐るべき災害を蒙るとを知らざるあり、現今學
生の弊害とも稱すべきは、古來の宗教及哲學等
に因習の弊として混し來れる迷信の分子を惡む
と共に、又併せて宗教及哲學其物を排斥し、
單に學び得たる物質的智識を貴び、之を以て直
ちに精神界に應用せんと試むると是れなり、故
に余は斷じて曰く現今學生たちむもの、宜しく
先づ孔孟の書、若くはカーライル、エマーソン、
ゲーテ等の聖賢の書を繕き、科學以外の眞理
あるとを考へ、哲學的思想又は精神的修養を發
達すべきものなり、

西田先生の講話半にして校長の來臨を得たり、
而して西田先生の熱心なる語調は縷々切れず、
暮雲既に低く、糝糊色を辨せざるに及び、稍や
く其講を終へられたり、

伊藤侯爵來學

今般北陸漫遊の途に就ける侯爵一行は、十八、
十九の兩日、金城に淹留せらるゝを機として、我
校の士親しく、維新の元勳として、明治の政治
家として、勢望朝野に高き春畝侯に接せんこと
を欲し、有禮以て其來學を乞ひ、幸ひに其願を
容れられ、十月十九日正午靜勝館に於て、其演
説を聴くとを得たるは、生等の大ひに名譽とす
る所なり、演壇は館の中央に設けられ、半千の
生徒之に對ひ、一行の椅子は教官の座と相向ふ、
正午の振鐘既に鳴り終り、聽衆先を競ふて席に
着き、引領十數刻、轆車緩く響を止めて、春畝
侯は一行は、間もなく、校長に誘はれて、館内

に現はれたり、騒囂頓に止んで館内爲めに整肅、
聽衆悄然として侯の一行を迎ふ、
校長、先づ登壇し、本日侯の來學を得、親しく
其聲咳に接する事を得たるは、我校れ大に名譽
とする所あるを感謝し、侯を聽衆に紹介して壇
を降れり、

春畝侯の春秋已に老ひたりと云へども、當年の
元氣猶耗ひず、温顔長髯を捻して壇上に立ち、
一睨聽者の神魂を洞視し、我北陸漫遊中、此校
に於て諸君と相見ゆることを得たるは、我最も名
譽とする者の一なりと、靜かに唇を破つて縷々
半時に及べり、其大略を記せば、維新已後我邦
の文明は、駸々として大に進歩せしといへども、
現今猶歐洲諸強國に比して、劣る所尠しとせざ
るは國民れ仄とに嘆ずる所あり。而して方今文
明の進歩たるや、盡く秩序的にして不秩序の者
を採らざる事、進歩日に新ある獨國に就きて視

るも明なる事實あり、退いて、諸子は此秩序の
る生活を營み、日新月歩の智識を涵養せらるゝ
もれにして、國家が諸子の將來に於て望を囑す
るや甚だ重大なり、諸子願くは奮勵盡瘁して能
く其業を終へ、他日社會に出で、忠誠以て國家
の文明を裨益せよ、實に我邦將來運命は諸子
の双肩に存す、只其學生たるの間は、能く師に
服従せよ、將に其服従は、他日衆人を統御せ
んとするに於て其効果尠からざるべし、諸子よ、
國家百年の爲めに自重自愛せよと、懇篤至誠、
能く其赤心を聽者の服中に推移せられたり、
次に侯爵一行の隨員たる末松男は、侯の演説の
終るを待ち、長身瀾歩、爽快なる語調を以て系統
的談話を他日に約し、劈頭一聲、National lifeの
進歩を企圖せよと絶呼し、此進歩たるや無形的
のものあるが故に、智識修養に其身を委ぬる諸
子の將來は、國家れ爲め、社會の爲め、大に重きを

置かるゝものあるや明らかり、方今社會文明は機

Hanff: Die Sangerin

藤代學士

關は、諸子勉學の爲めに、尠からざる便利を與ふ

(獨逸を撰みし者)

るこいへども、誤りて若し此便利を濫用せば、國

Tennyson: The Princess

小泉先生

家社會に對して何の面目かあらむ、諸子幸ひに

Gaeth and Lynette.

斯便利を利用して、國民生命は發達を計れよと、

(英語を撰みしもの)

猶此一行は、校庭教場を巡視し、門前の觀迎を

佛語初歩

エック先生

辭して、金城學友會の招聘に應し第一中學に赴

心理學

松本講師

けり、

紫式部日記

黒川講師

東京帝國大學通信

哲學概論

ケーベル先生

國文學科 國文學科は專任の教授は一人もかく

詩經及荀子

重野博士

唯一の教授たる上田博士は本務多忙にして出席

莊子

根本博士

は一月に二三度あるのみ黒川講師は話にならず

此外隨意科として赤堀氏の國文ある筈なれども

殆んど專任の姿あるは芳賀矢一助教授のみ隨意

未だ始まらずフロレンツ氏の獨文學は氏歸國中

科は迂生心理學を撰び傍ら村上博士の涅槃論に

に付き休業に候(隼水生の折簡に據る)

出席致居候毎日の學科及教科書は左の如く

歴史學科 リース師の歴史研究法は例ぞ引き

神樂及僱馬樂並びに國文法

て遊ぶ様か心地す萬國史は富山房のプリントあ

國語研究法及聲音學

れども言常に以外に渉る而して氏粗音なれば言

上田博士

芳賀學士

語朗兎ならず困入候坪井氏の史學は外國行の爲

佛語初歩

エツク氏

め當分欠席なれども最も苦しめる由次に市村講

參考書の如きは多く獨語にして其數の多きこと

師の支那史は最も當分進捗す去年は住かり苦め

書籍目錄を見て茫然たる有様に候嗚呼終日鵝舌

たるより要之先づ外國語さへ甘く出來れば易々

嗚々れ語々聞き蟹行の字を讀み外人の糟粕を嘗

たるものあり左に教課書及時間數を擧ぐ

めて吃々たゞざるべからざるのを思へば誠に馬

歴史研究法

リース先生

萬國史

一週三時間

秋風零露、すみかれし郷關を辭して、遠き越路

史學

一週三時間

坪井先生

支那史

一週三時間

市村講師

國史

一週一時間

田中先生

日本經濟史

一週二時間

内田先生

古文書學

一週一時間

星野博士

哲學概論

一週四時間

ケーベル氏

外國語は三國中撰擇二、各三時間

を演ずるの日は來りぬ、

Die Lat 3 ten Ritter

藤代講師

v. marienbury-Hanff.

テニソン詩集

小泉先生

話會は、無聲堂裏に開られぬ、

來賓。校長の君を始め今井舎監、杉森教授

校舎増築

務諸氏、さては舊寮生の面々、文目もわかぬ風

今夏已來、高廓を以て本館に通せる一棟の木造

雨の闇に、波を打てて集りける、

館は、校の左翼に築かれ、圖書館及測量器械室

演説。世界を周遊したる瑞西の旅行家某が、

並びに圖書室に充てられんとす、我校由來校舎

ゴビの沙漠を横斷したる勇氣をのべて、沈痛摯

の狹隘を告ぐや既に久し、然れども未だ之が増

實以て体育を奨励されたるは校長閣下なり、今

築を企圖せしものなりしか、幸ひにして現校

井杉森の二教授の流暢にして愉快なる物語、次

長赴任已來、數多の改良と共に、此工事を起し

で佐野先生の訓諭、みか是れ肝銘忘るべからざ

て、今や將さに其落成の期に迫れり、生等深く

るの箴言、舊寮生高見君も、滔々として得意れ

其意を赫し、歡喜以て之を賀き、之に加ふるに、

卓辨を振ひ、現寮生二三亦之に應じぬ、何れ劣

校舎の修繕、煉藏の新築は、日に益々舊粧を改

らぬ氣焔萬丈、

めんことす、唯願ふ、此美なる校舎に住む學生諸

右終て、勇士劔を舞ふて、足を頓り天を突き地

士よ、切ろに内的修養を勉めて、能く外界と美

を斬るあり、吟ずる聲、唸る音、喧々囂々、左

に耻づるなりかん事を期せよ、

藤先生も吟じ、高見君も躍り、名のみ無聲堂、

公認下宿の設立

校風を修養せんと欲せば、自寮寮の發達を計る

今は衆々堂と化し去り、尙七十餘番の福引あり

にしくはあし、されば自寮寮の盛衰消長は、當

歡を盡して散會せり、時に雨稍霽れて、金城の

局者の將さに等閑に附とべき者に非ず、我校自

夜嵐冷かに面を撲つ、

局者の將さに等閑に附とべき者に非ず、我校自

寮寮の狹隘は以て生徒數の五分の一を容るゝに

演説討論部記事

凄風颯々、疎雨蕭々、遙に亞弗利加の天を望め

過ぎず、これ生等の仄に遺憾とむる所あり、現

は、暗雲漲り、陰風滿ち、トランスバールの地

校長閣下曩きに我校の弘綱を執るに至り、深く

も、將さに修羅と巷に化せんことを、近くは帝國

金城人士の情を察し、いたく通常下宿屋の弊風

議會の開期は日一日に迫り、日比野原頭、時あ

を嘆し、空しく無垢の青年を以て此汚濁に染ま

ふぬ花を咲かせんとして、策士論客はよれが畫

しむるを欲せず、經營苦心の結果、此に体操教

策に忙かし、嗟落葉風に亂れて、鳥雀頻りに翼

師の監督に據れる公認下宿屋なるものと設立

をふち、氣宇豪宕、滿校の士氣亦大に昂る、此

し、大に學生の便利を計り、通常下宿の弊を救

時に當て、久しく聞くを得ざりし、同窓諸君が、

ひ、以て校風修養の一助を計りしめんとす、此事

卓勵風發、雷霆を震懾せしめ、風雲を叱咤する

業たるや、學校として左程喜ぶべきものにあら

底の辨論を聞かため、我演説討論部は、十月

ずと云へども、寮舎の狹隘は、遂に此止むを得

十四日、演説會を生徒扣所に於て開きぬ、聽衆

ざる公認下宿なるものを醸生せしに外ならざる

未だ會場の半に達せず、稍や寂寞の感なきにし

なり、嗟々、苟くも校風の發揚を欲するもの、

もあらざりしが、時間勵行の聲と共に、午下第

誰り寮舎の増築を囑せざるものあらんや、當局

一の振響猶は終えざるに、

者幸ひに夫れ之を思へ、

戸田先生登壇し、開會の辭を述べられ、尋で演

説に付き縷々説き出し、昔時希臘に於ける演説

説に付き縷々説き出し、昔時希臘に於ける演説

獎勵の事より、近世歐米各國に於ける演説修練の有様、議院に於ける或は大統領撰擧げ時に於ける演説を一々引證して、如何に西洋人は演説に熱心にして、且巧あるかを説き、之に反して東洋諸國は、如斯獎勵修練なきため、甚だ辨説に拙たかし、支那に於ては、戰國時代に、蘇秦張儀等有數の辨論家もありしが、我國に於ては、只僅に宗教社會に、二三の例を見るのみにして、一般演説てふ事には實に劣等の國民なりと斷言して、大に慨然たりしが更々に語をつゞけ、其重なる原因は、支那文學我國に入りし以來、言文一致は廢れ、只文章練磨に熱心とるに至りしと、及び封建制度家庭れ有様、殊に我國道德の標準は消極的にして、活動的人を排し、所謂内氣なる者を尊びしと等にありと論じ、更らに策勵一番して曰く、我國過去の事情は已に斯くの如くなりし故、辨説も左程必要あかりしが、

今や社會は身分的より契約的に進み、人民皆平等とあり、徒らに權力を以て人を壓する能はず、精確に且つ巧妙に思想を言ひ現はす事の必要益々切なるに至れり、世運既に斯くの如し、況んや將來各國と競争場裡に馳騁し、宇内に活步せんとする櫻花國民たるもの、これが獎勵練磨を忽にして可なかんやと論結して降壇せむたり、次に、森本辰二君出づ、實は演説練修のため登壇せしものにて、敢て意見を吐露せんために非ず、殊に昨今は運動會のチャンに撰ばれ、トレ申譯いと慇懃に、從容本論に入れり、吾人が旅行する時、或は山に入る時、或は河を渡る時、其歩む所、其踏む所、時一時に、日一日に異なると雖も、そは單に行路にして、吾人の目的とする所更に存するが如く、人生は千狀萬態、複雜極りなきも、終局は目的は社會の進歩を計り

て、天職を全ふする事に外ならずと極單簡に述べる、余りに丁寧反覆あるは、時に聽者をして倦厭の念を起さしめ、辨者の取らざる所なるも、余りに簡單なるは、演説として亦首肯し能はざる所也、然るに君は人生の目的を大問題を捕へ來り、僅々數分間に演説し去られたり、其大膽なる事、却て聽衆を呆然たらしむ、懸念は懸念なり、念に懸けるとなりと、諧謔の裡に説き起して、懸念なき人は萬事に成効する能はず、懸念なき國民は國を富強に爲す能はず、古來英雄豪傑と稱せられし人も、富強を以て宇内に濶歩せし國民も、只懸念てふ事の深うりしためなり、懸念懸念、懸念は實に成効の母なりと呼び、古來の偉人豪傑を捉へ來り、彼等が成効如何と懸念の多少とを比較論證し、更らに蒙古人の懸念、印度人の懸念に論及し、一轉露國人の懸念に入り、彼等が懸念れ大なるに驚き、

我國の懸念比較的少なきを慨嘆し、今にして大懸念を持つに非ざれば、我國は永く各國の後塵に墜若たらざるを得ざるべしと論結し、間々滑稽を加へて、得意の愛嬌を振返はし、笑語の裡、喝采の聲に送られて壇を下りしは、坂口重一君なり、君の沈着なる態度は、大に望を囑すべきもれありと云へども、語調平談にして熱誠なきは、大に遺憾とする所也』

續々詰めのけし聽衆は既に堂に滿ち、一種の活氣を帯ひ來りし時、人生の墮落てふ演題の下に、乗杉嘉壽君現はれ、大聲叱呼、我亦社會墮落の一標本なりと開口一番し、滔々たる天下、同情かく博愛なく、小人權を得て道德彌々腐敗し、義士隠れて正義光を放たず、欺偽竊盜殺人等あらゆる罪惡は年々其數を増し、權謀術數摠ての奸策は月々流行し、士風衰退したる、道義の潰亂したる、今日より甚ぶしきはあし、咄、何

等の墮落や、如此人生の墮落するに至りしは、田中法學士委員の紹介によりて悠然登壇せよ全く國民の頭腦に、未來の觀念……宗教の觀念欠乏せしに歸因すと論じ、一轉宇宙の無極なると、人の性靈は大極と共に無極なることを説明し、右來宗教界に於ける偉人の行動を引證して、未來の觀念を以て、永遠の希望に燃ゆる人は、如何に高潔にして且偉大なりしを説き、最後に宗教の觀念を起す時は、斯墮落の裡より救ひ出さるゝの時ありと言ひ、願くば國民一般をして宗教心を起さしめ、以て此渾沌たる濁世を救へよと、訓誡策勵、意氣軒昂、懦夫も劍を按ずるの概ありしが、説くと半ばにして、常に天の一方を睨し、二三分も囁嚅たる如きに至ては、尙一段の練磨を望まざるを得ず、而して往々論旨明兜かゞざる所ありしも、萬斛の熱血は能く前辨士の平談を破りて、場内一段の活氣を添ふるに至れり、次に、

を笑殺し、又間接税とは酒税等れ如く、税が上れば價も騰り、詰り買ふ人が税をも合せ拂ふ事にかる者をいふ、故に消費税とも云ふ、之に反して官吏の所得税の如く、所得税が倍にありたりとて、俸給が増す筈なく、詰り本人自ら其税を拂はざるべうとざるものを直接税と云ふ、而して直接税間接税二者何れを重にとべきやは、中々重大なる問題ありとて、最後に此が利害得失を論じて降壇せられたり、先生温顔微笑の間に論旨を反覆再説して、能く論旨を了解せしめられたるは、大に生等の感謝する所なり』

四偶に起り喝采の聲は、仄とに「うけ徳利」の辨士として、演説場裡に雄辨れ名高き安田力君を迎へぬ、君既に演壇に立ち、一杯の冷水に其口を濕すや、聴衆の鳴りは稍やく静まりぬ、今や君か口角破れ、ピツチ高き音調は清く玻窓に響けり、曰く、我演説討論部は既に校友會の一

られ、大に人品を下す如き、世間往々其例を見る事なりと、婆心懇ろに、爲替相場につき其換算法等簡単に説明し、更に我國歳入の事に付き、更らに語を續け、二十七年頃には八千萬圓の歳入ありしが、現今にては貳億貳千萬圓殆んど三倍近くの歳入とありしを告げ、此等歳入の重なるものは租税にして、壹億四千萬圓を占め、其外官有財産即ち山林等よりの収入、及び鐵道郵便電信或は横須賀れ造船所九州の製鉄所千住の羅紗製造所等よりの収入、即ち政府の營業とも云ふべき勸業よりの収入、其外願書登録等より出づる手数料印紙税、及び雜収入の下に出づる収入等より支辨するものなり、爰に注意すべきは、鐵道郵便電信等より出づる収入は税にあふざること、間接税と直接税との區別とあり、近頃堂々新聞紙上に、或は公開演説に、三税復舊など、鐵道郵便電信等の収入を租税に加へ居る

部となり、大に從來と面目を異にしたる上は、彌々獎勵し以て盛大に至らしめざるべからざるに、何事ぞ、校友會創立以來第一回の演說會に於て、此の如く出席者殊に職員諸君の出席少きを見んとはと、大に其冷淡を責め、更に本題學生氣質に入りて、維新前後の書生氣質より説き起して、學生氣質は世の風潮と大に關連するを述べ、今日世上幾多の方面に蠢動しつつある人を見よ、渠等は名利れ外何物もある、名にあらずんば則ち利、利にあらずんば則ち名、又兩者の外に出でず、然り尤も利の多き問題は尤も目覺ましき運動を生ずるにあらずや、うる墮落せる世に處する學生の氣質、實に言ふに忍びざるあり、諸君余が言を疑ふか、遠く例を求むるに及ばず、乞ふ當地に於ける學生の行動を看よ、北辰の記章、四條の銀線、金鈕の正服嚴めしく、大道狹しと濶歩するも、學校の門に

入り、教場に入るに至つて、左顧右省、人心に従ふて事を爲し、顔色を伺ふて事を謀り、亦一片の意氣なく、一定の見識なきにあらずや、由來日本男子は意氣を貴ぶ、至誠の發する所水火を辭せず、一死國に報ひて我事足る、是れ日本男子の本色にあらずや、然るに輕舉浮動寸毫も至誠の情なく、一滴憂國の涙かし、而も日本の相續者と云ひ、二十世紀の新舞臺に活動せんと云ふ、余輩長大息せざらんと欲するも能はざるなりと、勵聲憤慨彼等が走屍行肉を罵倒し、彼等が腐敗を悲しみ、大に聽衆を猛省と促がし、言々皆肺肝より出て、句々皆涙を含む、嗚呼朱一滴尙は盆水を赤ふす、况んや萬滴をや、聽衆覺せず襟を正し、肅然として咳聲に發せざりき、次席の辨士西村清之助君、出雲國てふ演題にて、冒頭に金澤より出雲の國に至る通路及び旅費を説き、いよ／＼出雲の國に入り、かの國の

名所古蹟を秩序よく明細に説明し、聽者をして座ながら彼國に遊ぶの感あらしめ、次に出雲人の起因を語り、其風俗習慣より更に地勢に論及して、出雲國の發達は實に水運の便に在りと局を結び、尙は暑中休暇等に來遊せらるゝ方あらば、余は喜んで案内の勞を取るべしと、徹頭徹尾丁寧親切に、講話的に述べられたり、演題は演題、殊に前辨士か卓勵風發的演說の後のこと、謹嚴なる君が辨も稍や聽劣りしは惜あり

西村君の演說終るや佐野先生登壇、校友會員諸君に望むとして、徐ろに四高の來歴より説き、二十六年の學生氣風に至り、當時は笠を着て登校し、既にて校内を濶歩するもれもありて、奇態ある觀あるも要するに一般質朴ありし、從て活氣もあり、擊劍、柔道、ベースボール、弓或ハロソテニス等、各部の運動非常に盛なりし、尤

も稍や粗暴に涉りし事もありて、ために往々醫學部生と衝突せる如きとありしも、二十八年來兩部の調和全く成り、亦昔日の如きとなく、大學豫科に北辰會、醫學部に十全會起り、共に盛かりしが、年を追ふて學生一般奢侈に流れ、また當年の活氣なく、各部運動は月を追ふて寂寥に赴き、雜誌は年を追ふて減少し、二十八年前後の學生と、現今の學生とは、質朴活氣の点に於ても、萬事の熱心に於ても、實に天地雲泥の差ありと、一々統計を示して其言の虚なきを證し、今回校友會は此等の衰頹を挽回し、大學豫科生と醫學部生との別なく、協和親睦、以て「純良なる校風」を發揚せんために起りしものあれば、精意熱心、學生として須臾も忽忘にすべからざる學生心得五項目を守り、以て其本旨を達せざるべからずと、更に五項目を詳説し、

「純良なる校風」てふ事は前四項の結果とも見る

べく、前四項を服膺實踐し、加ふるに協和輯睦を以てせば、「純良ある校風」自ら發揚せん、吾校則の條項百二十有條あるも、前段陳へし心得の五項を履行する爲めに設けるものにして、一言以て之を蔽へば、自重克己に外ならず、願くば猛省一番、早く此念を養成せよと、大に聽衆の注意を促がして、降壇せらるゝや、法二に於てさるものありと知られたる高見之通君は演壇に立てり、其態度の悠々迫らざる、其辨の輕快暢達なる、慥に君が場慣れたるを首肯せしむ、君は英雄の末路と人生觀を論せんとして、靜に説き起して曰く、傳へ聞く安心の法とは萬壑の松風を聽くにありと、余嘗て日光に遊び、月夜舟を中禪寺湖に浮べ、寂寞たる山裏、耳を颯々たる松風に寄せ、恨を英雄の末路に瀝き、感極まり舟のまに／＼茫然たると久しく、釋然として悟り得たる人生觀、これ予諸君の靜

聽を汚がさんとせむる人生觀なりと、夫より英雄の末路、渠等が晩年の心事を説き、必畢安心は怯懼の念の盡きたる處、換言すれば「靜」てふ事に外ならず、嗚呼靜、この靜、之を水の靜に例せば、時に白沫迸る激浪となるも、收まれば激々たる細波に立てず、回天の事業如何に天地を震動するも、靜に歸し靜に安んずることを知ざれば、其立脚地も動搖し、終に末路の悲しむべきに至ると、更に孔孟の言を引き、述べ去り述べ來り滔々數萬言、優に一文章をなせし君が演説も、憾むらくは筆及ばず、僅かに其大意を寫して満足するの不得止に出でたり、今や時は移りて日没に迫り、聽衆の過半は既に散りたりしが、去らば去れ、余は余れ思ふ所を述べんと、いと熱心に小國が大國の間に介立し、而も能く其獨立を保持する所以の者は、一に權力平均のためなり、之を例せば權力平均は平和は一大柱

本にして、此が周圍に多くの繩を結び、其端を列國が有するもの、如く、故に列國の權力平均せらるゝ間は、平和を維持せらるゝも、一朝其力に過不及生する時は、平和の大柱倒れ、興敗これによつて起ると、中世時代に於ける列國の關係を述べて、如何に權力平均は各國の位置をして安全からしむるを證し、かくの如く權力平均は平和を維持するため必要なりと雖も、強食弱肉の世、殊に權謀術數を以て唯一の手段とせる外交は、之を蹂躪し之を破壊し、以て私慾を逞ふせんとする今日の如き世に於ては、亦頼みとするに足らずとして、一轉強國の策を講し、強國の三元素、Organization, Federal position, Material wealth を擧げて、一々我國狀に照し、第一第二は歐米諸國に劣らざるも、第三に至りては未だ及ばず、願くば諸君全力を第三に傾注あらんとせよ、演題は權力平均、辨士は中村了

君、眞に憂國の熱情を以て述べられしは、大に感服すべきも、惜しや語勢の緩急及び態度は未だ蕪境に達せず、君旂を勉めよ、最後に入江先生登壇、今日醫學部死体解剖祭に列席し、英雄からぬ三百余人の末路を思ふて、余も亦一種の人生觀を起し、爲めに計らざる遲刻し、諸君の演説を初めより聞くに能はざりしは、甚だ遺憾とせむる所、實は既に閉會の事と思へしに、聽衆の過半は散し、日既に暮れしにも關せず、尙ほ盛に演説せらるゝを見、其熱心に感じ、余も登壇したりとて、我國に於て古來演説なるものは獎勵されざるのみならず、武士氣質或は孔孟の教等により、又或は人其位置を得れば、多少辨説拙くとも、話を事柄に付能く謹聽する故、左程必要なくして練修もせざりしが、世の進歩は之を許さず、今や益々辨説の必要感するに至れり、而して辨には佞辨多辨、能辨雄辨等

ありて、多くは多辨に陥り易き故、語勢れ緩急及び姿勢に注意して、常に熱心を以て所謂滿腔の赤誠を以て演説することを勉めざるべからずとて、演説練修につき懇々注意を與へて閉會を告げられたり、時に暮色玻璃窓を襲ふて暗く、聽衆殘るもの僅々二十余名に過ぎざりき、尤も辨説を練磨するれ手段は、身自ら之を爲すれみにあらず、人の演説を聞き、音聲態度如何を察し、以て他山の石となす、亦そけ一手段たり、故に今後益々聽衆の多りふんことを望む、

擊劒紅白勝負記事

明治の治世に、生民偷安して、絶へて外に備へず、南嶽爲めに嘲を献下、北隴爲めに笑を騰げ、飛鷺は風に乗せて我に迫り、餓獅我を屠ふんとする日あり、無聲翁、常に之を憂ふ、義士を招て、劒を事とする茲に年あり、計らず今年敗獵

して大に得たり、獲る所の者は熊に非ず羆に非ず、發しては萬朶の櫻となり凝りては百鍊の鉄と爲り狄夷量り知る可のふざるの好青年之れあり、今や郊外人罕にして深巷輪寡く、白日光を惜み、黒雲聚雨を下す日に繁し、梧桐一たび落ちて、雪霰將に至らんとす、笑ふ可し、世人は蟄居の策に窮々たり、如此んば、之れ零落草莽に同一きのみ、之れ養士の術に非ず、戀風皮膚を裂くも、炎熱骨肉を焦らうすも、被服常に完からざるも、三旬僅に九食するも、尙ほ身を護る一長の劒あふば、將に立ちて壘峒に倚ふんと欲するは、之れ養士の術あり、頃日、諸士肥腕の歎に絶へず、即ち部署して長劒を舞し、偷安に眠れる豨夫をして、一見昏眸を開くしめ、再見心膽を寒のふしめ、三見自覺する所あらしめんとし、日を期して十月廿一日となし、午后二時より始めむとす、

此れ日、晴雲雨を捲て去り、秋風搖々、丹楓翻て水に影じ、長松は綠翠、菊花は馥郁、世人徒らに烹龍炮鳳の玉脂を夢み、皓齒細腰の歌舞を羨むの時、獨り紉袴球を打ち、彼を逐ひ此れに抛ち、聲は轟々天地を震動し、左しも廣き游戲場尙ほ狭きを歎つ如く、隅より隅に馳驅するは、之れ自任抱負を以て滿されたる四高の諸氏、筆

共に東面着席せり、秦石川の兩先生、押原林氏等其の間に幹旋し、其の舉動の揚るを見るも、兩雄陣頭に相搏し慘礫たる光景、凜然として心膽を寒うふむるの期の、迫れるを知るに足る、少焉にして驛驪嘶き、左に長劒を横へ、右手を舉げて呼て曰く、

赤軍 古屋 茂雄

劒を棄て、氣を養ふの様あり、忽にして秋風一陣、過ぐる處鈴々の音を傳へたり、健兒叫で曰く、時は既に熟せり、無聲の翁必ず聲を漏せし

今日死を決して敵と雌雄を争はんとす、いざと思ふ輩は、名乗り出よと、言葉の未だ盡きざるに

小手、面、白軍 國本 順作

空しく鳩島の飼を涉獵るに任せり、既にして、集りたる者百餘人に至りぬ、嗚呼知りぬ、彼の鈴々たる音は兼て白軍の將と歌はれたる林氏、部下の士桐山氏と劒を弄するれ音なりしを、然りと雖も、勇士既に勢を揃ふ、北條校長、今井入江佐野岩崎楠の諸先生を従へ、

氏、御太刀の切れ味拜見仕ふんと、打出たるに、きやつ、苦き奴ころと、思ひし儘、直ちに打棄てんとすれば、國本も左る者、沈着然として太刀を地に伏せ、戦場の習穢き舉動し給ふたと云へば、此方も心得て、互に一禮しつ等しく太刀を手に取るよと見る間に、懸聲諸共に、早や擊

て懸れり、観る者聲を吞で勝敗を氣遣ひつ、此斯道の面々に非ざるも明に了知せる事を得可の初軍を以て、全軍の勝敗をトせんとせり、赤士の亂打に對する白士は、刀と多く使ふを好まざる者の好く、右に遁れ左に燃り、空を打たしめて敵の隙を窺ふよと思ふや、御面と高く響きたり、兩軍等しく喧轟たる間に、

赤軍 加茂 貫一郎

面、白軍 甘利 四郎

氏、代て出で、其の勢最も猛く、既に敵をバ撃ちし者の如く、舉動傲然、向ふ見ずの太刀使ひ、撃ちつる刀は屢々地を斫れり、彼が刀は使用に任へずと、他所目より思ふ刹那、腕諸共に切り落されたり、左も勇々しき劔士かあと、喝采場裏に持て囃さる、彼は

面、赤軍 石井 二郎

氏となん云へる、剛勇者流と戦はざるを得ざるに至れり、赤士の剛勇は以て白士を破る可く、白士の疲勞は既に敵の剛勇に當る能はざるは、

重々しく出たるは

同、同、逆胴、赤軍 福岡 嘉洋

氏あり、氏が沈着なる舉動に引換へ、白士の輕躁なる舉動は、其の對應の程をも笑止けれ、白士が打ち下す太刀は見事に空をのみ打ち、赤士が身を變はず迅早は、能く敵の勢に倚りて敵を打ち、左胴より右に向けて切り着けたる一撃は、正しく敵の脊骨を横斷せり、此れ時早し彼の時遅し、赤士太刀を振ふよと見る間に雲と突く計りある大兵、

白軍 高瀬 修良

氏をば見事に左胴より切り落したり、観る者暫し鳴も鎮めず、其の功を賞せしを白軍は益々い

白軍 齋藤 堅徳

氏を指し向けたり、我こそ敵の首打取らめと進みし齋藤氏、暫しは渡り合ひしも、其の力敵せ

斯道の面々に非ざるも明に了知せる事を得可し、然りと雖ども、白士も左る者、敵の組まんとするを容易に組ましはせて、二三合渡り合ひしも、赤士の打下す刀に見事頭蓋を割られ地に伏せり、赤士の威益々揚らんとする刹那、躍出敵に組まんとせしは

氏其れ人なり、兩雄計らず今日雌雄を決す、其の剛力何れを優とし、何れと劣とするよと能はず、接戦互に打下す刀は、山嵐に散迷ふ吹雪の如く、何れが何れを打下したる者か、確と認むる由も無し、其の間に御面と叫びしは確に白士の口より迷りたり、然りと雖ども、赤士の技劣りて敗を取りしに非ず、技は能く敵に權衡するも、前回より持續したる疲勞は、彼をして刀の使をひるましめ、口惜き穢名を荷ふに至りたり、身方れ敗、之を雪がずに置く可きりと

ざるを知りてか、謀を變て滑稽的計略を用ひたり、福岡氏も稍々之には持て餘したるも、敵に備ふること愈々嚴あり、其の青眼に構へたる所、撃て入る可き隙は無し、やがて太刀風戦ぐよと見る間に、敵は左胴より切り棄てられたり、哀れ無雙の勇士哉我を彼が首打取り敵の心膽を寒のらゝめんと、力み合ひたる甲斐も無く福岡氏は喝采場裏に退却せり、

嗚呼氏が退却!!!、氏が退却は只に敵をして無念の感を抱けしのみならず、觀者をして其れ喜を空しくせしめたり、吾曹氏に望を屬せる多あり、氏は眞に太刀を使ふ者と云ふ可し、心ある者は知らん、太刀の尖端を以て敵を打つ之れ刀にして折れずんば即ち傷淺し、又稍々刀の横腹を以て敵を打つ厭ひ無きに非ず、刀はもと扁平、然も百鍊の鉄其の脆きこと土塊の如し、少毫も横腹を使用せば折斷を

可し、假令折斷せざるも敢て敵を切るこ能

赤軍 島 誠 郁

はざるあり、然るに氏に至りては然らず、其の一舉一打敵を殺すに非ざれば深く敵れ肉躰を截斷せり、故に吾人氏に望む切なり、何ぞ早輕引退を以て事と爲す、氏は疲勞は未だ外に表はれず、氏は呼吸は未だ迫らず、然るに敢て引退を成そ、之れ將を如何にせん、自ら將を信するの深きとするも、敵の力は未だ量り知る能はざるに非ずや、吾人深く氏を責む、氏も亦其の責は辭する能はざる者あり、

衆皆期す、龍奔虎走、天暗く風起り、殺氣慘愴、剪屠伏屍の戰場たふんと、何ぞ計らん、芙蓉の帳中嫦娥の舞技を見んとは、劔を擧げ將に打たんとする所、柳腰の舞扇を弄するが如く、足を揚げ目を怒らすの所、佳人の飄飄立ちて舞ふが如く、暫くにして舞扇空に翻るよと思ふや、審判官、面と叫ぶ、哀れ紅裙の士、白装の怨となり消へ失せり、今や白装の士と組て生を賭する者、垂髪花顔の細腰者流に非らずんば果して誰か、蓮歩耻を捨て出て來りたるの士は、

氏が引退は計らず場内の喧噪を起せり、彼方に嘲笑、此方に罵倒、或は劔を要して憤るあり、

面、赤軍 有馬 章三郎

或は裂音、口角泡を飛すあり、神聖なる無聲堂、空しく野人の集合所と變せんとする瞬時、衆目は期せずして一つの中心に集りたり、其の中心こそは

面、白軍 櫻林 格造

氏あり、蓮歩耻を含むと見しは觀者の妄想ありき、氏が步調は堂々、威は劇場を壓し、氣は既に敵を呑めり、假令劔を振ふなきも、吾曹氏が櫻林氏の匹儒に非ざるを知る、況んや猛虎に貸すに爪牙を以てず、争て刃向ふ敵のある可きや、

果せる哉氏が亂打の太刀風に日本心の櫻花、心脆くも散にけり、之に代りて

胴、白軍 原田加賀之助

小手、白軍 鈴木 美雄
氏出で、互に席を南北に構へ、つと相對せるは何れを劣らぬ勇士あり、忽にして龍蛇馳騫、豹

ありと、青龍刀を旋回し、眞先に進み來る敵軍の士東某をば胴切りにし、續て來たる敵をば取りてひしがんとせしも、敵は赤軍の柱石と仰がれ、勇武絶倫の士と聞へたる

虎奔逸、劔戟相摩して雷霆起り、天地晦冥、咫尺を辨せざるの間に在りて、凱歌は鈴木氏の口より歌はれたり、之に組まんと出たるは

小手、赤軍 水谷 重忠

面、赤軍 東 爲 作
氏なり、軀幹大からず舉止威あらず、自ら頼む所非ざれば、何ぞ名乗り出でんや、往年の橋辨慶計らず今日茲に再現せり、辨慶が薙ぎたつる

氏なれば、容易に靡く様もなし、互に刀稜を消り、怒聲天地に轟き、雲生ト龍翔り、殺氣鏘々たり、戰將に酣ならんとする頃、白士漸く隙を表はしたり、赤士は炯眼何ぞ之を逸せんや、忽ち飛躍、敵の右腕を切斷せり、其の迅早、其れ

勢、猛烈なるも、義經が飛走の術には及ぶ能はざりけん、遂に平身低頭降を請へり、之を見た

鳴り静まざる中に、呼吸つぐ閉も無く、既に戦

る白軍の士、身方の女々しき舉動に憤り、單身長板橋に馬と立て、滿面朱を漲らし大聲叱呼して曰く、我は丹波の佳人

面、白軍 本 儀 正

氏との間に開かれたり、重忠氏憤闘能く勉めたるも、如何なる蹉跌にやありけん、驀然、地上

に倒れたりを見るより早く太刀採り直ほし上段に構へたり、左しもれ正氏も稍々ひるむ氣色見へしが、忽ち突入敵の頭體見掛けて打下したる

迅早は、疾風耳と蔽ふに閑あらざりき、然りと雖ども、命は天なり正氏も亦空しく敵の

同、小手、赤軍 阿部 維嚴

氏に腕切り落されたり、斯くと見る

白軍 松王 數男

氏打て出で、沈剛にして能く戦ひたるも、敵の勝勢に當ること能はざりか、身方の士に應援を求めたり、夫れと知りたる

面、同、逆胴、白軍 田宮 春策

氏、悠然劍匣を彈し、指搦敵を量り、磅礪せる英氣を一時に迸出せしめ、切て懸かりたる刃に逆ふ敵は絶て無く、阿部となん云へる武夫も難かく左胴より切て棄て、續て來たる武士

赤軍 増井 佐藏

赤軍 小杉 謹八

氏等を、共に刀の錆と切て棄てたり、古今無雙の勇士よと東西より一時に湧きたる喝采に、暫し疲勞を養ひたり、之を見たる

赤軍 藤田 敏彦

氏、好機乗ずべしとあし、驟然一刀をあびせんとせり、然れども白士の英氣未だ盡さず、打込む太刀先見事に受流し、敵の頭蓋眞二つに割りたる儘、再び地上に倒れたり、此の時、氏が鼻息既に喘々しく歸去來を賦する既に早しとせず、一時に起れる歡聲は、氏に全勝の榮を保たしめんとする者の如し、既にして氏は、拍手の下に血醒き劍を杖て退けり、

殺氣益々甚しく、氣は雲を生い風を起し、龍翔り虎走る、忽然、蒼天暗黒、龍鬪虎搏し、翻然、縱聘奔馳、水に蛟龍を斷ち、陸に虎豹を剗り、意氣益々壯にして鉄腕愈々確實に、

一度び刀を挙げば既に敵の髑髏は瓜分し、劍を振へば忽ち敵は横斷地に伏し、太刀風戦げば敵の腕地に落ち、迅早鬼神も量り知る能はず、於此乎、兩軍共に能く太刀を使ふと云ふ可きなり、士能く太刀を使へば、吾曹不知の間、彼に敵に之に黨し、目皆裂け腕動き、膝

自分前に進み、不慮絶叫するに至る、忽ち鏘々怒聲天地を震動せり、之れかん、

赤軍 山崎 駿二

面、逆胴、白軍 鳥海 太郎

氏、刀稜を消り、危機一髪、何れの土塊たらずんば止み難き勢なり、兩雄等しく合し、忽ち倒るよと見しは誤解にして、赤士は左の腋下より心臟にうけて斷ち切られ、白士は其の傍に趾を敷きて御胴と叫びあり、次で身方は耻を雪がんとて

氏凜然劍を横へ、奮捥一番打込む太刀筋の凄然たるは、嚮日石川中學に劍を以て知られたるの名に背のず、暫くは獅子奮迅の勢を逞ふせしも如何なる機運にやありけん、拙くも敵に後ろを見せ給ひたり、續きて

突キ 赤軍 藤田 茂吉

氏、霸氣面に滿ち竹刀上段に構へたる所、將に宮本武藏が得意の曲を演せんとするに似たり、

左しもの敵も容易には打て入らず、其能く打て入らざりしは氣既に彼に吞まれたるなり、果せる哉飛龍の勢を以て突き込みたる一刀に、哀れ氣管は斷ち切られたり、藤田氏の妙技も

突キ、逆胴、白軍 桐山 誠一

氏の剛力には敵し得ざりしにや、端なく吹き來る刃風に靡きけり、今や旭日の勢を得たる白士と勝敗を決する者は誰かふん、必ず、勇武衆に秀で、機を見て逸せざるの士に非ずんば能はざ

赤軍 時澤 貞義

るなり、果せる哉、太刀を青眼に構へたる所、天裂け地砕くるも、一步も動くことあらど、此の好勇士を誰とかなす、

赤軍 河合 文吉

氏其の人なり、白士 容易には打て係らず、暫し對峙し隙を窮ひしが、忽ち喚聲天に轟き、右進左撃、突撃奮闘、接戦之を久ふして、御突き、御面の聲は其の先後を知る能はず、同じく響きたり、然れども其の先ある者は白士は叫、後なる者は赤士の呼、炯々之を事とする審判官、塵埃の微も毛髮の細も、亦違ふことなく、勝は白士の手に歸したり、續きて

面、赤軍 内藤 竜太郎

氏、軀幹こそ長大ならね、筋骨逞しく、眼光炯々、然も打込む太刀筋は、悉く規矩あり、侮る可からざるは好敵手なり、忽ち突進敵の頭をば切り取りたり、當時旭將軍と歌はれし桐山氏の

戦役は、白軍の士氣を鼓舞し、

胴、白軍 駒田 定郎 (當勝負へ、稿)

氏、屹然太刀を斜青眼に構へ、敵を眼下に見下し大聲叱呼すれば、草木爲めに震動し、山鳴りし大應へ、肅靜たる天候、俄に變りて、將に怒濤海を捲き、砂礫高く舞ひ、慘慄たる光景を映せんとせし刹那、敵刀を見事に受け流し、返す太刀に敵の胴をば兩斷し、凱歌を擧げて歸らんとする時、背後より聲高く、我こそは

面、赤軍 鈴木 幸親

と申す者あり、尋常に勝負仕らんと、呼ばはりしうば、身は近頃の病に疲勞して既に勇氣あく、彼と再度は合戦は覺束かきを知りつゝも、武士たる者の、何條、後る目たかき最後と遂んや、古齋藤實盛は喜て頭を手塚太郎に與へたり、いでや進みて彼に首を渡さんと、健氣に太刀を取り直ほし寸間し刀稜を消りしが、遂に頭を敵に

渡したり、彼れが徜徉死に着きしは、身方の元氣を益々振はし、

面、白軍 竹村 榮太

氏、吾が一刀に復讐仕らんと打て出で、難なく敵の頭を打取れり、之を見たる

面、赤軍 丹治 善藏

氏、何ぞ默然たふんや、悠然劍と持して立ち上りたるや敵は忽ち地に倒れたり、此の時

小手、白軍 伊澤 一 亮

氏敵ながら天晴なる舉動に見せしが、我こそ彼に組まめと、太刀上段に構へ、隙もあらば撃ての、ふんとせり、赤士も左ある者、斜青眼に構へたる所、何處に一つの隙もあし、兩雄互角の勢を以て雌雄を決せ、夫れ兩存せざんべ兩碎せんのみ、其の危、累卵の如し、忽ちにして天晦暝、殺氣凄然、紅雪紛々、衆不覺戰慄す、此の時既に赤士の魂天上に昇れり、

小手、赤軍 永江 直三

之を見て好敵手逸す可からずと、二三合渡り合ひに、敵は武士の魂たる太刀を地に落せり、哀れ其の時、白士は大に疲勞せり、機を見るに敏なる永江氏、すかさず打ち込み見事に腕をば切り取り、片足舉げての疾足は、滑稽的にも氏が石川中學出身たるを示したる者か、時に群衆を押し分け自ら名乗り出で來りたるは、

面、白軍 佐々木 久二

氏あり、満面朱を漲らしたるは張飛に類するも、策略圖に中り兵を用ひて違はざる孔明の如く、戦ひは壯にして麗、猛にして規矩自ら整然、赤士は目算齟齬して、持久の策を講せしも、白士の強勢に對峙する能はずやありけん、打ち込む刃に頭蓋兩斷せられたり、此の好勇士喝采場裏に歓迎せらるゝ間に、

小手、同、胴、赤軍 三橋 篤敬

氏、雄々しく太刀取り舉げ、秋水閃くや否や敵をバ切て棄たり、續きて

白軍 田中 鷹太郎

氏、渾身の勇を太刀先に集め、凜然敵に對し構ふる太刀に一点れ隙なきも、赤士も劍道に於て幽玄の域を涉りし者、何條輕々敵に勝利を讓る可き、睥睨數瞬、忽ちにして奔流怒濤の修羅場

は演下出されたり、一瞬は一瞬と活氣を加へ、

面、白軍將 林 慶太郎

閃く劍光は其の毎度吾人が心膽を寒からしめ、骨は碎け身は焦るゝが如き思なり、空中忽ち閃く一陣の電光!!此れ永く白士をして劍を囓碎するの怨たふしめさり、次で小首を傾けつゝ出陣せしは之れ斯道れ達人、

白軍 大藤 直哉

氏あり、其の傾頭せるは術數を胸に畫策するの様なり、忽ち肩を動し左手を舉げ、漂然一聲、之れ其の敵に挑むの様あり、足自ら刻み劍端自

於此兩軍死者赤軍に二十一人、白軍に十八人、而して今や兩軍共に一士も殘さず終局の目的たる兩將太刀取て相見へずんば能はざるに至れり、然り而して、勝敗は多く時運に依る、優者必ず常に勝ち、劣者必ず常に敗ると云ふ

の定命あるに非ず、優者も亦時に敗れ、劣者も亦時に勝つことを得可し、然れども優者の敗は敗れて餘榮あり、劣者の勝は勝ちて餘光あし、今日兩將劍を把て相見ゆ、一つは敗れずんば一つは勝つ能はざるは數の理あり、故に敢て勝敗を以て、兩將れ優劣を論せずと雖ども唯櫻花散て尙ほ芳さを望むのみ、所謂赤軍の將は、嘗て郷里に在るの日、籠手田氏の道場に高山奥村氏等に師仕し劍道の幽玄を究め島根中學に時めさし勇士

胴、赤軍將 大橋 貞勝

氏なり、一は然り、他は本校に在りて劍性の神通を得、能く太刀を賀取するを以て聞へたる林氏あり、斯くて兩將共に悠然、太刀を青眼に構へて南北相對す、時は四時三十八分なり、衆皆拍手之を迎ふ、喝采は未だ止まず、兩將未だ動かす、呼吸をこらして隙を窺ふは、將に雙龍れ

玉を争はんとするが如し、衆は白と呼び、紅と叫ぶ、手に汗を握り一刻千秋の思をなして兩雄の劍端を交ゆるを待てり、やがて懸聲諸共に太刀は動きたり、打込む劍端は雲を生じ、業の迅早かる耳を蔽ふに閑あふざるも規矩自ら整然、一進一退毫も亂れず、縦横突擊苟もせず、身の動かざる磐石の如く、神閑に意定て始て一撃す、吾曹嚮の劍士と相見るに自ら境域を異にするが如し、夫れ兩雄の今日雌雄を決するは、唯一人の勝敗に非ず全軍の名聲悉く一撃の太刀下に

潜匿す、往昔那須宗高、扇眼を射るの意、亦今日兩將の意に髣髴たる者あらんや、其の輕々兩虎角鬪的の舉動を成し一時に歡聲を求むる無き蓋し故あるなり、時に或人兩將の心を咏して曰く、

十年磨一劍 霜刃未曾試 今日把似君 誰有不平事

と、又和して曰く、

いさぎよく散るうめでたき櫻花

ありて世の中はてのあければ

五彩を色どり、飛雁列を成して獨り得々たり、

(一枝、濱萩稿)

と、僅に二十字、能く劍客の意を表し、唯に三十一文字、能く戰士の節を表せり、見る見る兩雄の太刀先き返へて、氣は愈々重く衆人の視線は焼点フヤカスに集合し、肩呼吸カマブを呑んで睨睨愈々過たず時に何ぞ計らん、白將は既に赤將の一と太刀を胸に蒙りしとは、歡聲忽ち四方に起り天地爲めに喧轟たり、兩將の血戰續くこと四分三十秒、斯くて此の日の月桂冠は赤軍の手に落ち、衆を以て赤軍萬歳を歌はしめたり、夫れ勝者必ず勝ちしか、敗者必ず敗れし、戰は斯くして終り、今迄敵視せる兩軍も、兩雄胃を脱ぎて共に談笑すれば、釋然和樂して一芥の疑念なく、三五隊を組みて歡聲と間に退却し、武場又無聲に、颯々たる秋風は樹枝を鳴らし、天は高くして暮景



投書心得

- 一 投書は本會原稿用紙に限り御認めありたし
- 一 長文と雖も全文を寄贈せざれば掲載せざ
- 一 雜誌上には雅號のみを記載することを許せども姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし
- 一 學理上の論說諸小會の記事雅文詩歌等續々寄投ありたし勿論言の或は政治を論じ或は徳義に背くものは一切掲載致さざるべし

明治三十二年十二月十一日印刷
 明治三十二年十二月十五日發行

編輯兼發行者

印刷者

印刷所

發行所

吉村政行

生沼倍男

商法施
前設

活版合資會社

同縣同市高岡町三十四番地

同縣同市水町二番丁二十九番地

第四高等學校校友會

明治二十八年三月二十五日